

中国四川省東部農村の家族と婚姻 - 長江上流域豊都県の事例研究

著者	肖 紅燕
学位授与大学	東洋大学
取得学位	博士
学位の分野	社会学
報告番号	甲第36号
学位授与年月日	1996-03-25
URL	http://id.nii.ac.jp/1060/00000133/

平成7年度

博士学位請求論文

中国四川省東部農村の家族と婚姻

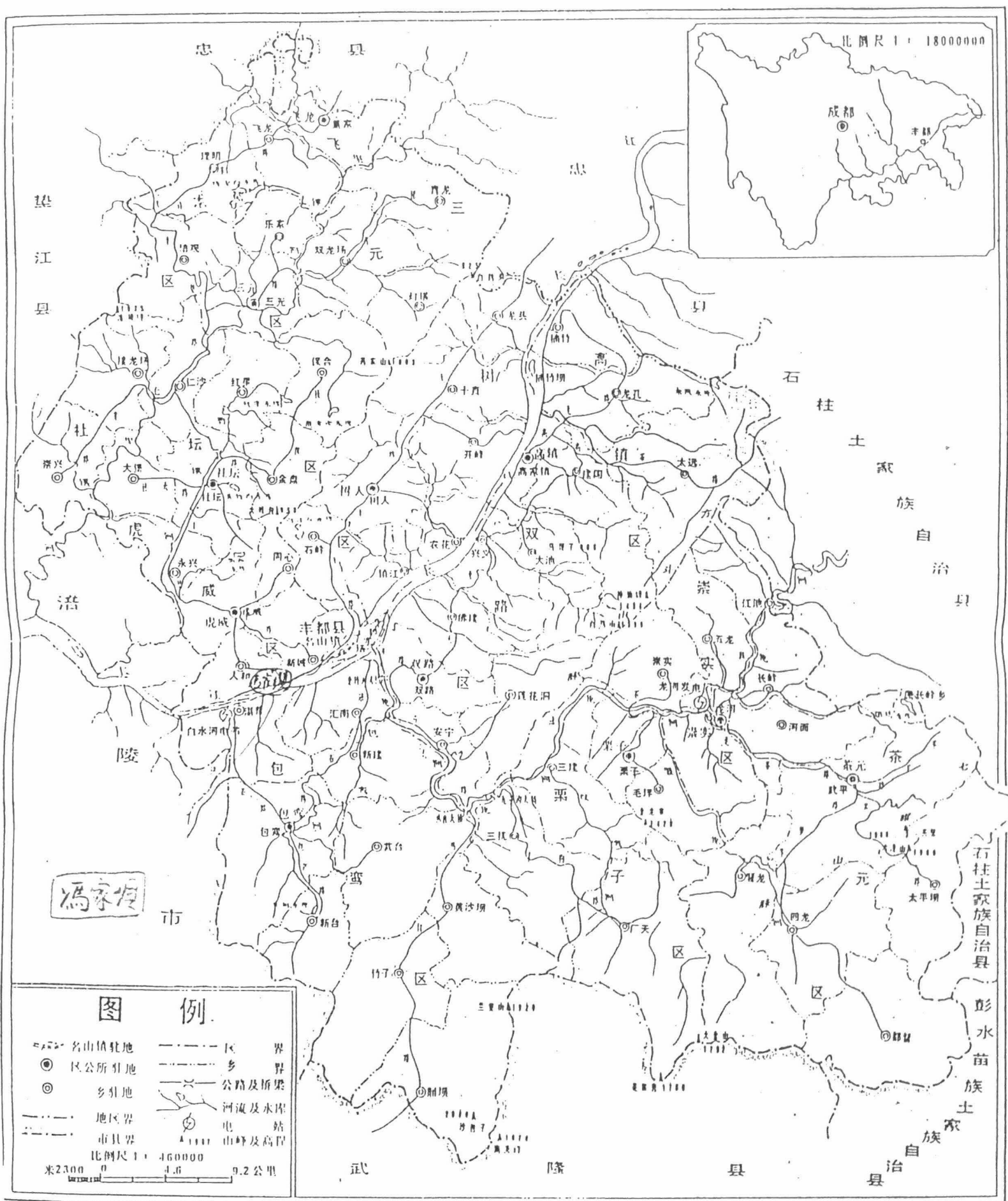
--長江上流域豊都県の事例研究--

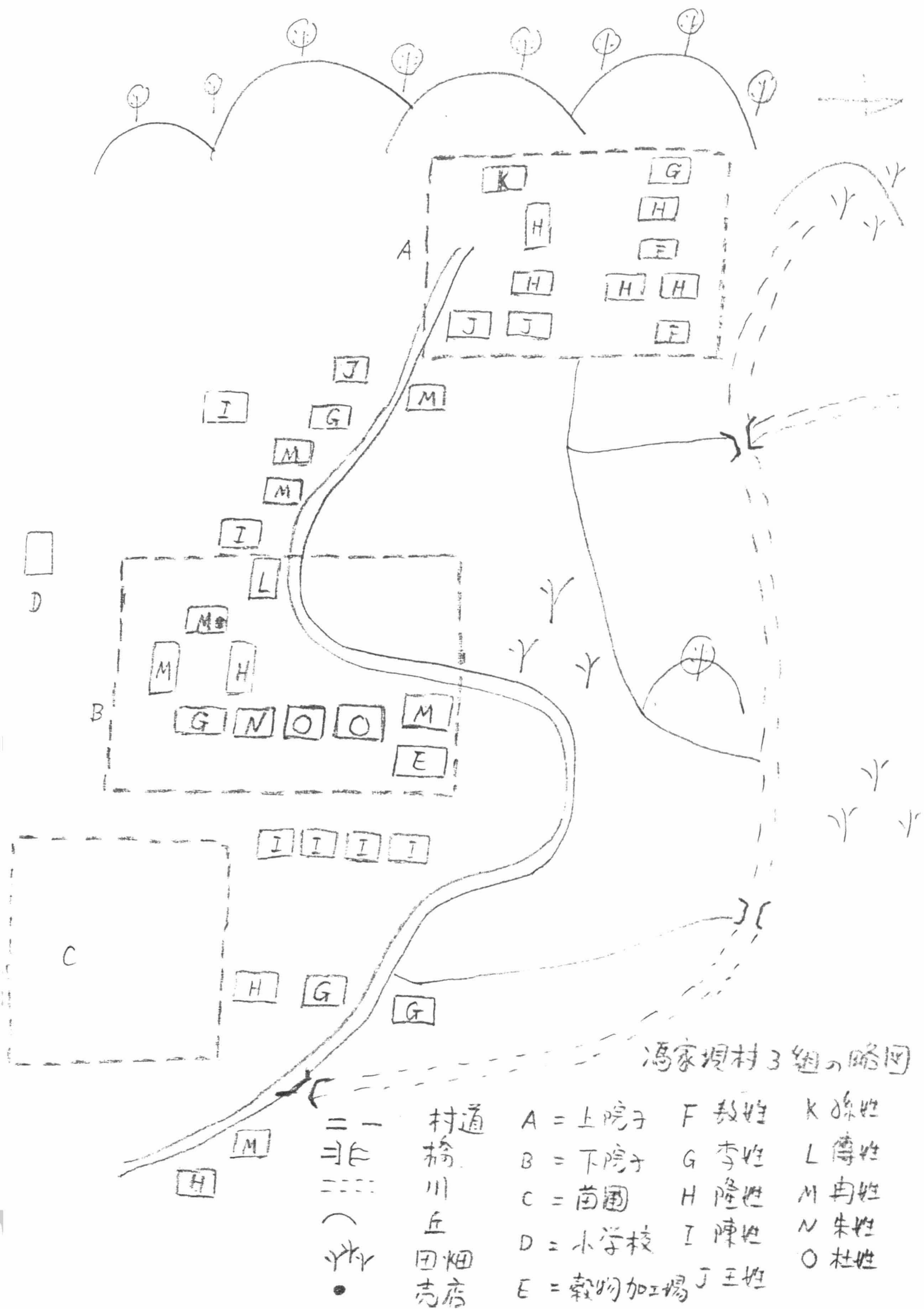
東洋大学社会学研究科

社会学専攻

肖 紅燕

丰都县地图





中国四川省東部農村の家族と婚姻 --長江上流域豊都県の事例研究--

肖 紅燕

序章 従来の漢族農村研究と本調査の目的 1
1. 農村の家族・婚姻・村落をめぐる従来の研究 //
2. 四川省の家族・婚姻・村落構造の研究 2
3. 調査の目的 5
第1章 調査地の概要 8
第1節 豊都県の概要 //
第2節 村落の概況 10
1. 地理的位置・気候・生業 //
2. 人口構成・世帯規模 13
3. 学校教育 14
第2章 村落の歴史的背景 27
第1節 村の移住伝説 //
1. 姓氏分布 //
(1) 現在の姓氏分布 //
(2) 民国期の姓氏分布 //
2. 村の形成説 28
第2節 宋・元・明・清期の四川と移民 36
1. 宋・元時代の社会経済 //
2. 明・清時代の四川と移民 //
第3節 隆姓リニージの移住史 44
1. 県志・族譜・「経単簿」・碑文などにみる移住過程 45
2. 移住当初の隆姓と郎溪・大田垌への移動 49
3. 安隆橋の橋普請 52
4. 華巖の隆姓 58
5. 馮家垌への定住 61
第3章 親族組織とその変容 72
第1節 宗族 //
第2節 祖先祭祀と清明会 74
1. 民国期 //
2. 解放後と改革・開放後の変化 77
(1) 族譜および「経単簿」の保存・再編 78
(2) 「清明会」の部分的復活 79
第3節 擬制的親族関係 83
1. 「拜干老輩子」擬制的親子 //
2. 「拜把子」義兄弟 90
第4節 家族内諸関係 94
第5節 分家と老親扶養 97
1. 従来の分家 //

2. 「幺児養老」末子養老の慣習 //
3. 老親扶養のパターン 99
第6節 世帯構成の変遷(1949-1995年)113
1. 家族構成の現状と変化 //
2. 家族構成の変化要因114
第4章 婚姻と婚姻観の変容130
第1節 婚資と持参財 //
1. 四川農村の地域的特徴 //
2. 婚資の性格とその社会的機能132
3. 婚姻儀礼135
第2節 婚姻パターンの変化144
1. 通婚圏と市場圏・祭祀圏 //
(1) 通婚圏 //
(2) 市場圏との関連146
(3) 祭祀圏152
2. 村内婚165
3. 遠方婚174
(1) 従来 of 配偶者選択における同郷意識 //
(1) 改革・開放以前の「婦女外流」女性の婚出175
(3) 農村経済の変容に伴う遠方婚177
4. 「男到女方」妻方居住婚188
(1) 解放後の「移風易俗」 //
(2) 近年の妻方居住婚と地域間の経済的格差189
5. 早婚204
(1) 民国期 //
(2) 解放後 //
(3) 近年の「非法同居」事実婚 //
6. 婚姻規制と規範の逸脱215
(1) 同姓不婚 //
(2) 近親婚218
(3) 異なる世代ランクの者との結婚222
7. 離婚と再婚228
(1) 近年の離婚と再婚 //
(2) 離婚観の変化230
8. 婚姻観の変容235
(1) 結婚の動機 //
(2) 配偶者選択 //
(3) 農業以外による男性の現金収入と女性の労働 価値の増加239
第3節 姻戚関係246
1. 嫁の実家と婚家との関係 //
(1) 通常の交際関係247
① 村内婚	

②姻戚関係の回路利用と権力の相関関係	
③県内婚	
④世代を越えて嫁を送り続ける県内の特定の村落	
⑤他省への婚出	
⑥妻方居住婚	
(2)非常事態の場合252
①「打活人命」姑たたき	
②「打死人命」嫁の不慮の死に対する実家の親族による死因究明	
第5章 村組織261
1.複姓村の統合形態 //
2.経済面の相互扶助 //
終章264
結論と今後の課題	
図表	
表1. 馮家塢村の農業暦(主な春まき作物) 18
表2. 馮家塢村の農業暦(主な秋まき作物) 19
表3. 豊都県の年中行事 21
表4. 3組の年齢別職業構成 24
図1. 3組の人口ピラミット //
表5. 男女年齢別人口構成 25
表6. 世帯規模 //
表7. 世代構成と世帯構成 //
表8. 高年齢者世帯の世代構成と世帯構成 //
表9. 男女年齢別の人口構成 //
表10. 続柄構成 26
表11. 高年齢者世帯の続柄構成 //
表12. 非高年齢者世帯の続柄構成 //
表13. 各集落の姓氏分布 32
表14. 馮家塢村の人口と組分け 34
表15. 民国31年の観音灘(10保)における姓氏分布 //
表16. 3組の姓氏分布とその居住理由 //
図2. 現在の集落の位置と民国30年(1941)頃の対応関係 35
表17. 歴史上の出来事と四川への移民 42
図3. 豊都県における隆姓の主な居住地及び移動分布図 68
表18. 安隆橋工事建設のための寄付金内訳 69
図4. 安隆橋工事に際する隆姓の主な寄付者 70
図5. 澤榮(朝選公)夫婦の墓花磴墳を建てた者 71
表19. 老親扶養のパターン112
表20. 世帯類型128
表21. 世帯の分類129
表22. 世帯構成の変化パターン //

表23. 中国農民の冠婚葬祭における特別な出費(22省・144県・1,521の地域・15,316世帯 1929-1933年)140
図6. 中国農業の地域区分141
表24. 雲南省玉村における中流階級の婚姻儀礼の出費(1940年代)142
表25. 花婿孫継国の結婚に際する男側での婚礼143
表26. 陳洪霞の「於帰」に際する女側での祝宴 //
図7. 中国農村の市集名の地域的分布158
図8. 馮家塢村3組・7組における婚入女性の出身村159
図9. 清代における鬱都県忠武郷の定期市(1894年)160
図10. 馮家塢村を取りまく「場」定期市の分布図161
図11. 馮家塢村の主な売店・食堂の分布図162
図12. 長江南岸花地堡村における行商人の定期市利用163
図13. 観音会にみる馮家塢村の祭祀圏(1994年)164
表27. 3組の婚入状況171
表28. 年齢別婚入女性の出身地 //
表29. 婚入女性の出身地 //
表30. 婚入女性の出身村172
表31. 馮家塢村各集落の村内婚・妻方居住婚173
表32. 「婦女外嫁」遠方婚187
表33. 「招呼上門」妻方居住婚203
表34. 三峡ダム工事による馮家塢村の水没状況見積 //
図14. 直系親族または3世代(4親等)以内の傍系親族226
図15. 中表婚227
図16. 纏足分布の境界線243
表35. 性別にみる結婚の動機244
表36. 婚姻の自主権 //
表37. 婚姻費用の捻出 //
表38. 配偶者選択の要件 //
表39. 男女双方の在所の自然条件245
表40. 男女双方の家庭経済状況 //
表41. 婚礼方式 //
表42. 結婚時の「迎娶方式」嫁入り方法 //
参考文献265
初出一覧270

序論

1. 農村の家族・婚姻をめぐる従来の研究
2. 四川省の家族・婚姻・村落の研究
3. 調査の目的

1. 農村の家族・婚姻をめぐる従来の研究

中国漢族社会における農村の家族・村落・婚姻に関する研究は、一般的に本土・台湾・香港とに三区分している。その流れは「1920年代、アメリカのミッション系大学によって人類学・社会学が中国にもたらされたが、1930年代には、中国人研究者自身による調査研究が盛んに行われるようになり、いくつかの古典的な民族誌が書かれるなど、活況を呈することとなる。しかし、社会主義政権が成立して以降、人類学・社会学はほかの社会科学とともに否定され、遂に1952年、全面的な停止に追い込まれる。そして本土においては、体制改革が行われ、社会学・人類学の研究が再開されるようになる1978年まで、一切の活動が停止されることとなる。その結果、調査研究の舞台は、香港・台湾に移され、今日まで絶えることなく多くの研究が蓄積されてきた」

1。

漢族社会の親族研究は、父系性や父系出自集団〈宗族〉の研究が主流であったため、姻族の研究はどちらかといえば、あまり脚光を浴びなかったようである。この傾向は、大規模な宗族が発達していない村落の場合も同様だ。1960年代には、Gallin, Bernardによる論考“Matrilateral and Affinal Relationships of a Taiwanese Village”(1960)と“Hsin Hsing, Taiwan: A Chinese Village in Change”(1966)などに止まっている。これらの論考は題名の通り、いずれも台湾の漢人社会を対象にしたものである。

しかし、1970年代に入ると、同じく台湾研究ではあるが、姻戚研究に関する論考が徐々に見られ、注目されるようになった。Wolf, Margeryの“Women and the Family in Rural Taiwan”(1972)、Ahern, Emily Mの“Affines and the Rituals of Kinship”(1974)、Gallin, Bernard & Gallin Ritaの“Matrilateral and Affinal Relationships in Changing Chinese Society”(1985)などの論考が出た。

日本人学者による研究には、山路勝彦の「台湾漢人の男系出自と母方オジの問題」(1975)、植野弘子「台湾漢人社会における母方親族及び姻戚関係に関する諸問題」(1983)があげられる。とくに植野氏は「妻の父と母の兄弟--台湾漢人社会における姻戚関係の展開に関する事例分析--」(1987)のなかで、台湾南部のある雑姓村での長期滞在をふまえて、姻戚関係を分析された。wife-giverとwife-takerの関係、母の兄弟〈母舅〉の役割をめぐる

って、「婚姻に伴う二家族間での贈答行為、生家の儀礼的・経済的行為を再検討され、さらにこれまであまり論じられなかった婚家から生家に対する行為にも分析を加えて、姻戚関係を結んだ二者間の関係を相互的にとらえられた」²。

この論考を受けて、同じく1987年に堀江俊一が「『妻の与え手』と『母の与え手』—台湾漢族の姻族関係に対する一つの視角—」を発表され、香港新界に見られる類の大規模な宗族が発達していない台湾南部の村落において、姻族関係をさらに掘り下げて分析された。堀江氏は漢族の姻族研究の問題と台湾における姻族研究をふまえた上で、台湾北部でも客家系漢族がもつとも多く居住する地域において、姻族間の贈与と返礼の事例を通して、姻族関係の発生・継続・消滅について検討された。ところで、以上の諸論考はいずれも台湾をフィールドにしたもので、時期的には中国本土での調査がまだ不可能であったという時代背景ゆえに、台湾に集中していたということであろう。

一方、中国本土の研究は、1978年まで一切の活動が停止させていたが、改革・開放を機に、外国に門戸を開き、外国人研究者の中国における現地調査を可能にした。

日本からは、開放後の中生勝美は山東省の農村において、1930-40年代の資料をふまえて考察され、さらにみずからのフィールドを重ねて、冷水溝という雑姓村の姻戚関係に対する考察を試みられた。「婚姻贈与と婚姻連帯—漢族の婚姻体系と地域性—」という論考(1991)は、仁井田陞氏を筆頭として、1940-42年に行われた中国農村慣行調査の資料をはじめ、中国人・日本人・欧米人による民国期のフィールド資料がよく活かされているので、時間的な厚みが感じられる。中生氏が1985-1986年にかけて山東省でフィールドを行われたのは、ちょうど改革開放を実施した中国は外国に門戸を開き、外国人研究者の中国における現地調査が可能になったからである。

このほかに、中国人留学生であった聶莉莉著『劉堡—中国東北地方の宗族』(1992)という論考がある。主に東北地方の宗族を扱ったものであるが、村落内における異姓間の権力闘争との関連で姻族関係にも触れ、興味深い事例研究を示している。これは「改革開放以降、日本に留学し、文化人類学を専攻する中国人の手による記念すべき最初の中国農村家族研究の業績でもある」³。

2. 四川省漢人社会の家族・婚姻・村落研究

日本人による四川省の移住民研究として、1995年に、山田賢著『移住民の秩序—清代四川地域社会史研究』が刊行された。社会史・社会経済史の問題関心から清代の四川移民社会を取り

上げているが、とくに第2章の移住民社会と地域エリートは興味深い。著者は三省(陝西・湖北・四川)交界地帯に位置する四川省東部の雲陽県における一移住宗族—沔氏という「大姓」有力宗族の軌跡を検証するケース・スタディを通して、「移住民社会内部においてある社会体制—安定的なシステムが形成されていく過程を明らかにしようとした」⁴。

そして、沔氏をめぐるさまざまな社会関係の中から通婚関係を取上げ、その変動を通時的に検討し、完成された雲陽沔氏宗族の社会関係自体が、すでに安定的なシステムの一つであろうが、「さらに彼らの通婚圏という私的な『回路』を通して、宗族連合とも言うべき社会関係」及び有力宗族の上昇モデルのプロセスを究明することが著者の意図するところであると⁵。沔氏宗族の「族譜」をふまえた山田氏の分析は、移住民からなる四川省その他の地域、とりわけ同じく四川東部に位置する筆者の調査村における宗族の定住過程を理解するうえでも、きわめて有効なものではないかと考える。

家族・村落に関する文化人類学的な研究はかなり層が厚く、ことに華北、華南、東南中国の農村については、中国・日本及び欧米の人類学者による貴重な論考が数多くある。これに対して、内陸部に位置する四川漢人社会の場合は、移住民・農民戦争など社会経済史または歴史学的関心が従来かなり高かったものの、親族研究はなぜか非常に少ない。四川省の漢人社会のほとんどは明末・清初期の間、〈湖廣填四川〉湖廣などからの移住者からなる社会である。正統な〈中原〉文化からみると、幾分異なっているため、これまで研究が手薄なのはそこに一因があるのであろうか。

Wolf, margeryの“Revolution Postponed: Women in Contemporary China”(1985)は、「1980-81年にかけて行った中国各地の都市(北京・紹興)と農村(福建・江蘇・山東・山西・四川)の300余名の女性へのインタビューが基礎となっている。労働における男女の格差・ジェンダーへの認識・婚姻・家族組織・都市における分家・産児制限についてまとめられている」⁵。

Endicott, Stephenの“Red Earth: Revolution in a Suchuan Village”(1988)は、四川省成都の北にある什邡 県両路口公社馬家橋という複姓村についてのモノグラフである。「土地改革、人民公社化、生産請負制への移行を、主に幹部とのインタビューと統計によって描かれている」⁶。この村落はかつては「農業は大寨に学べ」運動のモデル村であり、四川省における中国国家統計局の統計データ集計の一村落でもある。

1990年代には、Stevan Harrellの“Geography, Demography,

and Family Composition in Three Southwestern Villages”(1993)がある。これは<川南>四川南部の攀枝花市の付近にある三カ村で行われた社会学的な調査である。ほかには、Martin King Whyteの“Wedding Behavior and Family Strategies in Chengdu”がある。成都市に住む20-70代の結婚した女性586名に対するサンプル調査とインタビューにもとづいて行われたものである。

四川省成都市付近の農村市場経済に関しては、Skinner, G. William 1964, 1965 “Marketing and Social Structure in Rural China, Part I, II, III”がある。『中国農村の市場・社会構造』(1971)という邦訳がある。「人類学に限らず、その後の中国研究一般に多大な影響を与え続ける古典的な研究である⁷⁾」。ほかに、Mary Bosworth Treudleyの“The Men and Women of Chung Ho Ch‘ang”(『四川中和場研究』1971)がある。

中国人研究者による報告は、1970年代後半から、社会学が復活するにつれて、社会学的問題関心が高まりつつあり、とくにここ数年、実地調査をふまえた研究報告が徐々に見られようになった。1980年代の家庭生産請負制の実施以降、家庭・家族の村落社会における役割が見直されるようになった。王滬寧著『当代中国村落家族文化——对中国社会现代化的一项探索——』(1992)はその一つとして取り上げることができる。著者は村落における家族とその文化こそ、中国農村社会の伝統的な組織であり、文化的特徴であることを認識している。

著者は、農村の家族と伝統文化の変容、改革開放による影響、農村の家族の変容と中国の近代化との相関関係などを調べるために、全国15か村を選定した。1988-89年にかけて現地調査を二回行い、方言などの壁を考慮して、15か村でフィールドを手分けして担当した。調査者の多くは社会調査の訓練を受けた各村落の出身者で、いわば「native」たちである。調査地の選定には、沿海地区と僻地、経済の発達している地域と立ち遅れた地域、南方と北方などという地理的・経済的諸要素が考慮されている。なかでも、賈世文「四川：一碗水村」(四川省中部の南充県)という報告は四川省農村の家族の変化を理解するのに良い事例だと思う。叙述に不満を感じるところもあるが、四川農村の社会変化と家族のあり方をリアルに描いており、比較的数少ない四川農村の家族研究としては貴重なものであろう。

婚姻研究に関しては、趙喜順主編『農民婚姻——四川農民婚姻研究』四川人民出版社(1990)がある。四川省社会科学院社会学研究所の研究者が省内の十県を抽出し、サンプル調査により行われた。その調査内容は結婚の理想像、婚礼、持参金・婚資、結婚後の夫婦関係、離婚、再婚及び婚姻観などの項目を、聞き

書きに基づいてまとめられたものである。この報告集は文化人類学的な視点ではないが、改革開放後の四川漢人農民の婚姻の実状を知るのに、非常に参考になる文献である。

このほか、四川に限らぬが、劉英・薛素珍編『中国婚姻家庭研究』(1987)、雷潔琮編『改革以来中国農村婚姻家庭的新変化』(1994)などの論文集がある。主として統計データをふまえた論考で、社会学的な研究が中心となっているが、経済改革以後の家族の変容を知るうえで参考になるところが大である。つまり、現地に長期滞在し、参与観察をふまえた文化人類学的な問題関心による研究がきわめて不十分といえる。さらに、四川省東部における漢人社会の村落に長期滞在して、実地調査をふまえた考察はまだほとんど見当らない。

そこで、わたしが強調したいのは、これまで日本人学者による家族研究は、漢人社会の場合において単姓村が多く、複姓村に対する研究が少ないということである。たとえ複姓村の場合でも、解放前は単姓村であったり、あるいは現在でも村内にかなり強力な姓氏があり、単姓村的要素の強い村落が研究対象となっていた。つまり、宗族の研究と軌を一にしたものと言えよう。そんな中で、植野氏は台湾南部の佳榕林という複姓村で調査をされ、単姓村とは異なる親族組織、とりわけ姻戚関係についての分析を試みられた。山東省でのフィールドを行われた中生氏の場合も複姓村であった。しかし、全体的にみると複姓村に対する研究がまだ不十分であり、単姓村と異なる親族組織のあり方、地域的特徴がまだ明らかにされておらず、多くの問題点が残されている。そういうわけで、四川省東部の複姓村で行われた本研究は、親族組織の地域性への理解を深めるためにも、有意義なものになろうと思われる。

3. 調査の目的

中国西南の盆地地帯に位置する四川省は、東は湖北省、南は雲南省、貴州省、西はチベット、北は陝西省と接しており、一億二千万人の人口を有する最大の内陸部の省である。川西平野を除いて、丘陵地帯・山間地帯・峡谷地帯がほとんどである。そのため、村落の地理的な分布は平原に広がる〈集村〉と違って、〈散村〉的な性格が強い。このような多種多様な自然環境におかれる四川省内において、村落の外観・親族・祖先祭祀などの側面に、地域的偏差が存在することは当然であろう。

四川省の人口は全国の十分の一を占めているが、一人あたりの耕地面積はわずか0.99畝(1畝は6.667アール、1アールは約30.25坪に相当する)しかなく、全国の平均値1.49畝を下回っている。1978年以降、改革開放政策が実施されて以来、農業の家庭生産請負制が導入されるにつれ、農民の生産意欲が向上し、人民公

社の解体をもたらした。全国の農村において、余剰労働力が急速に増えつつあり、より良い収入源を求めて故郷をあとにし、「労務の輸出」として、都市部に出稼ぎにいく若年層が男女とも著しく増加してきた。他方では、より裕福で暮らしやすい生活を求めて、知人・親戚などの斡旋により、「婦女外流」若い女性の省外への婚出も目立ちはじめた。地域によっては、「四川村」が形成されてしまうほど、四川省出身者の嫁たちがひととき目立つ存在として注目されつつある。

本調査の調査地豊都県もご多分にもれず、近年の経済改革及び観光産業の発達によって、農村部にも近代化の波が押し寄せてきており、人々の意識や村落の暮らしが目覚ましい変貌ぶりをみせている。同県の東南は石柱土家族自治县、南は彭水苗族自治县と接しているが、県内は漢人社会である。若年・壮年期の男性たちが農業以外の現金収入を追い求め、多角経営・兼業農家ひいては農業からすっかり離れていく者が増えるなかで、伝統的な農業は主として年寄りや女性たちが担うようになってきている。

他方、1994年10月から、三峡ダムの建設が開始され、その工事の一環として長江の南北岸を結ぶ大橋の建設が豊都県、それも調査村2組のすぐ近くで着工されている。县城水没後に備え、長江沿岸において新たな自動車道路の工事も同年から始まった。現地調査をしている間に、村内3組と4組の居住地域に新たな道路橋が建設され、馮家坝橋と名付けられた。三峡ダム工事のためにもはや一部の村民たちが田畑を手放し、引っ越しせざるを得ない状況である。また、ダムの竣工後には、約4分の1の村人の家屋が水に沈んでしまう予定となっている。ダムの建設は、すでに村の暮らしにさまざまな側面から影響をおよぼしつつある。

このように、経済発展の転換期にさしかかるさる村落は、激しい社会変動のなかで、伝統的な家族がいかに対応し、変わってゆくのか。……元→明→清→民国期→解放後→土地改革→大躍進→人民公社→文化大革命→改革開放などの時期を経てきた村落の一部は、経済の一層の活性化のため、数年後ダムの底に「消え去ろう」としている。わたしはその変貌ぶりを見極めようと、調査地として、豊都県馮家坝という村落を選定したのである。

この調査の目的は、四川東部のある複姓村で行なった長期のフィールドワークをもとに、主な宗族の移住史・人口構成・世帯規模・分家と老親扶養・家族変動・婚姻形態・村落統合・通過儀礼・功德儀礼・祖先祭祀などの諸側面を通して、家族・婚姻・村落構造の変化を考察することである。宗族による結束が、東南中国・

華南ほど顕著ではない同地域の家族・村落の変容を明らかにできればと思う。近代化や観光化の発達との関連で、従来の文化伝統がいかに保持され、移り変わってゆくのか。時代を追って、とりわけポスト生産責任制(1979年)の導入による変容を中心に、考察しようとしたのである。

実地調査は、1992年春に行われた3週間の予備調査も含め、1995年の3月末まで、夏休み・冬休みの期間を利用して、断続的に実施してきた。延べ約10カ月の現地滞在期間中は、調査村馮家塋村3組隆世武のお宅を主な拠点とし、隆家の1室を借りて、生活をともしながら、3組(44世帯)に絞って集中調査した。問題関心(たとえば、分家と老親扶養・妻方居住婚の事例など)によっては、さらに馮家塋村(約413世帯)所属の他の6集落についても、部分的な調査をすすめ、これに補うという形をとった。

注

(1)末成道男編『中国文化人類学文献解題』東京大学出版会
1995年 [1]研究の流れ:3

(2)植野弘子「妻の父と母の兄弟--台湾漢人社会における姻戚関係の展開に関する事例分析--」『民族学研究』51/4:378-379.
1987.

(3)西澤治彦「聶莉々著『劉堡--中国東北地方の宗族とその変容--』」を参照。

(4)山田賢著『移住民の秩序--清代四川地域社会史研究--』名古屋大学出版会:64. 1995.

(5)同(1):103.

(6)同(1):121.

(7)同(1):94.

第1章 調査地の概要

四川省は、中国西南の盆地地帯に位置しており、「天府之国」という名にふさわしい自給自足の土地柄である。

第1節 豊都県の概要

長江の上流地域である四川盆地の東部に位置する豊都県は、長江を境目に南北に分かれている。東は石柱土家族自治县、南は武隆、彭水苗族土家族自治县の諸県、西は涪陵市、墊江県、北は万県地区の忠県と接し、涪陵地区の管轄下に置かれている。県の南東部は標高1000-2000メートルの山々が連綿と続き、北西部は丘陵地帯で、とくに長江の沿岸地域は200-400メートルの低い丘陵地帯である。気候的には、亜熱帯モンスーン地帯に属し、四季の変化がはっきりしている。

豊都県は歴史が古く、夏朝には梁州の領地、周朝には雍州の管轄下に置かれ、春秋戦国時代に入ると、巴国の領地となり、一時巴国の都であった。のちに、秦が巴国と蜀国を滅ぼして巴郡を設置したが、そのころ巴郡の枳県とされた。東漢永元二年（紀元90年）にはじめて県として設けられるようになった。

県城から北東0.5キロ離れたところに標高288メートルの名山という山があり、その山に大木が鬱蒼と茂り、風光明媚な場所である。何より興味深いのは、ここは中国の民間伝説にある「陰曹地府」地獄の閻魔庁として全国的に言い伝えられているばかりでなく、「鬼城」(ghost city)と称される豊都の名は海外にまで知られていることである。

文献の記載によれば、西晋にはすでに名山に寺院が建てられ、唐代以降になると、次第にその数を増やしていった。民国時期には、このわずか1.5平方キロの地域内に、大小さまざまな寺院が75カ所もあったという。

伝説によると、ここ豊都は鬼国の都であり、人間はだれでも死後、その靈魂がここに帰着するのものと語り継がれてきた。「善鬼」生存中功德を積みかさね、善き行いをした者が来世もまた人間に生まれ変わることができるのに対し、「悪鬼」生存中悪事を働いた者は地獄に落ちる。それで、豊都県一円では、鬼神に関する故事や民間伝説が非常に多い。歴代の読書人が著した文学作品および歴史上の文献にも、豊都がたびたび登場してくるのである。

地元の住民は信仰心が篤く、1949年までに、重慶、大竹、梁平、墊江、石柱、忠県、涪陵などからの善男信女たちが、毎年のように大勢でここへ「朝山進香」お参りしていた。1980年代

以降、経済的開放政策がおこなわれるにしたがい、さらに1986年から豊都県は観光地として、正式に海外にも開放するようになった。国内外の観光客の到来が町にこれまでにない活気をもたらし、「廟会」をはじめ、従来の文化伝統を復活させる一面もみられた。いまでは、豊都県政府は観光業を頼りに財政面の立て直しをはかるために、単なる名所旧跡の修繕にとどまらず、伝説上の鬼神を内容にした新しい観光名所の建設に、資金を惜しむことなく取り組んでいる。

一方では、観光業と経済の発達につれて、県内の住民、とりわけ村落社会の農民たちにとって、現金収入を得る機会をもたらしてきた。人口の割に辛うじて生計を立てていけるくらい、きわめて土地の少ない長江沿岸の農村においては、「跳出農門」農業からすっかり離れたごく少数の農民を除き、いわゆる「離農不離郷」脱農しても故郷から離れないというような青・壮年の男性の生活様式が、現在ではかなり浸透しているように見受けられる。さらに、地元では農業以外の現金収入がなければ、他省への出稼ぎに行く。こうして、伝統的な農業は主として年寄りと女性たちが担うようになり、生業の面で大きな変貌をとげている。さらに、三峡ダム建設はまた近い将来、さまざまな意味で村の暮らしに響くことであろう。そこで、激しい社会変動のなかにおいて、伝統的な村落社会の家族の在り方がいかに状況の変化に対応し、変容していくのかについて、考察を加えてみようと考えた次第である。

第2節 村落の概況

1. 地理的位置・気候・生業

調査地馮家塢村は長江の北岸、県城より約7キロ離れたところに位置し、標高370メートルの丘陵地帯である。清代末には豊都県忠武郷の管轄下に置かれていた。1938年、日中戦争が勃発後、忠武郷が廃止され、白合郷に入れられたが、1953年には新城、白沙、仁愛(馮家塢の元村名)、五星などの村から白沙郷を成立させ、郷人民政府を新城に設置した。1980年に地名調査の際、新城人民公社(新城郷)に改名され、さらに1992年には、行政上豊都県名山鎮に入るようになった。このような頻繁な行政的再編成が非常にわかりにくいため、ここでは便宜上、ひきつづき馮家塢村を新城郷の管轄下として論をすすめることにした。

伝統的な農業は2毛作で、米(中稲)と小麦が栽培され、農民の主食となっている。そのほか、とうもろこし・小豆・もち米・糯とうもろこしなどの穀物がある。副食の野菜類には、さつま芋・じゃが芋・かぼちゃ・冬瓜・糸瓜・大豆・「胡豆」そら豆・白菜・にんじん・豌豆・豌豆の若芽・ちしゃ・茎ちしゃ・れんこん・里芋・菜種・「青菜頭」ザーサイの原料となる野菜など、ほかにも日本では見かけぬ実に多種多様な野菜が栽培できる。国内はもちろろん、海外にまで輸出されているさあさいのほとんどは涪陵地区の産出だが、豊都県で加工されたものがかなりの割合を占めていると伺った。

雨量が豊富で、温暖な気候に恵まれた同県の農業的条件は地形により三段階に区分されている。

- ① 長江沿岸丘陵地帯(標高500メートル以下)。
- ② 長江南北低山地帯(標高500-800メートル)。
- ③ 南岸中山地帯(標高800メートル以上)。

そのなかで、本調査地の村落は、この地方ではもっとも農業に適した沿岸丘陵地帯である。

調査地3組₃を例にとれば、1人あたりの田圃面積はわずか0.45畝(1畝は6.667アール)と0.27畝の畑しかなく、1人あたりの田畑面積が少ないものの、年間を通して何かの農作物の収穫が期待できるため、土地の利用度は華北など北方と比べて、決して低いものではない。各家庭で日常的に食用する野菜は、「夏天瓜豆、冬天蘿卜白菜₄」夏場は各種の瓜と豆類、冬場は各種の大根・かぶと白菜類といわれている。

家畜は牛(役畜として使われるあか牛と水牛)・豚・鶏・あひる・

がちょうが飼育されている。ところが、近年、县城近郊に工場の新設が増えたため、村の土地がどんどん徴収されつつある。わずかな土地では、家族単位で牛を飼うにはとても採算が合わないというので、牛を持っている農家の数はここ数年めっきり減ってしまった。

牛の所有数の激減に対して、一方では豚は重要な換金手段として重宝され、どの家も年間数頭の豚を出荷している。四川省は中国最大の「生豬」豚の産地であり、四川産の豚は「川猪」として全国に知られている。1993年末の相場によると、1頭につき、目方で売値が数段階つくが、たいがいの場合、200斤(1斤=0.5キログラム)以下ならば1斤につき1.5元、200斤以上は1斤1.60元。豚の飼育周期は約8カ月かかる。雌豚は2年にわたり5回子豚を生み、1回につき飼い主の不注意で死なせたものと死産を除き、約10頭前後が生きられる。餌の確保を考えて、生まれた子豚を全部育てるのは無理である。したがって、必要な分だけとっておいて、余ったのは市で売る。ただし、飼料の酒かすなどの出費を差し引いて、3人家族で1年のうち5頭売れば、これによる現金収入は年間約800元になる。近くのビール工場でアルバイトで毎日働く一家の大黒柱の年収に比べて、約3分の1から4分の1に相当する。

だが、1994年になると、豚の買い付け価格が上がったため、子豚も含めて、養豚による収入が3千元-4千元(純収入ではない)の農家がかかりいた。3組高友諒は5千元(純収入ではない)の収入を得たという。農家にとってばかにならない貴重な収入源だし、それより家畜が大切な「農家肥」自給肥料を提供してくれるのである。豚飼いの仕事は主として女性たちの手で担われているが、豚の売価は極めて不安定なものである。

このほか、鶏、あひる、がちょうの飼育も女性の仕事とされているようである。鶏やたまごのごく一部は自家用に回されるが、しかしそれはかなり贅沢だと見なされ、筆者が現地滞在の期間中、たしかたまごを食べたのは稲刈りの間のみであったと記憶している。大部分は親族訪問の際、手みやげとして親族に贈与する。現地では、これを「送人情」親族訪問の時の手みやげと表現し、親族付き合いのうえでのこのような贈答行為は、いわば潤滑油のような役割を果たすものである。

表1と表2は主な春まき作物と秋まき作物に分け、馮家埧村の伝統的な農業暦を示した。さらに、表3には、同地域の主要な年中行事が現わされ、民間信仰と農耕社会との深い関わりが明らかである。従来の伝統的な生業は農業であったが、1980年代に入ると、生産責任制の導入に伴い、县城近郊に新たな工場や企業が続々と現われるようになった。もと馮家埧村の敷地に

は現在、ビール工場のほか、複合肥料工場・製薬工場・酒工場・果樹園・精神病医院・ソーサイ工場・セラミック工場・製糖工場・ダンボール工場・煉瓦工場などがある。果樹園のほか、いずれも1980年代からできたもので、県属企業か、請負制企業であるが、汚職がはびこっているため、欠損企業が大半を占めている。なかでも、ビール工場建設のおり、村の多くの土地をとったので、労務問題解決法として、それ以降村内の余剰労働力を雇い、青壮年期の村民たちは工場で働くようになった。仕事の主な内容は、ビール瓶の運搬などといった重労働である。旧正月の1か月は順繰りで休めるが、収入を得るため、とくに用事がなければ、年中無休で毎日のようにアルバイトで働く者がほとんどだ。仕事がついが、年間所得は3千-4千元。体力に自信があれば、ビール工場でアルバイトをすることは、周辺村落の若者にとって、羨望の的と言っても良いほどの収入が保証できるのである。

表4 馮家塢3組年齢別職業構成を見てみよう。60代以上の人口を扱わなかったのは、高齢者はほとんど農業に従事しているからだ。なかには、たまには若者にまじえてビール工場でアルバイトする者もいるが、しかし、工場での労働はビールの運搬のような重労働ばかりで、年配の人は長続きするはずがない。彼らにとってやはり農業が主な生業になっている。そのほか、麦わらで縄暖簾を編んだり、竹を割いてかごを編んだりしている者もなかにはいるが、それはあくまで特定の季節における一時的で副業的なものであり、大した収入にはならない。

20代と30代の男性には専業農家が皆無、40代男性のうち、農業をやっているのは一人のみ。実はこの人は持病があって、重労働どころか、農作業でさえままならない。50代の男性には農業のほか、ビール工場で働くものもあれば、大工・左官および会計係などのような特技をもつ職業につく者もいる。20-40代までの男性のなかで、ビール工場で働く者が大半を占めている。このビール工場ができたのは1982年。工場の建設のために馮家塢村3組の土地がかなり徴収されるかわりに、村の男性が希望すれば、だれでもアルバイトで同工場で働くことができるという契約が結ばれたそう。そこで数年働いたのち、馮家塢3組に新築の家が目立つようになり、ビール工場の恩恵を受けた結果であると言えよう。

しかし、そういったきつい肉体労働より、もっと収入のよい職を求めて、20代と30代男性のうち、運輸業をやる者が6人。40代女性の1人を加え、全員は運輸用トラックを購入し、運輸業をしている。詳しい数字がわからないが、おそらくこの7人は3組でもっとも収入が多いと考えられる。よりよい収入を求め、運転免許を取り、運輸業の仕事、または車の修理などのような技術者をめざす若者が後を絶えない。1994年の2月に、遠く海

南島へ出稼ぎに行く者もついに現われた。

女性は19-20歳の間にほとんど嫁いでいく。婚姻法の規定によれば、女性の最低結婚年齢は20歳なのに、ここでは、18、19歳の若さで結婚している者も珍しくない。20代女性のうち、2人をのぞき、すべて既婚者である。町の綿織工場で働いたり、または水上輸送関係の仕事をしたりしている3人だけは非農業人口ではあるが、村に住んでいる。男性に比べて、既婚女性のほとんどが農業に従事している。

20代で農業をやる未婚女性はたったの1人である。20歳前後でさっさと結婚し、そして21、22歳のころにはすでに1児の母となってしまうこの村では、やがて25歳になる彼女はまだ実家にいる。聞くところによれば、まとまりかけた縁談が破綻になったことがどうも原因らしい。「あの子はいき遅れたんだよ」と、村の30代の主婦がそっとわたしにささやいた。

10代では、集落内でお店を経営する両親を手伝い、店番をする者が1人。もう1人は洗車をし、毎日村から歩いて30分かかる新城へ通う。未婚女性は農業の手伝いなどをしながら、農村で結婚相手を物色するか、あるいは農業以外の仕事をさがし、できれば県城で働きたい、農業戸籍から非農業戸籍に変わるよう、あれこれと知り合いや親族の力を貸してもらうのが現実である。

生産責任制の実施により、地域間の経済的格差がどんどん大きくなりつつある。1993年の国家農村社会経済調査チームのサンプル調査によると、四川省の1人あたりの年収は700元未満、全国平均の1千余元をはるかに下回るものであった。したがって、内陸部に位置する四川省農村の収入は全国レベルからみると、中クラスよりやや下の程度である。他地域との経済的格差が存在するため、「出外打工」出稼ぎに行く者が増える一方である。しかも、これらの出稼ぎ労働者は、出身村では必ずしも余剰労働力とは限らないのである。つまり、自分の家族が請け負った田畑を荒廃させたまま、他省へ出稼ぎに行く者も少なくはない。調査地の村落は県内におけるほかの村落に比べて、比較的出稼ぎが少ないのは、県城の近郊という地の利に恵まれ、ビール工場などでのアルバイトができるからにほかならない。

2. 人口構成・世帯規模

村の世帯数は413戸、人口は1,353人。集落別の世帯と人口は第2章第1節を参照。名山鎮の所属に置かれた10数か村のうち、中規模の村落である。

図1は馮家塢村3組の人口ピラミットである。1994年3月末現在、聞き書きで調べたところ、実際の人口総数は131人。内訳

をみると、男性が68人、女性が63人。図1を表5 男女年齢別人口構成と照らしてみると、3組の人口構成は、20-29歳台が25.2%、30代が14.5%と、もっとも高い比率を占めている。男女別からみても、この2つの年齢層の人口がもっとも多い。村の若者の大半は小卒から中卒にとどまり、高卒者は非常に少ないという教育レベルの実態を考慮して、10-19歳の年齢層にもすでに働き手として、家計を助ける10代の若者がいるわけである。

世帯規模は表6のとおりである。3組43世帯のうち、世帯人員は3人が51.2%、全世帯の半数以上を占めている。さらに2人と4人家族の場合を合計すると、95.4%の割合となる。平均世帯人員はわずか3.05人。これは四川省の平均値4.01人をはるかに下回るものである。3人家族が半数を超え、4人家族が全世帯数の18.6%ということは、一人っ子政策がこの地方において、比較的順調に進められていることを裏付けている。

つぎに表7 世代構成と世帯構成(1995年3月末現在)をみると、44戸のうち、核家族世帯が81.8%、単独世帯が4.5%、その他の親族世帯が13.6%である。核家族には夫婦と子供世帯が圧倒的に多い。夫婦世帯のなかには、子供がまだできていない新婚さんのほか、大多数が老夫婦の2人暮らしである。その他の親族世帯には、夫婦、子供と片親からなる世帯が半数を占めている。表8では高齢者世帯の世代構成と世帯構成を示し、高齢者の過半数は子ども世代と同居せず、核家族世帯で暮らしていることが明らかである。

さらに、表9は3組における男女年齢別の人口構成を示した。年齢3区分でみると、幼少年人口は18.2%、生産年齢人口は65.7%、老年人口は15.9%であり、高齢化の進展をみせている。幼少年人口のうち、男が21.4%に対して、女が14.5%に止まっているのは、1980年代から本格的に実施されつつある1人っ子政策による影響ではないだろうか。3組の続柄については、表10 続柄構成、表11 高年齢者世帯の続柄構成と表12 非高年齢者世帯の続柄構成で示した。

3. 学校教育

村のほぼ真中に坪上という小さな丘があり、丘の上の台地に村の小学校と医療室がある。ここは解放前(1949年)では「三神宮」という名の村廟兼「村塾」であった。文化大革命期にこの廟に祭られていた仏像がことごとく破壊された。今では、馮家埧村村民委員会の所在地でもある。

坪上の小学校には現在数10名の子供たちが在学しているが、教師は5名。1人は「民辨教師」で、あとは全部县城から自転

車で毎日通っている。村レベルの小学校は授業時間が短く、午前中だけで、午後はやらない。8:00-12:00の時間割というのにならぬ。県から通う先生たちは9時過ぎにようやく姿を現わし、お昼前にさっさと去ってしまうことがしばしばである。おそらく午後を利用して他のアルバイトに励んでいるであろう。教育姿勢がとても真剣だとは言いがたい。1994年、この小学校の卒業生12名のうち、近くの新城中学校に進学できたのはたったの4、5名であった。新城中学校は、隣接する郷・鎮・県レベルの中学校のなかで、進学率がもっとも低いという評判である。村の小学校の教育レベルの低さが進学率に端的に反映されている。

そのため、我が子の将来を心配し、2年ほど前から、子供を
 県城の学校に編入させるケースが急増した。ところが、今まで
 県坪上で一番の成績をとっていた子は、町の学校にいくと、同じ
 学年でもっとも成績の悪い子にも追いつかないことがわかった。
 そこで編入の場合、ほとんど例外無しに1年留年という形をと
 っている。しかも、都市戸籍ではないために、県城の同級生よ
 りはるかに高価な授業料を出さなければならない。それに昼ご
 はんの代金もばかにならない。1人につき、年間1,500元くらい
 の出費である。ビール工場で働く親なら、その年収は3千元程度
 とすると、子供の教育は農家にとってかなり大きな負担になっ
 ている。ちなみに、村内の小学校の場合は、年間の学費は100
 元台で済むし、放課後、家事も少し手伝ってもらえる。したが
 って、余裕のない家の子は村の小学校しか行くことができず、
 進学が望めない者が過半数である。

村の6組の道路沿いに幼稚園があり、目下のところ、3-6歳まで20数名の子供たちが入園しているが、午前中だけで、上半期と下半期を合わせれば、計160元の授業料が必要である。子どもが1人しかいない多くの農家にとっては、子の将来を考えると、できるだけ良い教育を受けさせてやりたいという共通の気持ちは持っている。したがって、村の幼稚園に幼い子を入れたり、あるいは新城郷か県城のもっと良い幼稚園に入れたりしている。

「文化水平」最終学歴からみれば、民国期(1949年以前)に幼少の頃を過ごした男性の一部が私塾で2-7年勉強したことがあるが、女性ほとんどが文盲である。解放後(1949年以降)の「掃盲運動」文盲一掃・識字運動のため、多くの女性も学校へ行けるようになった。それでも、生活が困難な家庭で育った場合、40代の女性に読み書きのまったくできない者がいる。そして、若者のほとんどが小卒、せいぜい中卒にとどまり、高校まで卒業した者が非常に少ない。とりわけ女性の高卒者の場合は、本人の努力も必要であろうが、親に相当の理解を要するものと推測される。いずれにしても、配偶者選択の要件として、学歴はほ

とんど関係がないように見える。そして、教育レベルの低さは早婚につながる要因の1つとも考えられよう。

注

(1)「廟会」の活動を復活させたのは6年ほど前からである。旧暦3月3日には伝説上の人物「白無常」や「黒無常」などさまざまな鬼に扮して「陰司街」地獄街道の様子を彷彿させ、観光客を楽しませる祭である。さらに、1990年より、第一回鬼城文化シンポジウムが豊都で開催され、中国における鬼文化ブームもこの時期に起きたようである。

(2)冬の間に、小麦を栽培することができるが、投入する労力のわりに、収穫がそれほどよくない。そのため、「冬水田」にして、冬場の田圃をずっと休ませておくという従来の農法に従う農家も一部いる。

(3)3組の田畑面積は現在、一人あたり田圃が0.45畝、畑が0.27畝であり、自家用の食糧くらいちょうど足りる程度。馮家壩村七つの組のうち、現在の3組の田畑面積の規模は多いほうである。長江沿岸に位置する4組と6組はもっと少ないため、足りない分は買って食べるしかないので、農業以外の職業につくものがほとんどである。

組分けに関しては、第2章第1節を参照。

(4)清光緒19年(1894)『豊都県志』を参照。

(5)1995年7月18日付の『華東物価報』によると、1994年度全国各地の農村における1人あたりの年収は、上海市が4167.93元で、もっとも多い。そのほか、主な直轄市・省・自治区における農民の年収は以下のとおりである。

浙江省(3201.58元)・広東省(2670.11元)・北京市(2619.91元)・江蘇省(2066.03元)・天津市(2034.77元)・遼寧省(1963.13元)・福建省(1899.85元)・新疆ウイグル族自治区(1890.25元)・黒龍江省(1738.35元)・吉林省(1588.26元)・湖南省(1499.03元)・山東省(1462.07元)・江西省(1355.46元)・海南省(1345.57元)・広西省(1333.12元)・湖北省(1209.91元)・内蒙古自治区(1203.47元)・河北省(1148.58元)・寧夏回族自治区(1128.75元)・安徽省(1125.15元)・四川省(1078.63元)・雲南省(1070.49元)・山西省(990.77元)・河南省(939.88元)・陝西省(873.62元)・青海省(783.63元)・貴州省(710.58元)・甘肅省(669.62元)

(6)1987年7月1日中国人口センサス調査結果によれば、1987年、四川省の世帯規模が4.01人。1億あまりの人口をかかえている四川省の世帯規模を全国的にみると、比較的小さいほうである。

3.05人という馮家塄村3組の世帯規模はそれよりもっと 低く、世帯規模の小規模化を物語っている。

(7)中国の1人っ子政策が1981年にはじまった。村で聞いたところによれば、第2子が生まれた場合、1984年には500元、1993年には4,000元の罰金が課されている。この地域の村落では、1993年、「1楼1頂」2階建ての家を新築するのに約1万元かかるから、農民にとって相当厳しいものである。

第1子が男子ならば、第2子まで生もうとする者が少ないが、もしもはじめに女の子であれば、罰金をとられようと、次には跡継ぎの男子が生まれるかもしれないとどうしても第2子が欲しがる。そして、第2子も女の子ならば、そのままあきらめる者もいれば、幹部や金持ちなら、それでも頑張って次の子を生もうとする者もいる。そのせいもあって、幼少年層における男女の性比例のアンバランスをもたらしたと思われる。

(8)ここでいう「民辨教師」とは、農村戸籍の者が村の小学校で教鞭をとる教師のこと。月謝が非常に少ない。彼らの一部はのちに都市戸籍に変えることができるが、大多数の場合は一生戸籍が変わることなく、農村で過ごすのである。一方では、同じ教師で都市戸籍なら、定年後年金をもらえるなどの優遇を受けることができる。

表 1、馮家垵村の農業暦(主な春まき作物)

	立冬	小雪	大雪	冬至	小寒	大寒	立春	雨水	驚蟄	春分	清明	穀雨	立夏	小滿	芒種	夏至	小暑	大暑	立秋	処暑	白露	秋分	寒露	霜降	立冬	小雪	大雪	
とうもろこし	<div>「点苞穀」・「捏肥球」種まき</div> <div>「移栽」移植</div> <div>「打天花」開花</div> <div>収穫</div>																											
水稻(中稲)	<div>「泡種」・「下種」種まき</div> <div>「栽秧」田植え(秧田の場合)</div> <div>「本田」・「磨田」・「打田」黒塗り(水田の場合)</div> <div>田植え(干田の場合)</div> <div>「揚花」開花</div> <div>「割穀」稲刈り</div>																											
「早秋紅苕」 さつまいも	<div>種まき</div> <div>移植</div> <div>収穫</div>																											
「春洋芋」 じゃが芋	<div>種まき</div> <div>収穫</div>																											
「豆」	<div>種まき</div> <div>開花</div> <div>収穫</div>																											
「藤々菜」	<div>種まき</div> <div>収穫</div>																											

収穫

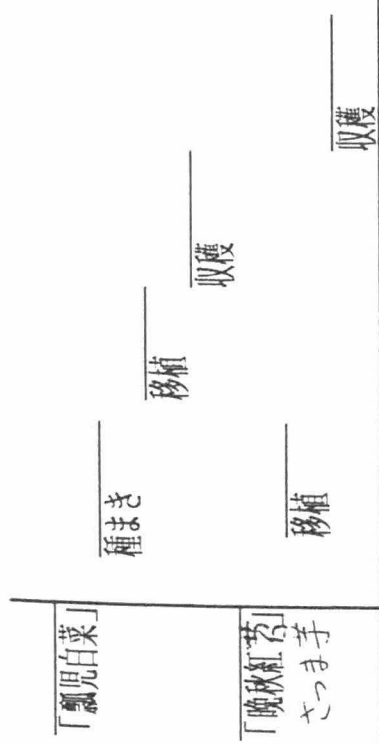


表3、豊都県の年中行事(いずれも旧暦によるものとし、●印は現存するものを示す)

1月	元日の朝、九本の蠟燭を玄関に立て、これを「品燭」という。さらに「投膠」として、薫製の豚肉と卵を酒に入れ、各人がひと茶碗食べる。
1.1.	●元日の朝食は「湯元」。門神・家神に線香と蠟燭をたて、紙銭を燃やす。供物を下げてから食事する。「送柴(財)神」の者が赤い紙でくっった小さな薪束を持って各家を回る。その薪束を二つ受け取ると、「喜銭」といって礼金を渡す。
1.2.	●元日の禁忌として、掃除をせず、水は「金銀水」といって、家の外に捨ててはならず、「破れる」などのような不吉な言葉を口にしてはならない。
1.15.	●年始回りがはじまり、擬制的親族も含めて、互いに親族訪問をし、15日頃までとする。
	●家神・門神に線香をあげ、蠟燭をたて、紙銭を燃やし、この日をもって新年がひと区切りとする。「走人戸」年始回りの親族訪問がこのあたりで一段落する。この日は「上元日」で、「閻元宵」の行事として、県城で「社火」を披露し、獅子舞を舞う。
	「正月」1月には、「財神菩薩」・「埴神」を敬い奉る者がいる。
2月	この期間中では、県城で「香会」が行われ、「娘子会」ともいう。亡くなった家族のために3年間「焼拝香」を続けるという風習である。
2.2-20.	この行事の参加者の多くは中年女性であり、「教口先生」と呼ばれる者をリーダー役とし、20、30人の団体を組んで、4、5日かけて県城の寺院をまわる。「教口先生」は曾段、道士先生であり、あるいは農業を営む者など様々だが、ある程度の教育を受けた者が大半を占める。1団体に4、5名の「教口先生」が必要である。参加者は歳礼として、それぞれ5升米(1升は約5斤、2.5キログラム)を支払う。参加者も「教口先生」は必ずしも同じ村同士でなくともよい。村落レベルを超えており、長江南岸の出身者が多かったという。
2.19.	●2月19日の観音会は別名「蟠桃会」。観音の生誕日なので、小麦粉で桃をかたどった蒸しパンをこしらえ、子宝を授けたい者はこれをとって食べる。
	●観音会は必ず「会首」と呼ばれる世話役がいる。その人を中心に会が運営される。2週間は数冊用意しておき、熱心な者数人がこれをもって付近の集落を募金してまわる。参加者は必ずしも同じ村落同士であるわけではない。
	●そして当日、「砂会」をおこなう。道士先生に誂経してもらい、ある程度の金を出した家から、1人ずつが会に顔を出して、「喫齋飯」精進料理による会食をしてから解散する。2月には、県城の文昌宮で文昌を祭る。宗族によって、春祭を行なう場合がある。子どもがたこ遊びをする。
3月	「清明会」。民国期では、ある程度の経済力をもつ宗族ならば、この日に一族の成員が祖先の墓、あるいは祠堂に集まり、清明会をおこなう。祭文を読み上げ、墓参が済むと、直会をし、同じ父系出自の者同士が相互の系譜関係を確認し、宗族の団結をはかる。
3.3.	●「廟会」。この行事は県城で行なわれる観光客誘致を主旨とする物資交流会の性格を持つものである。。1980年代の後半から、観光ブームにのっとり、新規開催したものであり、解放後、すっかり中断した「香会」・「城隍会」に代わって替わった。
	●はかに3月には「城隍会」がある。民国期では、3月と7月15日に一回ずつ城隍会が行なわれ、当日、「城隍出巡」城隍のお出ましという行事がある。
4月	

	「秧苗会」。道士先生に頼んで「打虫煙草」という行事をおこなう。たんぼに竹竿を立て、ご飯を盛った茶碗をその下に置いて線香をあげる。秧苗会はまる1日続き、隣近所の者が参加する。秧苗会の運営は、会首が「銭糧」資金調達をするにとどまり、「刈銭糧」募金はしない。 この時期には、「土地会」が行なわれる地域もあるが、馮家村ではやらない。
5月 5.5. 5.13. 5.15.	●「端午節」。この日は「端陽」と呼ばれ、菖蒲・艾の葉っぱを玄関にぶらさげ、厄除けをはかる。 また、この日に「角黍」を食べ、雄黄酒を飲む。 「単刀会」。関帝を祭る。 この日は「大端陽」と呼ばれ、民国期では「龍王会」が行なわれた。「龍王船」をこぎ、「玩龍舟」ボートこぎを競い合った。 早越に見舞われた場合、5月に「求雨会」雨乞いを行なう。この行事は「保」を祭祀圖とし、保長が表に出て組織する。まず2人を募金に行かせ、集めてきた金で3日間の行事をする。 道士先生に読経してもらい、ドラ叩きなども数名必要である。
6月 6.6. 6.19.	衣服・書物などを乾す。 ●「観音会」。2月19日の観音会とはば同様の要領で行なわれる。 6月には「川主」と「穀神」を祭る。
7月 7.7. 7.15.	七夕。童たちは鳳仙花で指の爪を染める。女たちは月に向かって供え物をし、針に糸を通したりして、これを「乞巧」という。 県城で「城隍会」が行なわれる。「上孤」とも呼ばれ、県城の「上孤亭」で読経してもらう。 ●県城の寺院で「盂蘭盆会」が行なわれ、「放焰口」などの施餓鬼の法事をする。 農村部では、「燒袱子」といって、紙銭を焼く。この日は「7月半」と呼ばれ、「7月半、鬼氣幢々」という諺がある。
8月 8.15.	●「秋祭」。春祭と同じである。宗族によっては、清明会のかわりに、春祭と秋祭の二回にわたって祖先祭祀をすることもある。 ●「中秋節」。月餅を月へ供え、下げてからこれを食べる風習がある。農村では、この日の晩に新もち米でこしらえた「糰子」餅を食べる。 子宝を願う者のために、女と子どもたちが「送頭」、南瓜を盗んできてその家まで送る。
9月 9.9. 9.19.	●「重陽節」。「重陽米」餅を食べ山登りする。 ●「観音会」。2月19日と6月19日の観音会とはば同様の要領で行なわれる。
11月 12月 12.2.	●旧暦11月は「冬月」ともいう。豚をつぶして、あるいは大量の豚肉を買い込んで、年越しのための「引肉」燻製肉と「灌腸」腸詰めをこしらえておく。 ●12月に入ってから、年越し用の「湯元」作りの用意として、もち米を水につけておく。 ●「上墳」。当日はシャベルをもって、祖先の墓の周辺をきれいにし、さらに墓に土を盛り上げる。

12. 8.
12. 23.
12. 24.
12. 30.

もち米・小豆などで「粥」をこしらえて食べる。

●「祭竈」。「糖餅」・黒砂糖などで竈神を祭る。しかし、現在では、12月30日に祭る地域もある。

●「打掃塵」。鍋の外側にきれいに磨き、部屋中の掃除をし、新年に備える。

●大晦日の晩に、家神・門神・祖先に線香をあげ、蠟燭をたてて供え物をし、「焼狀子」紙銭を焼く。その後「湯元」をはじめ、御馳走する。夕食後、祖先の墓参りをし、墓に「墳瀧」をかけ、爆竹を鳴らす。これを「掛親」ともいう。

●未成年の子が直系尊属に「叩頭」ひざまずいて新年の挨拶をし、尊属から「压岁钱」お年玉をもらう。子にとって、その「老輩子」擬制的親が井戸であれば、井戸側で線香をあげなければならぬ。

●大晦日の晩に「四官菩薩」を祭る。ご飯におかずなどを豚小屋に供え、線香をあげ、蠟燭をたてる。さらに12月をちなんだ12枚の紙銭を豚小屋で焼く。

●正月までに赤い紙に「春聯」めでたい対句を書き、玄関の両側に貼り付ける。「門神」の神像を貼る家もある。

●大晦日の夜、「守歳」といって、一晩中起きておく。

●大晦日の晩に、鍋に米を少し入れておき、翌日起きて、米がどんな模様をなすかで豊年を占う。

表4. 3組の年齢別職業構成(1994年3月末現在/計74人)

年齢/職業別	総数	農業	ビール工場	運輸	大工	左官	その他
男性50-59	8	3	2		1	1	1(会計)
40-49	5	1	4				
30-39	12		8	2		1	1(省外へ出稼ぎ)
20-29	11		5	4		1	1(車の修理)
10-19	1						1(教師)
女性50-59	8	8					
40-49	6	5		1			
30-39	7	7					
20-29	18	15					3(非農業人口)
10-19	2						2(店・洗車)

注: この表にあげたのは同じ年齢層の全員ではない。あと数人の男性について確認できなかったため、表に入れなかった。

図1. 3組の人口ピラミット(1994年3月末現在)
男(68人) 女(63人)

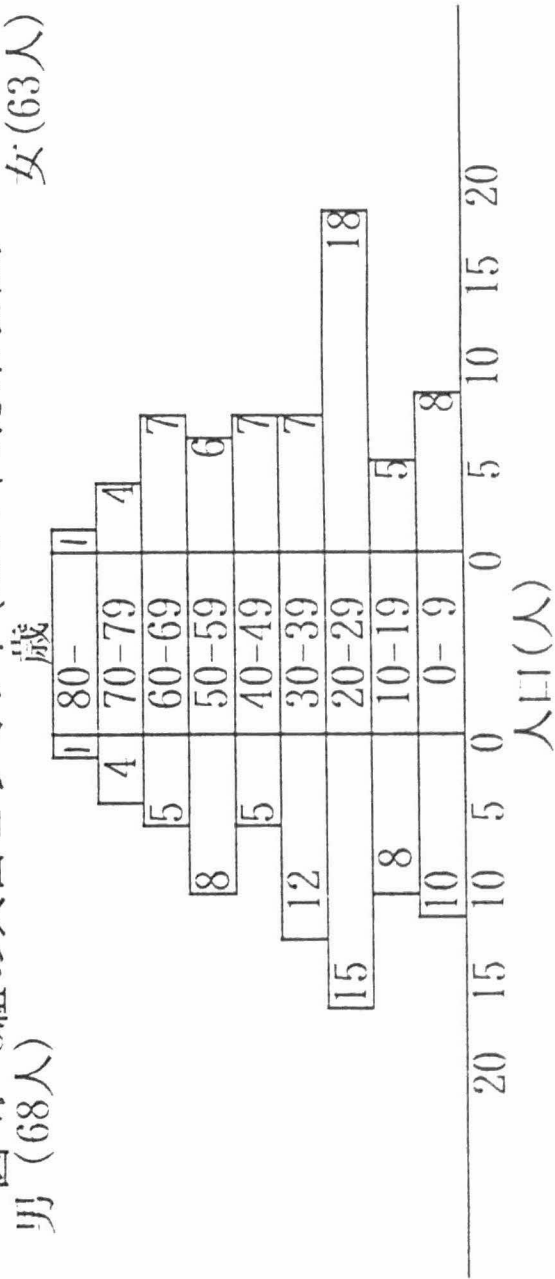


表 5. 男女年齢別人口構成(1994年3月末現在)

年齢	総数	男	女
実数(%)	131(100.0)	68(100.0)	63(100.0)
80-89	2(1.5)	1(1.5)	1(1.6)
70-79	8(6.1)	4(5.9)	4(6.3)
60-69	12(9.2)	5(7.4)	7(11.1)
50-59	14(10.7)	8(11.8)	6(9.5)
40-49	12(9.2)	5(7.4)	7(11.1)
30-39	19(14.5)	12(17.6)	7(11.1)
20-29	33(25.2)	15(22.1)	18(28.6)
10-19	13(10.0)	8(11.8)	5(7.9)
0-9	18(13.7)	10(14.7)	8(12.7)

表 6. 世帯規模(1994年3月末現在)

世帯人員(人)	2	3	4	5	6	計
世帯数(戸)	11	22	8	1	1	43
%	25.6	51.2	18.6	2.3	2.3	100
実数(人)	22	66	32	5	6	131
平均世帯人員						3.05

表 7. 世代構成と世帯構成(1995年3月末現在)

世代	総数	核家族世帯	単独世帯	その他の親族世帯
総数	44(100.0)	36(81.8)	2(4.5)	6(13.6)
1世代	14(31.8)	12(27.3)	2(4.5)	
2世代	24(54.5)	24(54.5)		
3世代	6(13.6)			6(13.6)

表 8. 高年齢者世帯の世代構成と世帯構成(1994年9月末現在)

世代	総数	核家族世帯	その他の親族世帯
総数	15(100.0)	9(60.0)	6(40.0)
1世代	7(46.7)	7(46.7)	
2世代	2(13.3)	2(13.3)	
3世代	6(40.0)		6(40.0)

表 9. 男女年齢別の人口構成(1994年9月末現在)

	総数	男	女
幼少年人口(0-15歳未満)	24(18.2)	15(21.4)	9(14.5)
生産年齢人口(15-60歳未満)	87(65.9)	45(64.3)	42(67.7)
老年人口(60歳以上)	21(15.9)	10(14.3)	11(17.7)

表10. 続柄構成(1994年9月現在)

続柄	馮家埧村3組
世帯主	44(1,000.0)
配偶者	41(931.8)
子	38(863.6)
(長男)	16(363.6)
(次男以下)	6(159.1)
(長女)	12(272.7)
(次女以下)	3(68.2)
子の配偶者	1(22.7)
(3男の配偶者)	1(22.7)
孫	1(22.7)
父	1(22.7)
母	4(90.9)
祖母	1(22.7)

表11. 高年齢者世帯の続柄構成

続柄	馮家埧村第3組
世帯主	15(1,000.0)
配偶者	13(866.7)
子	10(666.7)
(長男)	3(200.0)
(次男以下)	4(266.7)
(長女)	1(66.7)
(次女以下)	2(133.3)
子の配偶者	1(66.7)
(3男の配偶者)	1(66.7)
孫	1(66.7)
父	1(66.7)
母	4(266.7)
祖母	1(66.7)

表12. 非高年齢者世帯の続柄構成

続柄	馮家埧村第3組
世帯主	29(1,000.0)
配偶者	27(931.0)
子	28(965.5)
(長男)	13(448.3)
(次男以下)	3(103.4)
(長女)	11(379.3)
(次女以下)	1(34.5)

第2章 村落の歴史的背景

第1節 村の移住伝説

1. 姓氏分布

(1) 現在の姓氏分布

豊都県は四川省東部の最大都市重慶から172キロ離れており、涪陵地区の管轄下におかれている。重慶の港朝天門から水翼船に乗り、揚子江¹を下っていくと、約4時間でたどり着く²。調査地馮家坝(ヒョウカガイ)³村がこの揚子江の北岸、豊都県城から7キロ離れたところに位置し、県城へは徒歩1時間弱で行けるという交通の便がよく、県内では比較的裕福な村落である。

現在(1994年3月末現在)の人口は表14の如く約1355人、世帯数は約413戸⁴。地縁により七つの集落に住み分けており、行政上7組からなっている。その組ごとの姓氏分布は表13の通りである。

表13(3組の姓氏分布は表16を参照)に示されているように、どの組にも複数の姓氏が分布し、世帯数の多い組ほど、異なる姓氏も増えてくる。組によっては、比較的大きな姓氏がそれぞれ違うものの、全体的にみれば、さまざまな複姓からなる村落である。データからみて、1組と7組では、冉姓が圧倒的な割合を占めているのみである。

(2) 民国期の姓氏分布

さて、解放前の様子はどうだろうか。豊都県档案馆で見つけた『四川豊都県第一区白合郷保甲編查冊』には、表15の如く、当時の十保観音灘における姓氏分布が示されている。

これは民国31年の統計データによるものである。観音灘第10保というのは、いまの馮家坝村1組、2組及び3組の所在地を示す。つまり、馮家坝村の七つの組が民国期においては、それぞれ第8保大橋、第10保観音灘と第特編保白沙沱という三つの行政単位に属しており、現在の行政村の範囲とは、若干の食い違いがある。にもかかわらず、当時の集落ごとの姓氏分布を知るのに貴重な資料であることは変わりない。民国期の保甲と現在の村落を対応させたのは図2である。

この表に示されているように、第10保観音灘という世帯数116戸の集落には、28の姓氏があり、そのうち、冉姓が32戸、27.6%を占めるほか、あとはほとんど人数の少ない姓である。往年の観音灘保は、いまの1組、2組、3組と7組であるため、現在の姓氏分布と比較すると、同じような傾向が見られる。つまり、1組を除き、どの組にも圧倒的多数を占める姓氏がないのである。7組は1970年代までは3組に組み込まれていたが、3組の馮

家規とは小川一つ隔てた向う側に位置するので、農作業上の便宜を考慮してのちに独立したという。ここでは、便宜上3組と7組を一つの集落と見なすことにした。

では、3組の姓氏分布に関連して、その居住理由を表16をみながら検討しよう。

ここでは、早期在住者とは、あくまでも民国期、つまり、解放前(1949年)までを時代的区分の境界線としている。3組の主な姓氏隆姓と李姓が早期在住のほか、冉姓と陳姓には早期在住もあれば、あとからの転入者もある。残りは転入者及び解放後の妻方居住婚である。一応組ごとに姓氏分布をあげると、各組により、多少状況が異なってくるが、共通な傾向を示しているように見受けられる。

3. 村の形成説

7集落のうち、3組の所在地が馮家規という地名ゆえに、馮家規村と名付けられたわけである⁵。村落の略図からみて、3組がちょうど村のほぼ真中に位置しており、地形的にも平坦で、畑よりたんぼが多い肥沃な土地柄である。

この村はいつ頃でき、どれくらいの歴史を持っているのかなどといった質問を村の古老たちに問いかけても、正確なことを言える者は誰一人いない。ただ、百余年前には、馮姓の一族がここに家を建て、移り住んできたため、以来馮家規と呼ばれるようになったそう。その馮家が朝廷で偉い官職についていて、ここ馮家規の風水がよいというので、立派な家を造り、定住するようになった。しかし、のちほど7人の息子たちが相次いで死んでしまったため、やむなく馮家規をあとにし、現在の隣村三股莊村7組馮家院子および大橋村陶家灣などへ散っていった。それゆえに現在の馮家規には馮姓の者は一軒もなく、地名がそのまま残っているのみである。手放したその立派な家はしばらくの間に袁家が住み、まもなくして隆家がいち取った。その隆家が家を手に入して、一族で住むようになってから現在にいたっている。これは集落の古老なら、誰でも知っている話で、よく言い伝えられているが、いつどの世代の誰がいくらで買ったのか、その経緯については、はっきりしない⁶。

隆家の最年長者で、かつ「輩份」世代がもっとも上位である、80歳台の隆仲良氏から、こんなことをうかがった。馮家はその立派な邸宅を誰かに譲ろうとした時に、隆家のほか、二三の別姓の家の候補者があった。結局、〈忠厚〉温厚篤実な隆家の者を見込んで、自分たちの祖先の墓を守ってくれるだろうということで、馮家はとうとうその家を隆家に売り渡す決断をしたそう。つまり、異なる複数の姓氏の競い合いに隆家が勝ったこと

になる。かつて馮家が建てたという立派な家は今でも主に隆家の人々が住み、その区域は「上院子」と呼ばれ、戸数こそ冉姓に比べてかなり劣るが、村では一目を置かれた存在のように見える。冉姓には祠堂も族産もなかった。毎年の清明節に墓参りして、祖先祭祀を行なうのに隣村の白岩頭へ行き、そこで「清明会」をしたそう。冉姓の家からも部分的な経単簿と族譜を拝借できたが、宗族の系譜図を再現するのに資料が乏しい。それに比べて、隆姓の族譜や経単簿の保存状態が比較的好く、清朝期の祖先墓が県内数か村にたくさん残されており、ほかの姓氏に比べて手がかりになるものが比較的に多く見つかったこともあって、第3節では隆姓の宗族の移住史を中心に、その移住伝説を追うことにしたいと思う。

注

(1)『中日大辞典』によれば、チベット北東部に発し、雲南・四川の省境を東北流し、三峡を経て湖北・江西・安徽・江蘇から東シナ海に注ぐ、延長5,800キロである中国第一の大河長江は、昔、下流域の鎮江より下流を「揚子江」といったことから、外国人が誤って長江全体を揚子江と称するようになったという。本稿では、タイトルに長江という用語を用いたが、文中においては、両方とも使われている。

(2)1992年の春、初めて重慶から豊都県に向かって揚子江を下ったとき、まだ水翼船がなく、午前中10:30ごろからもっとも速い便に乗り、夕方17:00までにはようやく目的地に着くといったような具合である。帰りは川の流れを逆らってのぼっていくので、なんと15時間もかかった。その後1度この便に乗り遅れて、昼過ぎ13:00発の鈍行で向かったが、豊都県にたどり着いたのは夜21:00過ぎであった。

翌年になると、高速水翼船が開通し、重慶から豊都県の間はわずか4時間で往来できるようになった。高まりつつある三峡ダム建設への関心による観光客誘致策がもたらした結果であることは言うまでもない。

(3)村落の人口と世帯に関しては、村民委員会が保存する常住人口登記簿をもとに、各集落の古老たちに聞き書きして確認したものである。しかし、同じ時期においても、私が確認した各家族の居住形態と村長の勘定とは、かなりのズレが見られる。結婚などによる分家、「合家」(一旦別々になった親子の2世帯が、老親扶養か何らかの理由により、ある時点から再び一つの世帯になり、生活を共にする)が頻繁に行われているので、たとえ村長といえども、とても村の各家の状況を随時漏れなく把握しきれない。さらに四川省以外の地域への出稼ぎで家を留守にする家族もいて、村落の人口を正確におさえることはちょっと無

理である。したがって、ここで取り上げられた数字は大まかなものしかない。

(4)「坝」は、「坝子」とも言い、西南中国の各省において、平らな土地または平原のことを意味し、「川西坝子」のようによく地名に用いられる。「川東」四川省東部では、「坝」は山間の盆地あるいは山脚地域にも使われる。なお、関連語彙として、「地坝」「院坝」(庭)、「晒坝」(穀物の干し場)が挙げられる。

(5)四川省豊都県地名領導小組編『四川省豊都県地名録』(1984年)を参照。これによると、馮家坝村は解放後、人民公社化が行われた際、仁愛大隊と改称されたが、のちに馮家坝という古い名称にちなんで、村落名を馮家坝大隊に改めた。そして、現在は通常馮家坝村と呼ばれている。

(6)大橋村陶家湾居住の馮姓から、民国4年に再編した族譜『馮氏家乗』を見つけたが、残念ながらかつて馮家坝に住んでいた馮姓との系譜関係を明記していない。馮家坝敷地内の烏龜包という小さな丘にあった馮家坝居住の馮姓の〈祖墳〉先祖の墓が、人民公社の時期にことごとく取り壊され、畑に様変わりしてしまった。ただ、陶家湾の馮姓はつながりがあると強調している。陶家湾に現存する馮姓の墓は保存状態がきわめて良好なのは、同集落に馮姓がたくさんいたし、現在もなお馮姓が多いからだ。これに反して、馮家ba集落には実際馮姓が住んでおらず、墓地の破壊を阻止するほどの力がなかったという。ちなみに、隣村といえども、陶家湾は馮家坝から徒歩5分という至近距離に位置しており、小高い丘にある陶家湾の馮姓の墓(民国期のもの)から、馮家坝を南に一望することができる。

(7)同じ宗族において、自分より上位の世代の者を、現地の口語では「老輩子」と称する。このような世代ランクによる親族呼称及び世代関係の認識は宗族に限らず、村内の異姓にまで拡大されるものである。中生勝美「親族名称の拡張と地縁関係——華北の世代ランク——」に詳しい。

(8)毎年の清明節には、一族が集まって墓参りする風習がある。祠堂がある場合、祠堂で祖先祭祀をおこない、なければ先祖の墓の前でおこなう。その際、同姓の各家から金を出し、1名から2名の男子が代表として参加する。祭文を読み上げ、線香をあげたり紙銭を燃やしたりしたあと、供えものを一同で食べて「直会」をする。これを「清明会」という。清明会の世話役はもちまわりだという。現地で見つけた族譜によれば、宗族によって、春と秋に二回にわたって祖先祭祀をおこなう場合もあり、また、旧正月のはじめにやるものもあると記されている。

清明節に「清明会」をおこない、祖先祭祀するという習慣は、ここ豊都県だけのものではなく、『中国地方志民俗資料匯編・西南卷』をみれば、かつては四川省の漢人社会においても、一般的なしきたりであることがわかる。

(9) 豊都県では、追善儀礼または祖先祭祀に際して道士先生を頼む。そのおり、喪主の懐具合などにより、短くて1日、長くて7日間にわたって行なわれるものである。解放前、死者が出た時は、49日があけるまで、道士先生はずっと儀礼を続けることもありえる。3日以上儀礼をしてもらった場合にのみ、儀礼の終了後、道士先生が「経単簿」と呼ばれるものを綴ってくれる。帳簿に死者名、死亡時刻、死亡の場所、儀礼進行中に読み上げた経懺の数々、参列した親族・姻戚・近隣・知人の名前および彼らが持参してきた香典や紙銭などの項目順に毛筆で記入するのである。この香典帳のような記録は、死者1人ずつのために行われる個別の功德儀礼がもっとも一般的に見られる。しかし、たとえば両親と妻に先に立たれ、数年後にまとめて功德儀礼をおこなうという事例を馮家ba村の隣村でみたが、その場合は3人のために「経単簿」を作る必要がある。

解放後から1980年代前半まで、道士先生による功德儀礼が迷信だと長い間禁止されており、改革開放政策が実施されるようになってから、再び復活した近年では、だいぶ前に亡くなった家族のために功德儀礼をまとめて行なうようなことも少なくなっているようだ。

これまで見つかった経単簿は、馮家ba村に限って10部、古くは清代同治12年(1874)から、そして最近のものでは、1993年に新たに作ったものがある。村志・郷志といったような郷土資料がほとんどなく、族譜の発見も難しい状況下において、これらの経単簿は、民国期の村落における親族・姻戚関係および祖先祭祀・民間信仰などを知るうえで、かなり参考になった

表13. 各集落の姓氏分布 (94年3月末現在)

7組 (24世帯・5姓)

世帯主	実数
丹	17
余	2
楊	2
高	2
何	1

2組 (75世帯・15姓)

世帯主	実数
雷	18
丹	11
盛	9
孫	9
陳	8
李	5
秦	3
譚	3
隆	3
張	2
傅	1
高	1
郎	1
熊	1
王	1

5組 (68世帯・16姓氏)

世帯主	実数
丹	16
陳	12
譚	6
楊	6
鄭	5
林	5
徐	4
何	3
張	2
余	2
孫	2
彭	1
馮	1
李	1
向	1
殷	1

1組 (49世帯・8姓)

世帯主	実数
丹	25
譚	9
鐘	5
何	3
李	2
楊	2
曾	2
徐	1

注:1組の場合、妻方居住婚の2事例について、戸主の姓が確認されなかったため、この表には入っていない。

4組(66世帯・12姓)

世帯主	実数
丹	17
王	9
孫	9
余	7
隆	5
何	4
陳	4
周	3
譚	3
彭	2
胡	2
徐	1

6組(80世帯・25姓)

世帯主	実数
何	24
秦	7
余	7
李	5
陳	5
江	4
孫	4
王	4
張	2
周	2
覃	2
殷	2
熊	2
黄	1
夏	1
劉	1
丹	1
戴	1
代	1
趙	1
範	1
楊	1
易	1
鄭	1
隆	1

注:6組のなかで、妻方居住婚の4事例について、婿の姓が確認できなかったため、この表には入れていない。

表15. 民国31年の観音灘(10保)における姓氏分布(116戸・28姓)

世帯主	実数	世帯数	実数
丹	32	余	3
陳	11	蔣	2
楊	9	周	2
隆	7	盛	2
雷	6	向	1
譚	6	孔	1
張	4	沈	1
徐	4	鄭	1
曾	3	鄧	1
孫	3	王	1
李	3	鐘	1
彭	3	秦	1
湛	3	文	1
何	3	劉	1

表14. 馮家塢村の人口と組分け (1995年3月末現在)

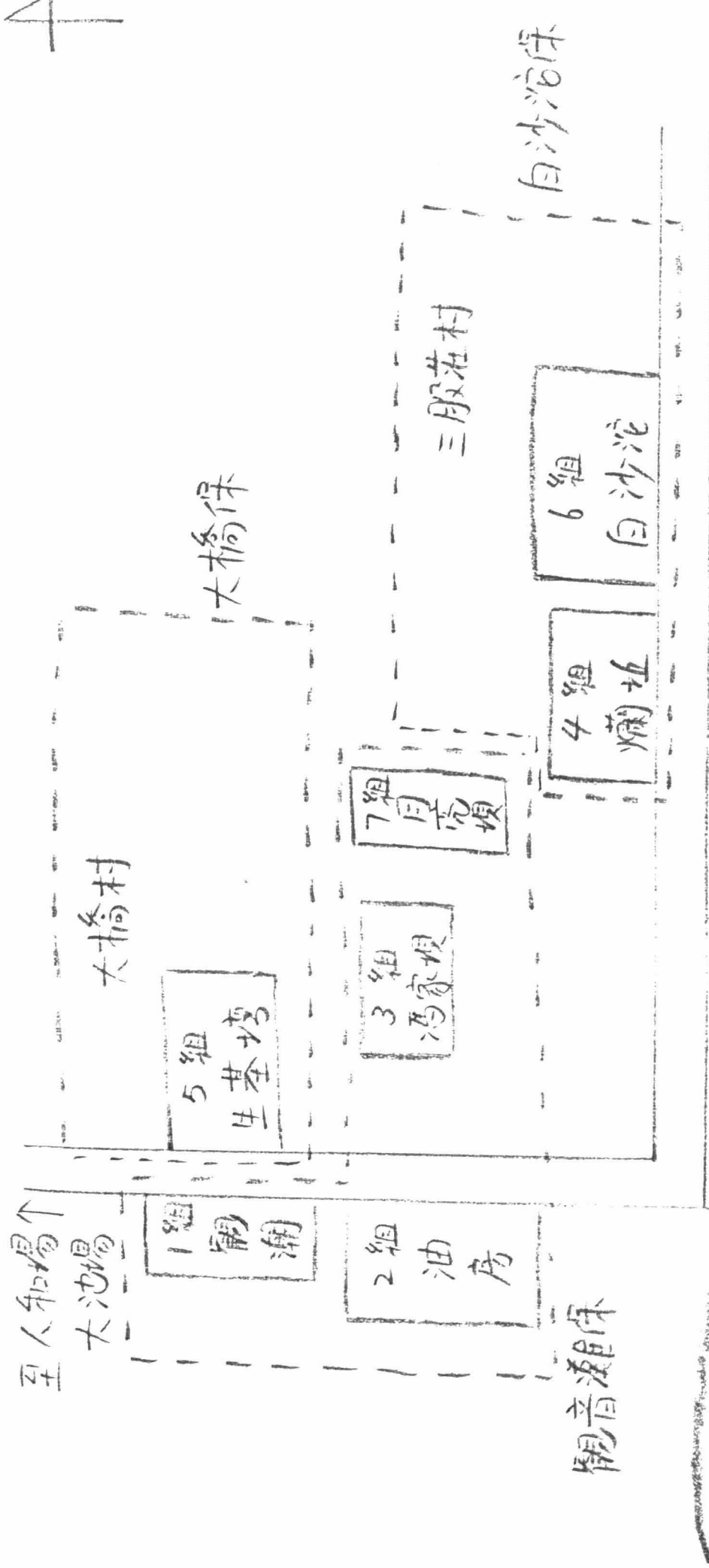
組別	地名	世帯数(戸)	人口(人)
1組	觀潮	51	150
2組	油房	75	252
3組	馮家塢	44	130
4組	爛丘	66	239
5組	生基坊	68	230
6組	白沙沱	84	275
7組	月亮塢	25	79
計		413	1,355

表16. 3組の姓氏分布とその居住理由(43世帯・11姓)
(1994年9月末現在)

世帯主	実数	%	居住理由
丹	12	27.9	早期在住・転入
隆	7	16.3	早期在住
陳	7	16.3	早期在住・転入
李	6	14.0	早期在住
杜	3	7.0	"
王	3	7.0	転入
敖	2	4.7	"
朱	1	2.3	"
傅	1	2.3	"
孫	1	2.3	妻方居住
譚	1	2.3	"

至人和場↑
大池場

4



至豐都果城 →

圖2、現在の集落の位置と民国30年(1941)頃

の対応関係
二月自動車通路

第2節 宋・元・明・清の四川と移民

1. 宋・元期の社会経済

320年にわたる宋代(960-1279)を通して、前期の250年の間に、四川₂では大規模な戦争が発生せず、相対的に安定していた。表17の如く、宋・元期の四川は、軍事上、きわめて重要な戦略基地であった。

1271年、忽必烈汗(元の世祖)が年号を「元」に改め、元朝が生まれた。南宋王朝が滅びるまで、蒙古族が四川で半世紀にわたって戦争をつづけた結果、四川の社会経済が破滅的な破壊を被ってしまった。蒙古族が蜀を攻め落とすまでに、四川の年収は南宋王朝の年収の三分の一を占めるにいたり、毎年供給される軍隊用の米が156万石、これも南宋王朝(1127-1279)の軍隊用米の約三分の一に達していた。宋代における四川の農業面の耕作技術水準および食糧の生産高が、もっとも発達していた両浙地区に次ぐ重要な稲作地域であった。人口面からみると、嘉定16年(1224)には、全国の戸数に占める四川の割合がすでに20%にのぼっており、農業の発達が人口という側面にも現われている。ところが、南宋の後半から、四川は長期にわたる戦争状態に置かれてしまい、江南地方に比べて、社会経済や文化面とも破壊されるはめになったのである。

蜀が攻略されてから、米の生産高が激減しただけではなく、人口も宋の孝宗淳熙2年(1175)の264万戸から元の19年(1282)の12万戸へと、急激に減ってしまった。元代に変わってから数十年たって、統治者が農業生産の復興・発展をはかるための措置を次第にとったにもかかわらず、一部の地域において経済がある程度回復または発展ぶりをみせたものの、総じて宋代の水準に回復するには至らなかったのである。

そして、元末には、全国規模の紅巾軍農民大蜂起がついに起こり、長江中・下流域で活動をつづけた。のちに、指導者の1人である明玉珍が蜂起軍を率いて蜀に入り、四川における元王朝の支配に大きな打撃を与えつつあった。至正23年(1363)、明玉珍が重慶で帝位につき、みずから「大夏」政権を打ち立てた。

2. 明・清期の四川と移民

明朝(1368-1644)ができた当初、全国がまだ完全に統一しておらず、洪武4年(1371)になると、明軍が蜀に入り、大夏政権を覆してはじめて、四川は正式に明王朝の管轄下に置かれた。

明王朝初期の6、70年の間は、政治が比較的公明正大な時期であった。それ以降は、汚職・賄賂などの悪習がはびこるようになり、これに加えて、四川における横暴な地方有力者・地主

による土地の合併がよそより一段とひどくなった。そのため、明の中期から末期にかけて、大規模な農民蜂起が四川においても後をたつことはなかった。そして、農民蜂起軍が明王朝とのたたかいを続けているうちに、李自成、張献忠をはじめとする2つの主力軍によって、明末の農民蜂起が活発に繰り広げられていった。ついに崇禎17年(1644)には、李自成の農民軍が北京を攻略し、明王朝の暗黒支配を覆した。

一方では、農民蜂起軍のもう一人のリーダーである張献忠が同じ年に再び蜀入りを決意し、そしてついに成都を西京として、大西政権をつくった。しかし、彼は2年後に戦死をとげた。張献忠の勢力のおよぶ範囲内においては、地主などによる武装勢力の反発への対策に精一杯で、農業生産の回復をはかろうとしなかった。そのため、農村の経済状況が悪化しつつあった。

明のはじめ頃には、封建的統治者が「移民墾荒」移民によって荒れ地を開墾させるなどといったような経済復興の一連の措置をとったため、社会生産力が急速に向上した。その期間、四川の農業・手工業生産も同様に逐次回復していった。とはいえ、全国的にみると、明代の社会経済の発達が非常にアンバランスであった。とりわけ明のなかばから後期にかけて、江蘇省・浙江省・福建省・広東省などにおいて、農業・手工業の経営方式が大きく変化し、商品経済がそれまでにない繁栄ぶりを呈し、資本主義の萌芽がすでにみられた。それに対して、四川の経済が大きな変貌をみせることなく、むしろ平穏に漸進するという状態にあり、両者の間にある程度の開きができてしまった。

さて、その間人口面にどのような動きがあったのか。元末から明のはじめにかけて、四川の人口が著しく減った。その理由は元末の動乱と関連することは言うまでもないが、しかし、元の至正23年(1363)、明玉珍の建国以後になると、四川においては、長期間にわたる大規模な戦争が別に起きなかった。つまり、元末の動乱は人口減少を引き起こした要因の1つに過ぎない。実際のところ、13世紀半ば頃から四川の人口が減りはじめ、明の洪武10年(1378)ころから、ようやく増えるようになったのである。そして、洪武14年(1381)、四川の人口が急速に増え、大規模な移民運動の結果である。

封建時代では、戸籍の自由な移動が認められないものである。しかし、例外が2つある。1つは戦乱などのため、人口を含む社会秩序に対する政権機構の統制がきかなくなった場合。つまり、主として戦乱を避けるためのものである。もう1つは移民による荒れ地の開墾であり、土地が広く人口の少ない地域への移住を朝廷側が勧める場合。元末から明のはじめにかけて、四川では、2つの状況がともに発生した。そして、史料によれば、明

の初頭に行われた大量の移民の多くが湖広から来たものであり、しかもその移住元のほとんどは湖北麻城孝感に集中していることが興味深い。

四川への大がかりな移民は当然のことながら、移住元が同じ地域とは限らないが、しかし、局部的には、ある特定の移住先における移民が同じところから来たというような事例は決して少なくはない。封建時代の小農たちにとって、長距離の移転は物理的・人的なさまざまな障害があり、並大抵のものではあるまい。したがって、人口の移動における地域的な結合が非常に大事なことであった。地縁で固まった人々が互いに助け合いながら同じ目的地へ向かうということは、1戸あたりの単独行動よりずっと実行可能であったことが容易に推測できる。その意味で、移民の本籍地の集中という事実から、地域的な結合が明代の移民過程にみられる重要な特徴であることがわかる。

元末の移民が戦乱の発生地域からより身を守るため、より安全な地域へ、明の初頭では狭隘な土地からより広大な土地を求めての移動がみられ、いずれにせよ土地の占有と再開発が時代を超えてかれらの共通した目標であった。これは人口移動の特徴の一つとも言えよう。しかも、人口の移動は生産手段をすべて失い、またはほとんど生産手段を持たない流民とはわけが違ふ。四川への移住者にも流民がいただろうが、その主体となるものは比較的経済的に恵まれた者であつたらしい。かれらが四川に入り、そこで「挿占」という方法で大量な土地を手にした。明のはじめ、四川にはたくさんの土地を入手した地主が大量に出現したと同時に多くの「佃戸」小作も生まれた。当時では、地主による「挿占為業」土地の占有および「租佃」小作関係の確立が、凋落した農村経済を回復させる手段の一つでもあった。移民によって他方では、数多くの「小自耕農」小自作農もみられた。要するに、数千万人という大規模な人口の四川への移動が、四川の人口増加と経済の発展に大いに役立ったのである。そのなかで、「客戸」移民が「土著」土着民を超えてしまった点は、明代における四川の社会構成の重要な特徴となった。

時代がさらに下り、清代(1616-1911)に入る。清王朝は農民戦争によって明朝政府が覆されたすきに、農民蜂起軍から勝利の果実を奪い取って確立した政権であるため、その初期から複雑な政治的矛盾を抱えこんでいた。農民による全国範囲における清王朝への武装対抗が長期にわたってつづいた。なかでも明末から清の初頭期の四川はほかの地域に比べて、社会秩序の不安定の状態がより長引いてしまったのである。清代のなかば頃に勃発した白蓮教蜂起は清王朝の前半期における最大規模の農民蜂起であり、その主要な参加者は四川・湖北・陝西の3省の境目に生活する「棚民」(破産した小農で、生活のため余儀なく方

々を転々し、自力で生計をたてるが、暮らしが非常に不安定な人々)、各地の貧困な農民、失業した流民、および四川の囁子(四川民間における特殊な「游民」ルンペン組織)からなっており、戦いは9年続いた。

清代では、全国的に社会経済が急速な発達をとげ、雍正年間には、「攤丁入畝」として、伝統的な賦役制度が改革され、人口の増加を刺激し、農業の生産力は著しく向上し、都市・農村部をとわず商品経済がかなり活発化してきた。それに対して、四川では、清のはじめ、いち早く「攤丁入畝」を実施したものの、経済の回復期は康熙の末期までつづき、乾隆年間(1736-1796)にはようやく繁昌ぶりをみせはじめた。道光20年(1841)、四川の人口が全国総人口のほぼ10分の1に達しており、江蘇省に次ぐ第2位になった。

清代の初頭、長期にわたる動乱でもたらされた人口の激減は、もっとも深刻な社会危機であった。その対策として、清のはじめ、大規模な移民運動が再び起きた。順正10年、四川では、荒れ地の開墾が認められ、役所から役牛を貸してもらい、次第にその牛に値するものを返還させた。康熙・雍正期には、さらに具体策が講じられ、荒れ地の開墾とその永久的占有を決め、5年目から賦役を科すことなどが定められた。よそへ逃亡した四川出身者に対しても、「引照」と旅費を与え、本籍地へ戻ることを許可した。放浪者の四川復帰をはかると同時に、四川への移民をすすめた。湖北・陝西などの移民が持続的に四川へ流れ込み、大がかりな移住が康熙年間のなかばにはじまり、乾隆年間なかばまでつづいた。しかも、こうした移民は難民とは違い、その経済力も四川へ戻ってきた「土著」土着民より強かったことは間違いない。そして、乾隆前半では、持続的な移民と人口の自然増殖という2要素が併存していたが、後半から自然増殖が主な役割を果たすようになった。そして、前半の1戸あたりの人員数3人に至らなかったのが、乾隆末期に入ると、1戸あたりの人口が5人近くなった。「滋生人口永不加賦」人口が増加しても賦役を科さぬという隆盛を極めた清王朝の政策とは、直接の因果関係にあることは明らかである。

しかし、一方では、人口の急増にともなって今度は耕地面積の問題が表面化してくるようになった。乾隆31年、四川省における1人あたりの耕地面積は15畝、しかし、嘉慶末年になると、わずか2畝に減ってしまい、ここまでくると、広大な土地の割に人口が少ないという時代が過ぎたことを示している。それだけではなく、移民などによる人口の絶対的な増加に引替えて新たにもたらされた耕地面積の相対的減少が、すでに現実的なものとなった。したがって、四川省の過剰な人口の外部への移動もはじまった。

総じてみれば、清のはじめ四川省への移民は主として湖広・陝西の両地から来ており、江西・広東および福建がこれに次ぐが、ほかの省や地域からの移民が非常に少ないといってもよい。この時期の移民は「客民」と称され、「土著」土着民と区別された。両者の間に権力争いを避けるため、次第にあとからきた移住者の移住先は「大分散、小集中」さまざまな地域に散在しながらも、特定の地域に集中するというような先住民との住み分けが自然とできあがった。清朝前半期の移民の移住元の多様性から、異なる風俗もそのまま保たれながら、次第に融合していった。しかし、「土著」土着民と「客民」とは相対的な概念で、移住して若干の年数がたてば、移住者も土着になりうる。つまり、清朝期の移民に対して、それ以前によそから移住してきて、定住した者はその意味で「土著」土着民と見なしでも差し支えなかろう。

清王朝の主な農業対策は移民による荒れ地開墾であり、四川への移動をすすめ、開墾者の土地所有権を認め、3、5年後に賦役を科す。しかし、「土著」土着民と移民双方の利益を気を配らなければならず、よそへ逃げた土着民たちが戻ってきたら、その所有していた土地を返還しなければならない。主のない荒れ地なら、数の制限なしに誰でも「挿占」自分のものにすることができ。明末から清の初頭にかけて、長年の社会動乱をへた四川では、生産者の多くは土地から離れてしまった。そこで、経済の復興をはかる移民が頼りとなったが、よそからの移住者にせよ、故郷へ戻った「土著」土着民にせよ、その土地との結合の過程は土地に対する再分配のプロセスでもある。広大な土地の割に人口が少なかった年代には、「自耕農」自作農が生じた一方、「租佃」土地の小作関係も生まれ、地主、自作農および「佃農」小作が農村の主な階層を成していた。土地のわりに人口が少なかった時期では、土地の合併がそれほど進まず、こうした自作農にとって非常に有利であった。しかし、「一紙執照之内、跨山逾嶺、常数十里」。移住してきた地主がもつ1枚の契約書に記されたその所有土地は、山々をこえ、時にはその範囲が数10キロにも及ぶものがあるという。そこで、多くの土地を持った地主は外省からの「客民」移住者と契約をむすび、耕してもらう。しかし、この「客民」が自力できない場合、さらにまた誰かに土地をまた貸しもできる。土地を7、8回もまた貸しする例も決して珍しくない。このような土地の所有及びその小作関係は、移民の開墾のなかで形成されたもので、清の初頭における四川の土地小作関係にみる共通した特徴でもある。土地の所有権は地主のものだが、「佃戸」小作がその土地に対する相対的な支配は、「永佃権」永久小作権、或いは「転租権」また貸し権の形で現われるが、前者は四川ではあまり見かけず、後者が通常な現象である。

注

(1)第2節は主に蒙默等著『四川古代史稿』の第5章 宋・元時期の四川、第6章 明代の四川、および第7章清代の四川(P232-495)を参照した。四川人民出版社 1988.

(2)顧炎武『日知録』卷31の「四川」には、「唐時劍南一道止分東、西兩川而已,至宋則為益州路、梓州路、利州路、夔州路,謂之川陝四路,後遂省名為四川。」と書いてある。唐代には、劍南一道には、東と西にしか分かれていなかった。だが、宋代に入ると、益州路、梓州路、利州路、夔州路となり、これを「川陝四路」と呼ばれるが、のちに四川と省略された。これは四川省の由来である。四川省東部に位置する重慶が、当時夔州路の管轄下に置かれていた。

表17. 歴史上の出来事と四川への移民

年号	出来事	四川の人口及び土地・財政
北宋(960-1127) 孝宗淳熙二年(1175)		2,640,000戸
南宋(1127-1279) 嘉定十六年(1224)		南宋王朝の年収の3分の1を占め、全国戸数の20%に達する。
元(1206-1368) 元十九年(1282) 元末至正二十三年(1363)	紅巾軍農民大蜂起。蜂起軍のリーダー-明玉珍が重慶で「大夏」政権を確立。	120,000戸 戦乱を避け四川への自主的な移民が始まる。
明(1368-1644) 洪武四年(1371) 洪武五年(1372) 洪武十四年(1381) 崇禎十七年(1644)	明朝軍が蜀に入り、大夏政権を滅ぼす。 李自成農民軍が北京を攻略、張献忠が成都で大西政権を確立。	洪武年間(1368-1399)、四川への大がかりな移民が行われる。 84,000余戸 214,900戸 1,464,515人
清(1616-1911) 順治十八年(1661) 順治末年(1662) 康熙(1662-1723) 乾隆(1736-1796) 乾隆三十一年(1767) 嘉慶元年(1796)	戦争が終了、清王朝の統治が四川の西部から東部へ浸透し、四川全域がその管轄下に置かれる。 四川・湖北・陝西で白蓮教蜂起が勃発。戦いは九年続き、清王朝が最	16,000人、全国で後ろから第二位にまで下がる。 康熙なかばから乾隆末期にかけて、再び大がかりな移民が行われる。一人あたりの耕地面積は15畝。

嘉慶末年(1820) 道光二十年(1841)	盛期から衰退へ転ずる重要な事件。 一人あたりの耕地面積は僅か2畝。 38,338,000人、全国総人口の10%に 達し、江蘇省に次ぐ二番目に人口の 多い省となる。
---------------------------	---

第3節 隆姓リニ-ジの移住史

豊都県の東南部には石柱土家族自治県、南には彭水苗族土家族自治県と接しているが、県内は漢人社会である。その圧倒的多数はよそからの移民であり、とくに楊、張、秦、陳、譚、余、王、彭、李などの姓氏が多い。民国期における県の統計によると、621の姓氏(仕事の関係で一時的に豊都県滞在の者も含む)があった。これらの姓氏はそれぞれ血縁関係により、「宗祠」祠堂を一つまたはいくつか持っており、県城には楊、郎、王、張、李などの姓氏の祠堂が存在していた¹。

一般的に四川省の漢人社会には土着民が少なく、ほとんどが「湖広填四川」による移民からなっていると言われる。歴史上たび重なる農民蜂起、大飢饉などのため、土着民はほぼ全滅してしまった。そのため、明の初頭から清にかけて、朝廷の勅命を受けて数度にわたる大規模な移民が行なわれ続けてきた。

明末から清の初頭にかけて、28年にわたる(1644-1664/1673-1680)戦乱のせいで、四川省の社会的生産が破滅的な破壊を受け、土地の荒廃と人口の激減をもたらした。康熙元年(1662)、四川省の巡視に派遣された佟 彩鳳が「川省初定,土満人稀。」四川省がようやく安定したばかりで、耕地が多いのに人口が非常に少ないと記した。この状況は康熙10年(1672)以降も依然としてつづき、「有可耕之田,而無耕田之民。」耕す田があるのに、耕す民がいない。明の万暦年間(1573-1620)に開墾された耕地が13余万ア-ルであったのが、順治18年(1661)になると、わずか10,000ア-ルしか残らなくなり、明代の10分の1にも満たない²。このような「土満人稀」の状況が雍正6年(1728)までつづき、清朝政府は「毎戸酌給水田30畝,或旱田50畝」1戸あたり水田30畝、あるいは畑50畝を与える」という優遇をとることで、「各省入川民人」各省から四川への移民を実施しつづけた。

豊都県の移民史もご多分にもれず、このような時代背景のもとで行われたものと見受けられる。県内に移住してきたのは、清乾隆元年(1662)の者が圧倒的に多かった³。また、移住者たちが豊都県で定住するまでの長い道程は、宗族によって多様性が見られるにしても、その故郷がいずれも湖北麻城孝感に集中していることが興味深い。朝廷による移民政策の意向が大いにかかわったに違いなかろうが、確かに目をひく1つの現象である。

「各省からの僑民は、当初、通婚も同郷人の中でのみ行ない、習俗を同化させることはなかなかしない。……移民は多く同郷を頼って入川してくることを思えば、特定の県の出身者が多いということもあながち不思議ではないが、それにしても、湖北麻

城出身を称する数の多さは異常とはいえ、地方志の編纂者も大きな疑問を呈している。そこで考えられていることは、元末、四川に大夏政権を樹立した明玉珍の出身が湖北随州であり、孝感に近かった。明玉珍とともに入川してきた湖北人の勢力が強かったため、土民も他民もその戸籍を冒称して庇護を求めたというのである。要するに湖北麻城の出身といえ、手ずるを得られ、四川では羽振りをきかせられたのであろう」⁴。

その移動は朝廷による強制的な移民が目立つが、史料によると、自主的なものもあった。『中国歴史大事記』には、こんな記載がある。

「清乾隆25年(1760年)庚辰 周人驥請禁各省流寓人民入川,高宗不准,並謂:承平日久,生齒繁多,在本籍難以維持生計之人口,移民別地,乃情理之常。又謂:古北口外,內地民人前往耕種者達10万戸⁵。」つまり、清乾隆25年、周人驥が各省からの四川への移民を禁止するよう高宗に求めたが、高宗はそれを許可しなかった。高宗が言うには、長い間平和の日が続いたため、人口が増えて、本籍で生計を維持できなくなった人々が他の地方へ移民することは、人情である。古北口の外側の地域において、内地からの移民の数が、すでに10万戸に達したと高宗はさらに語った。

1. 県志・族譜・「経単簿」・碑文などにみる移住史

村人に移住の理由を聞くと、あれは自分たちの祖先が自主的にやってきたのではなく、朝廷にむりやりに連れられてきたものだという認識が一般的のようだ。彼らが言うには、われわれ「四川人」四川省出身のものはよく両手を背中に回して歩く。これは昔、両手を後ろにくくられて余儀なく連れてこられた名残だという。また、身体のだこかには(どこなのか私は記憶していない)その事実を証明できるあざが残っているともいう。だが、後ろ手にしながら歩くという姿勢は何も四川だけのものではない。この説はいかにもこじつけのようにも聞こえる。しかし、大規模な「湖広填四川」から数百年もたった今日でも、自分たちの身体にその縛られた時のあざが残っていると言い切るこれらの意識には、強制的にせよ、自主的にせよ、やはり移住を決断させられた重大な要因があり、数百年も前の出来事があまりにも強烈なものであったに違いない。それがまた言い伝えにより、その子孫の脳裏にもすっかり焼きついているようだ。

県档案館に所蔵されている各姓氏の族譜には、それぞれの移住過程の概略が記載されている。元代には楊姓の祖先が湖北麻城からきた。『余氏族譜』には、元末に紅巾軍が蜂起したため、余氏の祖先が湖北麻城県から豊都県に移住するようになった。『廖氏族譜』の記載では、明洪武2年(1369)には、廖氏の23世

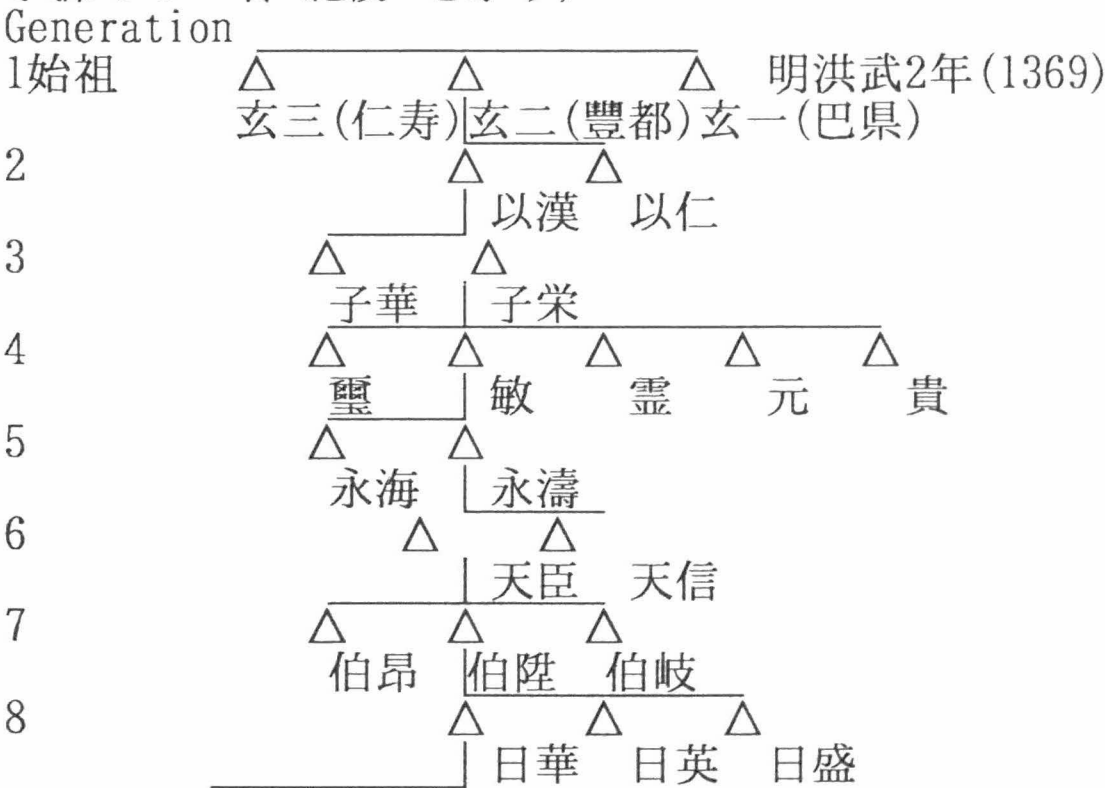
祖が勅命を受け、湖北麻城県から豊都に定住した。馮家塢村に住む隆家の先祖も、この廖姓と同じ年に豊都県に移住したことが族譜でわかった。が、これは単なる偶然とはとても思えない。おそらく朝廷の意志による組織的な移民は、豊都県においては、明のはじめから清の初頭にかけて、何度かに分けて進められたのではないかと推測できよう。

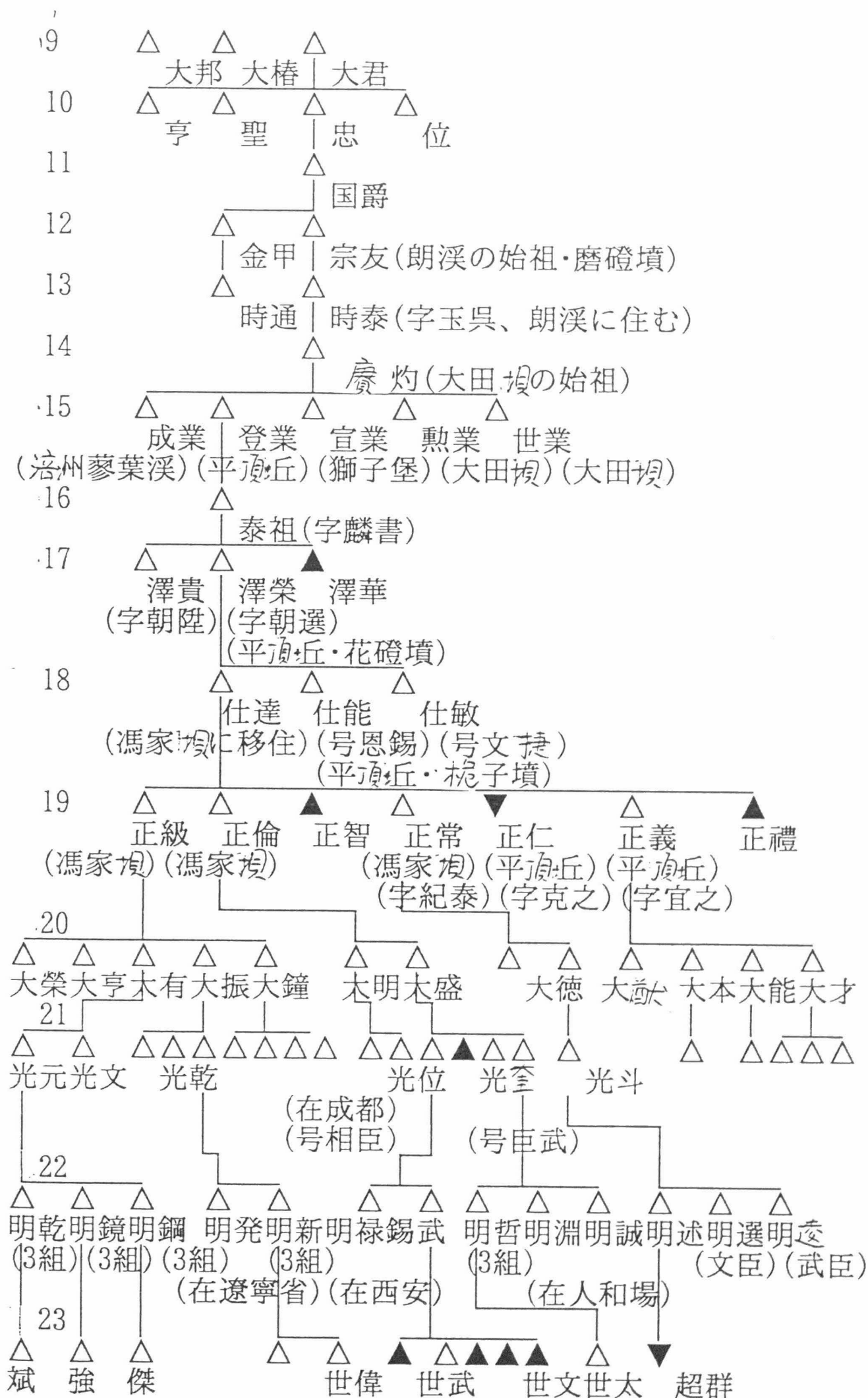
さらに、『劉氏族譜』は、劉氏の祖籍が湖北麻城県にあり、明末の農民蜂起後、豊都に定住するようになった。『張氏族譜』によれば、祖籍は湖北麻城県にあり、元から明にかけて楚より蜀へ遷移したが、そのうちの一支が豊都張家坪にきて、定住した。河面郷李杜詩が書きあげた『李氏族譜』には、李氏の祖籍は湖北麻城孝感にあり、清のはじめ四川省へ移転し、まずは石柱に着いたが、のちに豊都麦地湾に定住した。定住した世代から数えてすでに13世代があげられるという。

民国期の『豊都県志』の記載によれば、清康熙元年(1662)に外省から豊都県へ移民した者には、湖北・湖南、江西、福建などがあるが、中でも湖北麻城孝感の出身者がもっとも多かったと書いてある。わたしが馮家塢村で各姓の村人にその移住の経緯を聞き書きしたが、やはり全部が湖北麻城孝感からきたものだと言われ代々言い伝えられたという。

そのなかで、隆姓はどのような移住の道程をたどってきたのかということについて、具体例をあげて分析したい。

馮家塢村3組隆姓の「世系図」系譜図(▲印は夭折、▼印は男子子孫のない者<絶房>を示す)





(在遼寧省)(在新城)(3組) (3組)



守勝

以上の系譜図は、馮家規村3組に在住する隆姓の世代深度を示したものであり、南陽堂置『豊陵大田規隆氏家譜』、『隆氏族譜』(手抄本)、『隆家経单簿』清同治12年(1874)と『隆家経单簿』民国8年(1919)などの資料をもとに、隆姓の親族関係を再現してみた。

華嚴村に住む隆光明の家に保存されている族譜は手書きのごく簡単な族譜だが、湖廣から四川にやってきた隆氏の移住時期を知るうえで非常に貴重な手がかりとなった。隆光明は、馮家規村における隆氏の第18世祖澤栄(字朝選)の弟三房澤貴(字朝陞)の玄孫にあたる。その族譜の冒頭部分を見てみよう(文中の句読点は筆者が打った)。

「……即如吾門苗裔，出自帝昊開国者，已在唐虞之世。慨自周宋以後，世遠年湮，難追矣。迨至明時，故土係居三楚小邑本郡麻城。甲申兵變，不甚東逃西散之苦。洪武貳年，各奔西蜀川東川北之。分玄一長房寓居巴邑，玄二次房居住豐都，玄三三房落葉仁壽。房總三分，天各一方，而木本水源尤宜考究。時序遞遷，歲月易逝。閱歷明末永曆萬曆之時，幸過才士，偶逢騷人高宗師，更改姓字。原係龍姓。夫龍者，乃蛟龍變化之龍。宗師謂其有犯聖諱，爰筆而親之曰隆。夫隆者，乃隆盛之隆，冀其子孫奕祀有綿遠隆盛之象，而無衰敗之体者也。此三代之時，移姓更變，非清時之謂也。……」

……われらは帝の開国期に出自し、唐虞の世にすでに存在した。しかし、惜しいことに周宋(后周・北宋?)以後には、もはや系譜関係がはっきりしなくなった。そして、明代には、三楚の小さな県本郡麻城に居住していた。ところが、甲申の戦争のため、みなあちこちへ逃げ散ってしまった。ついに洪武2年になると、それぞれ西蜀の川東・川北へと遷移するようになった。長房玄一が巴邑、次房玄二が豊都、三房玄三が仁寿に根をおろした。この三房はめいめいの土地に居を構えているものの、木本水源のたとえのごとくさかのぼれば、同じく祖先にたどり着くものである。しかしながら、歳月のたつのがまことに速い。明末永曆(?)万曆(1573-1620)年間には、詩人で、有識者である高宗師に偶然に出会い、姓を変更してもらった。もともとは龍姓であった。そもそも龍とは洪水を起こすものだ。宗師が言うには、この龍では皇帝の諱を犯すことにもなりかねないので、みずから筆をとって隆に改めた。隆は隆盛をもたらすという意味で、子孫が代々絶えることなく繁栄してゆくことを期している。

現在見つけた隆氏の族譜のうち、「湖廣填四川」のため、豊都県に移住した隆氏の始遷祖の移住時期、移住の理由をはじめ、移住当初の様子および龍姓から同音異字の隆姓へ変更した理由などを記載しているのは、この手書きのみである。

2. 移住当初の隆姓及びその郎溪・大田・馮家・馮家村への移動

漢人社会の場合、同じ宗族ならば、名前をつけるに際して、同じ世代の者同士が「輩名」を共有することで、どこにしようと、親族におけるお互いの世代ランク、上下親疎が一目瞭然である。四川省ではこの輩名を「字派」という。たいがい五言詩か七言詩、または四言詩の形式となっており、韻をふんでいるゆえ、誰でも簡単に誦ずることができる。しかし、馮家・馮家村では、その輩名を表記する文字については、同音語の区別にさほどこだわらぬようで、多くの村民は口ですらすら言えてもその文字を正確に書けない。おそらく輩名詩を考えた人は、読み書きのできぬリニージの成員にも、各世代を示すそれを覚えさせるために凝らした工夫であろう。

三元区龍洞湾に住む隆長倫氏(元豊都県長)にうかがったところ、彼らの「字派」輩行名は以下の通りである。「時^廢 於徳, 正大光明。福澤長遠, 応運維新。文安武定, 治順化賢。天齐顕汝, 世際時清。」どの宗族にも世代ランクの上下関係によって、尊卑・遠近・親疎などといった相互関係が決まり、世代間の混乱を免れるため、それぞれの輩行を示す文字の重複は本来ならなるべく避けるのである。しかし、32文字の四言詩としてまとめられたこの輩行名は、なぜか「時」という文字を重複させてしまった。単なる単純な間違いであろうか。

龍洞湾居住の隆姓の輩行名をメモした同氏のノートには、隆姓の別なサブリニージの輩行名が記されている。「時^廢 於徳, 正大光明。君澤顕廷, 登啓宇文。興守維忠。」この輩行名はわずか20文字の四言詩となっており、中途半端な気もする。しかし、冒頭部分には、1663年、隆時功が湖北麻城より豊都にやってきた当時、県内の人口が400人であったと記録されている。このサブリニージにおけるいわば伝説の始遷祖隆時功は、馮家・馮家村居住の隆姓の13世代の祖先隆時泰及びその弟時通と同じく輩行名をもち、おそらく同世代の者であったと推測できよう。もっとも、馮家・馮家村の隆姓の輩行名は「時^廢 於徳澤, 仕正大光明。……」と五言詩のようになり、少々食い違いがあるとはいえ、輩行名の一致という点からみて、少なくとも隆時功が豊都へ移住してきた1660年代までは、龍洞湾居住の隆長倫のサブリニージ、隆時功の属するサブリニージ及び馮家・馮家村居住の隆姓は同じリニージにあったことは間違いなからう。ただし、その時分は、馮家・馮家村の隆姓の13世代の祖先隆時泰はまだ郎溪に住んでいたの

であろう。

現在言い伝えられているこれらの隆姓の輩行名は多少の違いこそあれ、たいがい「時_廣 於德澤,仕正大光明。」からはじまっている。ところが、見つかった手書きの族譜の記録によると、隆姓は明洪武2年(1369)、戦乱を避けるため、3人兄弟が湖廣から四川にやってきたという。3人とも四川省東部に落ち着くことになったが、豊都県に来たのはそのうちの玄二であった。それ故、彼が豊都県に移住した隆姓の始遷祖となるわけだ。いま現存する族譜や経単簿の記録によれば、四川に定住するようになってからの輩行名は、馮家垸在住の隆姓の場合は13代目から数えることになり、そして目下のところすでに24世代まで続いている。始遷祖を同じくする大田垸など県内における他の村落に居住している隆姓には、早くも26、7世代まで下る者もいるにもかかわらず、輩行名からみれば、せいぜい14、5字の「世守維忠孝」までしか綴らないでいる。ここで疑問を感じたのは、豊都へ移住した13代目までの12世代には、いわゆる輩行名という命名法がなぜ使用されなかったのか。馮家垸村3組隆家の「世系図」系譜図をみると、2代目が以、3代目が子、5代目が永、6代目が天、7代目が伯、8代目が日、9代目が大、11代目が国と、輩行名が用いられていることは一目瞭然だ。ただし、4代目、10代目及び12代目のはおそらく字または号のどちらかであろうことが推測できよう。

一方、村人の言い伝えによると、せいぜい朗溪の始祖12代目の宗友公とその兄弟金甲公までの記憶しかさかのぼることができない。この宗友公の墓が朗溪にあり、磨磴墳と呼ばれる。この地方では、新天地を開発し、そこで定住するようになったサブリージの始祖の墓地を磨磴墳という。磨磴とは、墓印としての自然石のことかと思われる。宗友公の息子13代目の時泰とその兄弟時通も同じ朗溪に居住し、死後そこに葬られた。おそらく湖廣からはるばる豊都に移住してきた玄二の子孫は、ずっと適宜な移住先を探りながら県内を転々としたのではないかと想像できる。そして、11世代にわたって先人たちの並々ならぬ努力により、12代目の宗友公のときになるとようやくその移住先の模索が一段落し、相対的な安定期に入った頃であろう。

民国期、大田垸で行われた「清明会」のおりも、やはり朗溪にある磨磴墳を参ったそうだ。なぜ相対的な安定期というのか。隆姓の系譜図をみてわかるように、その後も子孫の繁栄のため、数世代ごとにたえず移動を繰り返している。12代目の宗友は朗溪に移動した始祖で、その孫にあたる14代目の_廣 灼が朗溪から大田垸に移動、のちの大田垸に居住する隆姓の始祖となった。そして、長男世業と次男勲業が大田垸に残ったが、三男宣業以下はいずれもよそへさらに移住していった。三男は同心獅子堡

へ、四男登業は華嚴平頂坵へ、五男成業は豊都をあとにし、涪州蓼葉溪へ移動することになった。湖廣から四川へ移住した明洪武2年(1369)から数えると、ちょうど15世代目のこの四男登業の房はいま馮家坵村3組居住の隆姓にとって、分枝の始祖になるわけである。ここではほかの隆姓の房はともかく、馮家坵村3組居住の隆姓の直系先祖のみについて、もう少し分析を試みよう。

登業の孫17代目澤榮(字は朝選)とその兄弟澤貴(字は朝陞)までずっと華嚴平頂坵にとどまり、2人とも官につき、たいそう立派な墓を建てられた。墓地の形・墓石に彫り刻まれた模様から、朝選公のは梔子墳、朝陞公は花磴墳と現在でも村人がそう呼ぶ。平頂坵に居を移したこの房には宗祠こそ建てなかったが、毎年の清明会に際して、朝選公の大きな墓の前の空き地で祖先祭祀をしたという。そして、朝選公の4男18代目仕達がついに馮家坵へ移住し、馮家坵の隆姓の房の始祖となる。馮家坵「上院子」の隆姓の墓地のなかで、もっとも立派な墓はこの仕達公のものだ。仕達には7人息子がいたが、上の3人が平頂坵にとどまり、下の4人が馮家坵に葬られた。いま馮家坵3組に生活しているのは、19世代の6男正倫と7男正級の子孫である。ここで人的移動が終わったわけでは決してなく、さらに続いていく。詳しくは「5.馮家坵への定住」を参照されたい。

要するに、湖廣から移住先を追い求めに四川へやってきた隆姓の3人兄弟が移住当初から巴県(重慶市の近郊)、豊都、仁寿(四川西部)へと散っていった。そのうち、豊都に移住した玄二の房の12世代の子孫宗友がついに朗溪に居を構えることになる。そこから、いまの行政区画でいえば、鎮江郷大田坵→同心郷山頂村獅子堡→人和郷華嚴村平頂坵→涪陵蓼葉溪→名山鎮馮家坵村馮家坵など、県内を中心に、さらに隣接の涪陵へと分枝し、2、3世代ごとに移動を繰り返していく。石嶺郷安隆橋村や名山鎮新堤村の隆姓については、つぎの節に譲りたい。しかし、重要な問題点が残っている。

1. 豊都県における隆姓の主な居住・移動分布図を示したのは図3である。四川への始遷祖から12世代に至る間、いったいどのようなルートを経て朗溪までたどりついたのかという点に関しては、族譜などの資料が乏しく、知るすべもないのが現状である。それから、朗溪→大田坵→獅子堡→平頂坵→蓼葉溪→馮家坵という方向で、隆リニージの人的移動は何をつてに行われたのか。金でものを言わせたのか、宗族の結集力によるか、それとも婚姻関係がきっかけとなったのかについても、いまだにわからないままである。

2. そして、金盤郷龍洞湾村龍洞湾、三元郷灘山坵村、理明

郷 谷村興隆湾、紅星郷隆家溝村隆家溝など県内ほかの村落に住む隆姓とは、輩行名の一致、民間の言い伝えなどからみると、四川への始遷祖を同じくすることはほぼ間違いなからう。ただし、どの時期にどのようなルートでどのように移住したのかははっきりしない。他方では、三元郷隆長倫の属するリニージは1663年、湖廣から移住してきた隆時功という人物が始遷祖とされるが、朗溪の隆姓と何らかの形でつながっていたに違いない。ただ、これまでの不十分な資料では、その系譜関係を追及することは無理かもしれない。

3. 豊都県の東部は石柱土家族自治県、東南部は彭水苗族・土家族自治県と接する。彭水のさらに東部・東南部には黔江土家族苗族自治県および酉陽・秀山土家族・苗族自治県がある。これらのうち、石柱・黔江・酉陽・秀山は湖北省との境目に位置している。豊都県を取り囲む周囲の環境を考慮すれば、隆姓リニージをはじめとする湖廣から移住してきた人々と苗族との関係にも留意する必要があるように思われる。

ほかに、皇帝の忌みにより、「龍」から「隆」に改姓させられたという記載も興味深い。というのは、早期の苗族は明代まで「有名無姓」の状態がつづき、明万暦年間(1573-1620)に一部の苗族居住地域においてはじめて呉、龍などの姓氏が使用されるようになった。なかでも、四川の東部に接する「湘西」湖南省西部には呉、龍、石、麻、廖という五大姓氏がもっとも数多く、龍姓の一部は隆姓から改姓されたもので、「小龍」と呼ばれる。もともと龍姓ならば「大龍」と呼ばれて、この「大龍」と「小龍」との間は通婚できる。「同姓不同宗」で、「共祖」同じ祖先を持っているからであろう。明末清初、政府による「湖廣填四川」という移民奨励政策によって、苗族を含む少数民族と漢族との間に、どのような同化、融合、相互的影響があったのだろうか。

3. 安隆橋の橋普請

さて、鎮江郷安隆橋村に居住する隆姓の移住史をみることにしよう。

安隆橋村は豊都県城の北に位置し、徒歩では約1時間半かかる。世帯数191戸のうち、隆姓が半数以上の150戸を占めている。隆姓のほか、朱、李などの姓があるが、現在のところ村の党支部書記は隆姓だが、村長は朱姓である。解放前のこの村では、隆姓のほか、李姓の勢力が割合強く、甲長・保長などは異なる姓氏のバランスがとれるように、順繰りにつとめた。解放後は、朱姓が隆姓に次ぐ二番目に強い姓氏となったそう。戸数上、隆姓が圧倒的な優勢にたつにもかかわらず、村レベルの幹部の座をすべて隆姓の者が占めるわけにはいかないらしい。

県政府に勤務する安隆橋出身の隆文平氏から、村に定住するようになった隆姓の移住史¹⁰を伺った。安隆橋の隆姓には、民国15年(1926)、清朝廩生¹¹であった隆正笏が編纂した『隆氏族譜』(上下冊)がある。言い伝えによると、明洪武2年(1369)、隆姓の2人兄弟が湖廣からやってきて、当時は忠県hua家fu(ここで、まだ確認できていない漢字を、ローマ字でその発音を示した。以下同様。)にいた。その頃は貧乏だったので、力仕事で生計をたてていた。のちに豊都県の朗溪に住み、さらに忠県pa山に移り、三元郷灘山¹²、安隆橋に定住する前は豊都東部の隣接県石柱に居住していた。しかし、そこは長江の南岸の山間地帯であり、住み心地が良くなかった。そこで、適宜な移住先を占ってもらい、結局康熙年間(1662-1723)に豊都県安隆橋に定住するようになった。

ところが、石柱から再び豊都県に戻り、安隆橋に居を構えようとしたおり、すでに安隆橋には「先住民」である別の隆姓リニージがいた。もっとも、石柱からやってきた隆姓はもともと隆姓ではなく、龍姓であった。先住民の隆姓に対して、新来者の彼らは「低3輩」3世代ほど下位世代として扱われ、そこに定住するようになったのには、さぞかし長い道程であったろう。

清道光16年(1837)、隆姓の者を中心に、安隆橋の工事建設のための募金を行い、立派な橋を作ることができた。当時、「監生」¹²である隆萬善が書いた碑文が今でも橋のすぐそばにある碑亭に刻まれている。その概要は以下の通りである。

「われわれの故郷は北は王家場、社壇、南は県城へ通る交通の要所に位置する。2つの山がそびえたっており、その谷間を川が流れてゆく。春から夏の季節の変わり目になるたびに、川が増水し、古い橋がすっかり流されてしまい、人々は川を渡ることができず困り果てている。亡き父が存命中、この橋の再建を幾度も計画したが、その願いがいつに叶わなかった。去年の冬、予は親族・姻戚・隣近所の衆と相談し、塵も積もれば山となるという思いで募金簿をこしらえ、広く募金を呼かけたにもかかわらず、手にした額は僅か数10余千文に止まった。ああ、これだけではどうにもならんと、川に臨み何度嘆いたことであろう。そこで、兄弟が母上に事の経緯を報告した。母上が申すには、みなのお役にたてるなら財産を惜しむことなんぞあるまい。橋普請のためならば、喜んで寄付させてもらおうではないか。汝らそれを為し遂げたまえ。母上の了解を得てさっそく工事に取りかかり、春から夏にかけて、六カ月間にわたりついに橋の建設を完成させた。それ以後、洪水が起きようと橋はびくともせず、舟の便もよくなった。兎にも角にも橋ができたため、人々は自由に往来できるようになった。ゆえにここにて橋普請の由を記して、並びに寄付者一同の名前を石に刻ませて頂きたく、

申し上げる次第である。」

この橋は「単孔石拱橋」アーチ型の石橋で、長さ約10数メートル、幅3メートル。文化大革命の動乱期までは、橋の両側に石の手すりもあり、橋の表面に龍や鳳凰などの模様が彫り刻まれた大変立派な石橋であった。石の手すりやきれいな模様などが取り壊されてしまったにもかかわらず、往年の面影がまだ残っている。橋の近くに建てられた高さ約2.5メートルの碑亭には、安隆橋という文字が大きく刻まれており、周囲を人物や龍などのめでたい模様が描かれている。六角形の石碑に、どの方向から見えるように、橋普請の顛末を記した碑文がぎっしりと連ねられており、寄付者及びその寄付の金額まで全部載っている。

この碑文をもとに、表18のごとく、安隆橋工事のための寄付金内訳表を作成した。この表に出ている寄付者は計125名。そのうち、隆姓が57名、半数近くを占めているが、金額のほうに寄付金全額の96.8%を占めている。さらに、隆姓の主な寄付者の系譜図を図4で示した。募金を募るために「会首」世話役が必要だが、その役にあたった者も隆姓だ。表にわずか1世帯しかない姓氏には、臨時的に來た石大工が多かった。ここでひとまず2世帯以上の寄付者を、当時この村に居住していた者とするが、計57世帯で、隆姓の世帯数とはほぼ同数だ。つまり、隆姓以外の姓氏は世帯数こそ村の半分を占めていたにもかかわらず、かれらからの寄付は実際のところ、取るに足らぬものに過ぎなかった。碑文には、世話役、一般人、「隆門」、「郷約」、石大工、隆氏同男の順で、寄付者の名前を並べている。ここで言う一般人には、隆姓をはじめ、ほかの姓氏も混ざっている。「隆門」には、楊安泰、秦先瀨、隆萬興、隆元徳の4名が挙げられたが、おそらく楊と秦は隆姓の姻戚ではなかろうか。「郷約」は旧時、村内の公務を司った保長・村長のような人物であり、橋普請のような地域社会の公共事業にはこれらの人々の協力が必要である。ここで注目すべきなのは、碑文の最後に掲げられた隆氏「同男」とその父系親族一同による寄付である。計480,000文、全額の89.5%となっている。

地元に住する隆姓の言い伝えによると、この橋がようやく完成し、橋の命名をしようとした時に、思わぬ一悶着が起きたという。橋は安long橋(龍と隆は同音異字で、両方ともlongと発音する)と決まったが、肝心な真中の1文字は隆と龍のどちらにするかで決まりかねた。あげくの果て、県まで訴えて、仲裁をしてもらった。結局、龍もよいが、それより勢いが盛んなことを意味する隆盛の隆に軍配があがり、橋は安隆橋に決まったのみならず、もともと龍姓リニ-ジの者までそれ以後悉く隆姓に改姓したのである。そのため、碑文を見るかぎり、龍姓が1つも見当らず、全部隆姓となっている。のちにこの村は橋にち

なんで安隆橋村と呼ばれるようになった。清代道光16年(1837)の出来事であった。龍姓が石柱からこの地に移り住むようになって174年目にあたる。新来者の龍姓が安隆橋に移住し、農業だけでなく、商売でかせいだ金でどんどん田畑を入手する一方、子弟に読書に励ませ官についたりすることで、すっかりと勢力を伸ばしてゆき、定住するようになった頃でもあろう。そこで村で強力な経済力をもつ龍姓の者は、さらに地域リニ-ジへの発展をはかるきっかけをつかむのに、みずから筆頭として橋の建設に乗り出したのではなかろうか。先住民の隆姓とのいさかいを端的に現わした事件である。

ところが、当時橋普請の寄付者の隆姓のなかには、朗溪から安隆橋へ分枝した隆姓と、石柱から安隆橋へ移住してきた隆姓が、それぞれどれだけいたのだろうか。碑文にはもちろん、そんなことは一切触れていない。そこで、隆正^{あつ}が民国15年(1926)、安隆橋ができた87年後に編纂した『隆氏族譜』を頼りに、確認作業をした。この族譜は康熙年間(1662-1723)、石柱から安隆橋に移住してきた隆姓リニ-ジの移住後の様子を中心に書かれた。安隆橋への始遷祖君佐公から数え、その輩行名は「徳単鳳麟萬,武正大啓。」の9字のみ。隆正^{あつ}が族譜の編纂に着手したころは、すでに始遷祖から10世代つづき、それまでの輩行名では間に合わなくなった。そこで彼は新たに91字をつけ加え、100文字の五言詩のような韻文に仕上げた。彼の考えでは、1字は1世代、20年を1世代とし、計100字の輩行名があれば、しめて2000年くらいは心配がないだろうということである。

寄付者一覧には、隆^{あつ}氏「同男」とその父系親族が一目をおかれる存在だ。ちょっと引用させてもらおう。「2房:孫 隆武靖 武昭 武奇,3房:監生 隆萬善,4房:隆萬雲,5房:隆楊氏」この6名だけで計480,000文を寄付した。系譜関係が不明の者が何人かいるが、ここで安隆橋工事に際する隆姓の主な寄付者を図で示した。ここで孫というのは、あくまでも隆^{あつ}氏という老夫人に対してだ。この親族関係に関する貴重な記述から、隆姓リニ-ジにおける隆^{あつ}氏の亡き夫は「麟」字の世代であることが確認された。「萬」字世代は彼女より1つ下位の世代で、5房の隆楊氏の夫も「萬」字世代である。

筆者が思うには、安隆橋を建てる目的の1つは、石柱からきた隆姓リニ-ジの力の誇示にある。この図でよくわかるように、橋普請のための費用の大部分は、「麟」字世代の2房の子孫が負担している。「麟」字世代の4人息子は「老4房」とよばれ、橋普請のころ、「長房」長男麟元と「次房」次男麟亨はそのまま安隆橋正沖に居住しているが、「3房」3男と「4房」4男はすでにほかの村落堤上水溪子へ再移住していった。ほかの村落へ分枝した「3房」と「4房」の隆姓リニ-ジの成員は安隆橋に住んではいけないものの、

橋普請に際してちゃんと寄付金を寄せ、リニージとのつながりをしっかりと保っている。安隆橋へ移住して4世代目の2房麟亨の家系ははとりわけ金持ちで、官につく者も多かった。麟亨と隆舟氏の3男萬善は当時は監生で、橋工事の経過を綴ることから、おそらく当時リニージのなかでもっとも偉い読書人であったに違いない。

寄付にあたっては、隆姓リニージにおいて、「萬」「武」「正」「大」の4世代にわたって寄付金が集まった。ところが、民国期の族譜に掲載されたりニージ成員の名前の欠如と確認が行き届いていないうえ、「正」「大」の2世代は、ちょうど先住民の隆姓リニージと輩行名(…時_時 於德澤, 仕正太光明…)が重なってしまったため、実際誰がどのリニージの者か、確認作業が難しい。推測するに、先住民の隆姓リニージからの寄付が20数戸あるが、ほとんどの場合は少額に過ぎない。

以上は安隆橋の工事を中心に、新来者の隆姓リニージと先住民の隆姓リニージの村落における力関係を考察した。康熙年間、石柱から豊都県安隆橋に移住してきた隆姓リニージは商売と官職による収入で、移住して4-8世代目に財産を作り上げ、ついに橋普請という村落社会の大事業に取組み、地域リニージへ拡大していくための一歩を踏み出した。先住民の隆姓リニージと違い、彼らは祖先祭祀をするための祠堂を建てるほどの余裕もあり、毎年の「清明会」をおこなうのに、60石の「祭田」祭祀用の田畑がある。

しかし、問題点が1つ残る。豊都県内の姓氏の多くは清代康熙年間、湖廣からの移民だということは前にも述べた。それに対して、安隆橋に居住する隆姓リニージのいずれも紛れもなく明代洪武2年(1369)に移住したものである。ただ、湖廣から一旦豊都県にやってきて、その後は石柱県に移り、さらにそこから安隆橋へと、移住先を転々としているため、同じく隆姓だが、相対的に先住民の隆姓からみれば、新来者とみなされていた。異なった長い移住過程をたどってきたこの2つの隆姓リニージは、どこかでつながっていないだろうかと筆者は感じる。この疑問を彼らに投げかけたが、なにしろ民国期以前には族譜というものがなく、あるいはかつてはあったにしても、土地改革や文化大革命の時期に処分されてしまっている。2つの隆姓リニージの成員は、始遷祖の四川豊都県への移住から約325年間の移住史について、知っている者がほとんどいない。

先住民の隆姓リニージの場合、ちょうど移住先の模索が一段落し、朗溪に定住するようになった12、13世代目にあたる。現在用いられている輩行名はこの13世代目から数えられ、保存されている大田煥の族譜(民国期に編纂された)には、この13代目

の祖先を移住先朗溪への始遷祖として書かれているが、湖廣から四川へ移住した始祖から12世代目に関する記録は皆無である。もう一方の隆姓リニ-ジが有する族譜(民国5年に編纂された)の序文によると、過去には族譜というものがなかったため、リニ-ジの移住過程などについて知るすべがないとのことだ。この族譜の内容は、あくまでも清代康熙2年(1663)石柱県から再び豊都県に再移住した始遷祖から200年近い期間の出来事にとどまり、石柱県にいく前の様子、さらにそれ以前をさかのぼることができなかった。その輩行名も当然、始遷祖から数えることになるわけである。この2つの隆姓リニ-ジの成員たちにとって、湖廣から豊都県へ移住した当初の状況について、民国初期に書き記された族譜という「認識された歴史」の範疇を超えていない。もっとも、湖廣から四川へ何人兄弟でいつやってきて、それぞれどこに根をおろしたのか、それくらいは代々言い伝えられているが、言い伝えの出所ははっきりしない。

湖廣から四川省豊都県へ移住する時期の一致、輩行名の年代の一致、2つの隆姓リニ-ジがいずれも朗溪とかかわっているなどの事実から勘案して、この2つのリニ-ジは現在の輩行名が使われる以前、つまり移住して13世代目以前の段階において、系譜関係がたどれるのではないかと、そう思えてならない。不十分な資料や聞き書きでは、まだこの事実を裏付ける有力な証拠が、現段階にはない。しかし、同じ隆姓リニ-ジの地域リニ-ジを目指す上昇過程を考察するのに好適の事例だと考え、安隆橋をめぐって2つの隆姓リニ-ジの葛藤を通して、移住民がある地域に定住し、次第に影響力を伸ばしていく過程での問題に示唆を与えてくれる。石柱県から安隆橋に移住した龍姓リニ-ジが橋普請などをするのは、みずからの力を誇示する要素が含まれ、村落レベルを上回るもっとも有力な地域リニ-ジへ拡大させるためのきっかけをつかんだ。

寄付金の内訳が示されるように、龍姓リニ-ジがほかのリニ-ジが太刀打ちできぬほどの経済力をもっていた。橋は安隆橋に決まったのは仕方ないとしても、なぜあれだけ橋普請に金をつぎ込んだ龍姓リニ-ジが隆姓にまで改姓する必要があったのか。先に述べたように、馮家壩に居住している隆姓リニ-ジの祖先、つまり安隆橋における先住民の隆姓リニ-ジがもともとは龍姓であった。明代の初頭に湖廣から豊都県に移住し、そして明末には、龍姓を名乗っていたら、皇帝の諱を犯しかねないと恐れ、同じ発音の隆姓に改めたという記録は華巖村の隆姓の手書きの族譜にはっきりと記された。安隆橋の建設で地域社会に高く評価されたはずの龍姓リニ-ジも、果たしてかつての隆姓のように皇帝の諱を恐れたのだろうか。それとも改姓を決断させられるもっとも大事な理由があったのか。つまり、それまで認識されなかった隆姓リニ-ジとの系譜関係が判明したことで、あえて

同じ隆姓にしたのではないかと筆者は推測する。安隆橋の普請から87年後の民国5年(1926)に、石柱からきたこの隆姓リニージの族譜が編纂された。読書人の¹³ 生隆正¹⁴ 弼を中心にあしかけ4年がかりで仕上げたものである。しかし、残念なことに、安隆橋のことも、龍から隆への改姓についても、一切触れていない。わざと触れようとしなかったのか、それとも資料不足でそうしなかったのかは、いまとなっては知るすべもない¹³。

4. 華巖の隆姓

つぎは華巖へ移住した隆姓をみることにしよう。馮家¹⁵ 村3組隆家の系譜図を眺めると、12世代の金友公とその弟金甲の二人が朗溪への始遷祖とされるが、金友の孫14世代の¹⁶ 灼になると、もう朗溪から大田¹⁷ へ移り、大田¹⁸ における隆姓リニージの始遷祖となった。始遷祖から15代目は5人兄弟である。長房世業、次房勲業がそのまま大田¹⁹ に残っているほか、3房以下はいずれも大田²⁰ をあとにし、新たな移住先を求めた。そのなかで、いまの華巖村平頂²¹ 址に移るようになったのは4房登業である。

華巖は大田²² へから約20数キロ離れたところに位置する。低い山々の間にたんぼが広がっていた。ここは地形上、貯水しやすいので、1960年代の後半にこの地でダムを建設し、高灘ダムに様変わりした。18世紀前半に登業がここを定住の地として選定したのは、この広い土地に目をつけたに違いない。ダムを見下ろす丘陵に大きな墓群が点在する。碑文で判明できるもののうち、清代嘉慶17年(1813)から光緒8年(1882)の墓がある。なかでも群を抜いて立派なのは、17世代の澤榮(字は朝選)とその次男仕能の墓地だ。

朝選の墓は花磴墳と呼ばれ、墓の正面は幅5、6メートル、奥行きは10数メートル。大きな石で作られた墓の表面に動物・人物・花や草などの模様が彫りほどされており、手前に拝むための「祭台」が設けられている。華巖に住む隆姓リニージには祠堂がなく、祖先祭祀するための「祭田」もなかったが、毎年「清明会」のおり、祠堂のかわりに必ずこの花磴墳の前で行われていた。その儀礼が解放前(1949年)まで続いた。朝選はどういう人物なのか。

華巖居住の隆姓が持っている手書きの族譜によると、朝選公は「覃恩正八品」という官職についていた。さらにその長男仕敏と次男仕能の三男正名は「邑增生」、仕能の孫大炳は「巡檢貴州²³ 懋署多²⁴ 缺」、大炳の長男光明は「典史貴州實²⁵ 缺」、そして仕能の次男正徳の孫光燦は「六品御」と、いずれも読書人で官についたと記録されている。

大田埴に現在居住している隆姓の族譜によれば、隆姓の最初の「字派」輩行名はつぎの通りである。「時_廢 於德澤,仕正大光明。」という十文字のみであった。それまでの輩名がやがて一回りして終わってしまうので、のちに第17代目の朝選公が先祖の輩名と重複せぬよう、新たに「世守維忠孝,家傳在讀耕。朝廷_衰 治化,海甸協昇平。繼述宏先緒,丕承万古榮。」という30字をつけ加えた。つまり、先祖さまの大きな徳のおかげで、一族が繁盛し出世する。先祖代々の家を守ってゆくのに忠誠と孝行につきること。つねに読書と耕作をおろそかにしてはならぬ。朝廷の政治が安定し、僻地においても安穩な暮らしができる。祖先のあとを引継ぎ、子々孫々栄えてゆくようにという意味合いである。

碑文によると、朝選が世を去ったのは道光14年(1835)、その頃妻の張氏がすでに亡くなっていた。そこで、2人の「合墳」夫婦墓を作るのに、隆姓リニージの成員計25名が連名で金を出し合い、その世代深度は朝選からみて、息子・孫・曾孫・「元孫」・玄孫の5世代にわたっている。彼らと朝選公の系譜関係を図5 澤榮(朝選公)夫婦の墓を建てた者に図示した。ただし、手元の資料と今までの聞き書きにより、系譜関係が確認できないでいるのは13名にものぼり、孫:正啓、正福、正祥、正巳。曾孫:大魁、大元、大周。「元孫」玄孫:光華、光策、光遠、光明、光映、光煦。確認できた者はほとんどが朝選の直系子孫にあたる。朝選の次男仕能の墓_杭子墳の碑文には、仕能が亡くなったのは光緒14戊子(1888年)、享年83歳と記されている。ということは、1835年のころ、彼はちょうど30歳だ。弟仕達はもっと若かったろうが、しかし、碑文には仕達の孫の名前まであがっている。つまり、記載された年代に間違いがなければ、30歳未満の仕達がもはや孫を持ったということになる。長兄仕敏の孫たちの名前もある。ほかには、族譜によると、仕能に光明という同名の曾孫がいることが記載されているが、当時彼はまだ30歳なので、到底考えにくい話である。

それから、正元という人物だが、図5'の系譜図を参照すると、彼の高祖父勲業は15世代目の2房で、長房とともにそのまま大田埴にとどまっていた。正元にとって、澤榮は「隔房」違う分枝に属し、しかも8親等である。一般的に漢人社会の服喪範囲は、「五服」内の親族である。「五服は実際の血縁関係、即ち特定の個人(ego)を中心とする一定の父系血縁集団の親族の範囲である。」¹⁴egoからみて、この五服と呼ばれる5親等の範囲はその日常的にもっとも頻繁的に付き合うもので、葬式の場合も例外ではない。つまり、正元からみた朝選は五服をはるかに超えてしまった遠い親族であり、本来なら来なくても良からう。ところが、朝選は華嚴に分節した隆姓、大田埴の隆姓にとっても、粗末にできぬ重要人物なのである。さきほど述べた隆姓の輩行

字を40字にまで追加したのは、ほかでもなくこの朝選であった。「覃恩正八品」である朝選のみならず、族譜によれば、その5世代下の子孫まで読書人、官職につく者が多かった。おそらく当時までの隆姓リニージにおいて、華巖に住む朝選は出世頭で、一目を置かれた存在であったに違いない。

のちに朝選の3男仕達が華巖からさらに5、6キロ離れた馮家塢に移るようになった。その子孫は、毎年必ず朝選の墓花磴墳の前で行われる清明会に参加し、そして、数年ごとに朗溪の「大清明会」にも出かけており、解放前までつづいた。華巖に分節した登業の孫朝選とその親族も、多分朗溪で行われる清明会にもよく顔を出し、同じく隆姓リニージの大田塢分枝との連係をとっていたのだろう。そういうわけで、リニージの存続・発展に貢献した朝選公の死亡に対して、いくら五服を超えた8親等だからといって、大田塢の隆姓サブリニージを代表して、正元が出ないわけにはいかなかったであろう。

一方では、仕能と2人の妻を「合墳」一緒に埋葬した墓は父朝選の墓より敷地面積がもっと広く、きれいな模様が彫り施されたほか、墓の手前両側に石で作られた高さ5、6メートルの「華表」が建ててある。これは、読書人のうえ、ある程度の官職につかない限り、建てられぬものである。地元の人はこの2本の華表を「梔子」といい、墓の代名詞として、仕能の墓は「梔子墳」と呼ばれている。解放後、墓の周囲に植えられた木々が跡形もなく伐採されてしまったため、現在のところ見る限りは、父朝選の墓と比べて勝るとも劣らぬほど立派なものだ。にもかかわらず、仕能の墓を建てたのは、3人の息子に孫1人に過ぎなかった。これには一つは仕能の直系子孫に読書人で、官につく者が多く、経済的な余裕があげられよう。五服の原則も関係するが、隆姓リニージ、サブリニージにおける仕能の役割と貢献度が、父朝選公とは比べものにならなかったという点も見逃すことのできぬ要因ではないか。

解放前、華巖に住む隆姓リニージが行う清明会には大清明会と小清明会の2種類がある。大清明会には、馮家塢に移動した朝選の3男仕達の子孫が参加するが、小清明会はおそらく朝選の兄弟朝陞の分枝を中心としていた。しかし、両方とも祠堂もなく、祖先祭祀のための特別な祭田もなかった。ただ、解放直前までに200石あまりの土地をもち、その中から一部の土地を祖先祭祀用の祭田にしようとしたところ、新中国の誕生を迎えたので、実行に移すことができなかったという話を馮家塢の隆姓の古老から伺った。

華巖村に住む隆姓から見せてもらった手書きの族譜では、湖廣から四川に移住した3人兄弟の記載からはじまり、豊都県に

きた玄二を始遷祖とする父系の系譜関係を中心に展開した。15世代目まではリニージ成員の名前とその移住先の記載しか見られないが、大田埴から華巖に移った15世代目の登業から、不完全ではあるが、その配偶者の姓氏及び墓地の場所まで記録した。記録は20世代の大、21世代の光という世代まで下っている。そして、15代目からは、登業のほか、3房宣業と5房成業も大田埴からそれぞれ新たな移住先を求め、同心場獅子堡と涪陵蓼葉溪へ移動した。この族譜は4房登業のほか、大田埴から出ていったほかの兄弟2人に関して、その息子まで族譜におさめた。なのに、大田埴に残った上の兄2人の名前をはじめ、それ以降の系譜関係については、まったく触れていない。なぜなのか。

ちなみに、大田埴に住む南陽堂置¹⁵、『隆氏族譜』隆姓の族譜と突き合わせてみよう。こちらもごく簡単な記述であり、華巖村の族譜と比べると、四川への始遷祖をたどれず、隆姓リニージが豊都県へ移住して約270余年の歴史については、空白状態にあるという大きな欠点がある。この族譜では、朗溪への始遷祖12代目の宗友公を始祖としている。不備が多いが、宗友公から配偶者の姓氏くらいは載せてある。そして、15世代目の5人兄弟のうち、大田埴に残った長房と次房を中心に書かれており、余所へ行った3人の兄弟の系譜関係に関しては、3人の名前をとどめただけである。毎年行われる清明会があるため、音信不通が原因とは考えにくい、やはり兄弟と言えども、リニージから余所へ移住していけば、その帰属意識として、もはやリニージの新たな分節と考えられるようである。

ここで、朝選公の墓作りに協力した隆姓リニージの成員を考察したことにより、サブリニージとその分節との関係に興味深いものを感じた。つまり、リニージ内における「紅白喜事」冠婚葬祭には、その参加者は五服以内の親族に限ることが原則である。しかし、分節に帰属する朝選公が、リニージの中で屈指の読書人で地位が高い。リニージの「字派」輩行名を新たに付け加えるなど、思うに清明会などの祖先祭祀のおりも、「祭文」祖先への追悼文の作成をまかせられるほど、重要な存在であったろう。華巖のセグメントに属する朝選公は、おそらくその上位にある大田埴のサブリニージ、そしてさらに上位の朗溪に住む隆姓リニージ成員のなかにおいても、発言権が大きく、リニージを統合するうえで、彼の果たす役割は無視できぬものがあつたと想像できよう。

5. 馮家埴への定住

大田埴から華巖に移り住んだのはNo15世代目の登業であつた。それからまもなく、登業の曾孫で、朝選公の3男仕達が華巖から5、6キロの馮家埴に移住するようになった。移住時期について、村の形成説で触れたが、父朝選公の存命中にすでに馮家埴

へ行ったのかもしれない。なぜならば、朝選が亡くなった時、仕達にはすでに何人かの孫ができ、その孫の1人大峯の名前が朝選の碑文に連ねられたからだ。かりにその時期を朝選が亡くなる5年前の道光10年(1830)とすると、もはや160余年経過している。仕達は馮家塢への始遷祖とされ、その墓は「上院子」の裏山青桐嶺に建てられ、いまでも毎年の旧正月に墓参りに来てくれる親族がその墓の前で紙銭を焼き、線香をあげる馮家塢に住む隆姓の墓のなかでもっとも立派なものである。もっとも、華嚴平頂塢の兄仕能の墓とは同日に語るわけにはいかぬが。碑文によれば、仕達が世を去ったのは大清同治7年(1868)のことである。隆家の系譜図をみると、仕達には7人の息子がいる。しかし、上から3人の息子たちはいずれも華嚴平頂塢に埋葬され、3人の息子たちも華嚴に住んでいたであろう。華嚴の広い土地は、彼らの足を引き止めたかのように思われる。

下の4人の息子が馮家塢で暮らしており、現在でも3組で生活しているのは7世帯に過ぎず、いずれも6房正倫と7房正級の子孫である。民国31年(1942)の統計では、同集落の隆姓も7世帯であった。ただ、現在では3、4人からなる核家族が大半を占めており、約50年前の家族構成がいまより複雑であり、人数も当然もっと多かったと思われる。

華嚴から馮家塢に移った隆姓は戸数が少なく、1つの分節としてまとまって祖先祭祀するよりも、清明会のおりは、かならず1人ずつの男子が各家を代表して、華嚴に出かけていたものであった。清明会には大清明会と小清明会の区別がある。華嚴のほうには、大小2つの清明会に別れ、それぞれ父系出自の血縁の遠近によりできたものである。このような清明会の種類は、さしずめ華北の「老墳会」と「小墳会」の類に相当するであろう。馮家塢の隆姓が参加したのは大清明会であり、朝選公の墓花磴墳の前で祖先祭祀の儀礼と直会をするのであった。おそらく大清明会の参加者はみな朝選公の子孫ではないだろうか。華嚴と馮家塢の隆姓リニージ成員を統合するのに「族長」が必要だ。そして、解放直前までの族長をつとめたのは、馮家塢に家を構え、華嚴を含む付近の隣接村落で私塾の先生をしていたNo20世代目の大有であった。それでもなお、馮家塢居住の隆姓だけでは、小清明会をやれるだけの統合力と経済力がなかったようだ。

そのほか、大田塢・華嚴・馮家塢などの地にそれぞれ分散した隆姓リニージの成員は毎年ではないが、数年間に一度朗溪に集まって、そこで清明会をしていた。民国26年(1937)、朗溪の清明会に出るため、馮家塢の隆仲良らが馮家塢から約30キロ離れた朗溪へいくのに4時間歩いた。当日の晩はまた安隆橋まで歩き、隆家溝という隆姓リニージ成員の居住地に1晩泊めさせてもらった。さらに、民国30年代のある年に、汾陵など余所からの

隆姓リニージの成員がやってきて、豊都県城丁子街の寺で大がかりな清明会をおこない、この清明会を「合族」同じリニージの系譜関係を確認するという。この時の清明会には、馮家塙の隆姓はもちろん、おそらく豊都県内に住む隆姓の多くは代表を遣わして、駆けつけたかと思われる。その時、祭台のかわりに使われた机には、各サブリニージ・分節・屋敷内居住集団・家族からあずかった族譜や経単簿が高く積み重ねられたそう。しかし、このような動きは解放後、一切中断させられてしまった。

馮家塙の隆姓は解放前まで、偽郷長や甲長をつとめた者・私塾の先生・竹細工の職人・主として農業で生計をたてる者及び炭鉱の労働者など、さまざまだった。解放後まもなく繰り広げられた土地改革運動により、解放前の各家の経済状況、社会的地位などに鑑みて、階級区分がなされた。その際、「悪覇」・地主として銃殺された者もいれば、「自耕中農」自作中農、貧農もいた。馮家塙への始遷祖仕達以降を2、3世代下ると、No20、21世代目の大・光字世代である。この世代からまた別な場所への移住がはじまった。時代は民国20年代(1930年代)、移住先は7キロ離れた人和場(県内定期市の1つ)と四川省西部の最大都市成都などである。当時の県城から馮家塙の近くまでは粗末な道路しかなかった。農業だけではなく、商売でひと儲けしようとした者にとっては、定期市のある人和場は魅力的な場所であったろう。

時代がさらに解放後に入り、とりわけ1958年以後には、農村人口の自由な移動が規制されるようになった。そこで、No22世代目の明字世代の隆姓には、進学あるいは仕事関係がなければ、自由にこの村から去ることができなかった。農村人口の移動に対する規制がいくらか緩やかになったのは、1978年からの改革開放政策の実施及び農業の経営方式の変革がきっかけである。とくに近年では、農業以外で得た収入で農業から手を放すばかりでなく、住み慣れた農村をあとにし、県城または新城などに新たな家を構える者がいる。今後、経済の発達により、都市へ流れていく傾向が依然として強くなる一方、馮家塙のような町に近い近郊農村は、県城から遠く離れた県内の多くの村落より、その近代化の度合いは、ある意味では農村の都市化といっても差し支えなかろうが、ますます大きくなっていくことであろう。

以上は隆姓リニージの移住過程を、県内における隆姓のいくつかの居住地の様子を通して、簡単に振り返ってみた。ここで気づいたことは、移動が非常に頻繁におこなわれているという点である。No12世代目の朗溪への始遷祖から、同じく県内でも平均して2、3世代のうちに、男兄弟の数名がまた新たな土地を求めて移動してしまうというケースが続く。前にも触れたことだが、康熙年間を通して、政府による大規模な移民が幾度もお

こなわれた結果、乾隆31年(1767)の1人あたり15畝の耕地面積は、嘉慶末年(1821)になると、わずか2畝に激減してしまった。あげくの果て、人口の重圧に耐えられなくなった地域では、四川省から他の省への流出もはじまった。移民による人口の増加は、地域差もあるだろう。12世代目以降の隆姓リニ-ジの成員はしょっちゅう移動を重ねつつ、ここまで生きながらえたのは、おそらく人口の増加による土地の不足が重要な要因のように思われる。

しかし、1663年の豊都県の全人口はわずか400余人に過ぎなかったという点を考え合わせると、ちょうど11世代目の生活していた時代であった。石柱県から安隆橋に移住した龍姓リニ-ジのように、生活上の便宜や風水により、ときたま余所へ移り住むようなことがあっても、のちのような頻繁な移動はしなかったのではなかろうか。

もう1つは限られた土地の肥沃さが原因ではないか。隆姓リニ-ジの居住する村落を数村まわったが、丘陵地帯か山間地帯に位置し、稲作ができるたんぼはそう広くはなかった。ほかには、山あいや丘を利用して小麦・とうもろこしなどの雑穀がとれるが、収穫高が決して高いものではない。そのため、リニ-ジの人口増加により、男子子孫がみな集落にとどまっていると、次第に食べていけなくなる厳しい現実が待っていたのであろうことが推測できよう。

ところで、四川省の移住民研究として、1995年に、山田賢著『移住民の秩序--清代四川地域社会史研究--』が刊行された。社会史・社会経済史の問題関心から清代の四川移民社会を取り上げているが、とりわけ第2章 移住民社会と地域エリートは興味深い。著者は3省(陝西・湖北・四川)交界地帯に位置する四川東部の雲陽県における1移住宗族--泔氏という「大姓」有力宗族の軌跡を検証するケース・スタディを通して、「移住民社会内部においてある社会体制--安定的なシステムが形成されてゆく過程を明らかにしようとした」¹⁶。

そして、泔氏をめぐる様々な社会関係の中から婚姻関係を抽出し、その変動を通時的に検討し、完成された雲陽泔氏宗族の社会関係自体が、すでに安定的なシステムの1つであろうが、「さらに彼らの通婚圏という私的な『回路』を通して、宗族連合とも言えるべき社会関係」及び有力宗族の上昇モデルのプロセスを究明することに努めた。保存状態の良好な 泔氏宗族の族譜をふまえた山田氏の分析は、移住民からなる四川省その他の地域、とりわけ同じ四川東部に位置する筆者の調査村における宗族の定住過程を理解するうえでも、大変示唆に富む有効なものであると考える。さらに、経営面において、大地主=米商とし

ての涪氏の商売の手腕、社会的志向性においては、「局紳」として地方行政への参与を果たしてゆく地域エリートとしての軌跡に対する考察は、四川という移住民社会の地域性が見いだされ、説得力のある論著である。しかし、限られた不完全な族譜しか入手していない筆者にとっては、そのような詳細な確認作業は到底無理かもしれない。

注

(1)四川省豊都県地方志編纂委員会『豊都県志』四川科学技術出版社:86-87.1991年.

(2)「四川近代苛捐」(雑税考)を参照。胡漢生著『四川近代史事三考』重慶出版社:1-2.1988年.

(3)同(2) 1991年.

(4)森紀子:154-167.

(5)沈起煒:502.1983.

(6)この事実が判明できたのは、馮家埧から徒歩約一時間かかる華巖村に居住する隆姓の家から、新たに族譜(謄写本)を発見したからである。その隆姓(隆光元という名前だが、彼の兄隆光周は解放前に馮家埧村に移り住み、解放直後、村の農民協会主席、村長を歴任した。現在2組に居住している。2組の隆姓は馮家埧村3組の隆姓とは「五服」5親等を超えた系譜関係にあり、現存する碑文や「経単簿」などの史料から、馮家埧村の隆姓はおそらく、清の同治(1862-1875)から光緒年間(1875-1909)の期間にその分枝がこの華巖村から移ってきたものであろうことが推測できる。

(7)この村に比較的多い冉姓の輩名を調べた時、解放前、三代続きで道士先生をやっていたという家から、輩名を記した族譜を拝借し、町へ行ってコピーした。あとでそのことを馮家埧3組で売店を経営している冉姓のご主人に話したら、僕は音を覚えていたが、どんな字なのか知らないから、その「字派」輩行名を写させてくれと頼まれた。なお、村民委員会が保存する常住人口登記簿には、たとえば隆世武という名前があるが、真中の「世」という字は輩名だが、同音語の「仕」か「時」で書かれたりすることはよく見られる。単なる教育水準の問題であろうか。

(8)民国期、大田埧で行われた「清明会」に関して、馮家埧村3組居住の隆仲良(1912年生まれ。竹細工職人・大工。私塾7年の教育を受け、会計をやったことがある。)、隆錫武(1924年生まれ。私塾5年の教育を受け、土地改革のころ、生産大隊の「錢糧」会

計係をつとめた。)に伺い、また民国20年代、豊都県城で行われた隆姓の「清明会」の様子については、主として4組隆守栄(60歳代。小卒。もと県運輸会社の運転手。)から聞き書きしたものである。

(9)胡起望「苗族」:274-278.張聯芳主編『中国人的姓名』中国社会科学出版社 1992.

(10)安隆橋居住の隆姓の移住時期に関しては、隆文平氏が最近石柱土家族自治县県辦公室の関係者に、その帰属するリニージの湖廣から四川へ移動した始遷祖の様子を問い合わせた。そして、向こうで調べた結果、やはり馮家垸の隆姓と同じく明代洪武2年(1369)に移民したという事実が確認された。これは単なる偶然とは思えない。ただし、民国期以前の古い族譜が見つからぬため、この二つの隆姓がかつては同じ出自かどうか、つかみきれないでいる。しかし、両方とも朗溪とのかかわりがあり、しかも龍から隆へ改姓したなどといった偶然の(?)一致から推測すると、どこかでつながっているのではないかという私の思いがどうしても拭えないのである。

(11)廩生とは廩膳生員のこと。明・清期に府・州・県から定期的に銀及び食糧手当を割り当てられる生員を指す。ここで生員とは、明・清期に科举試験の一番下のランクをパスし、府学・県学において勉強できる者をいう。生員ならば、郷クラスの試験に出る資格をもち、通称秀才という。

(12)監生とは、明・清期に国子監(封建時代の国家最高学府)で勉強し、またはそこで勉強する資格を獲得した者をいう。だが、清代に入ると、このような称号を金を出して手にすることができるようになった。

(13)隆正効が族譜編纂に取りかかったのは民国1年、4年後完成した頃には、もはや古稀を迎えていた。当時、交通の便が悪く、高齢の彼はとても同じリニージの成員たちの居住地へは、いちいち訪ねることができなかった。『隆氏族譜』の序に、彼自身が編纂過程の苦労話を書き残している。そこで、彼は主に安隆橋居住の「麟」字世代の長房と次房の子孫を中心に比較的詳しく書いた。堤上水溪子居住の3房と4房、ならびに豊都県を離れ、夔陵に土地を買取り、そこに移り住んだリニージの成員については、ごく簡単に書いたのみである。それが原因で、自分の所属する房だけこひいきするという不満不平の声があがり、族譜の著しい不備が批判を受けた。

(14)Friedman, M. 1959:43.

(15) ここの南陽堂とは、おそらく隆姓リニ-ジが四川入りするまで、湖廣におけるリニ-ジの祠堂のことかと推測する。同様な事例はたとえば、かつて馮家埧に居住していた馮姓には曲水堂と題名された『馮氏家乗』がある。

(16) 山田賢著『移住民の秩序--清代四川地域社会史研究--』名古屋大学出版会:64. 1995.

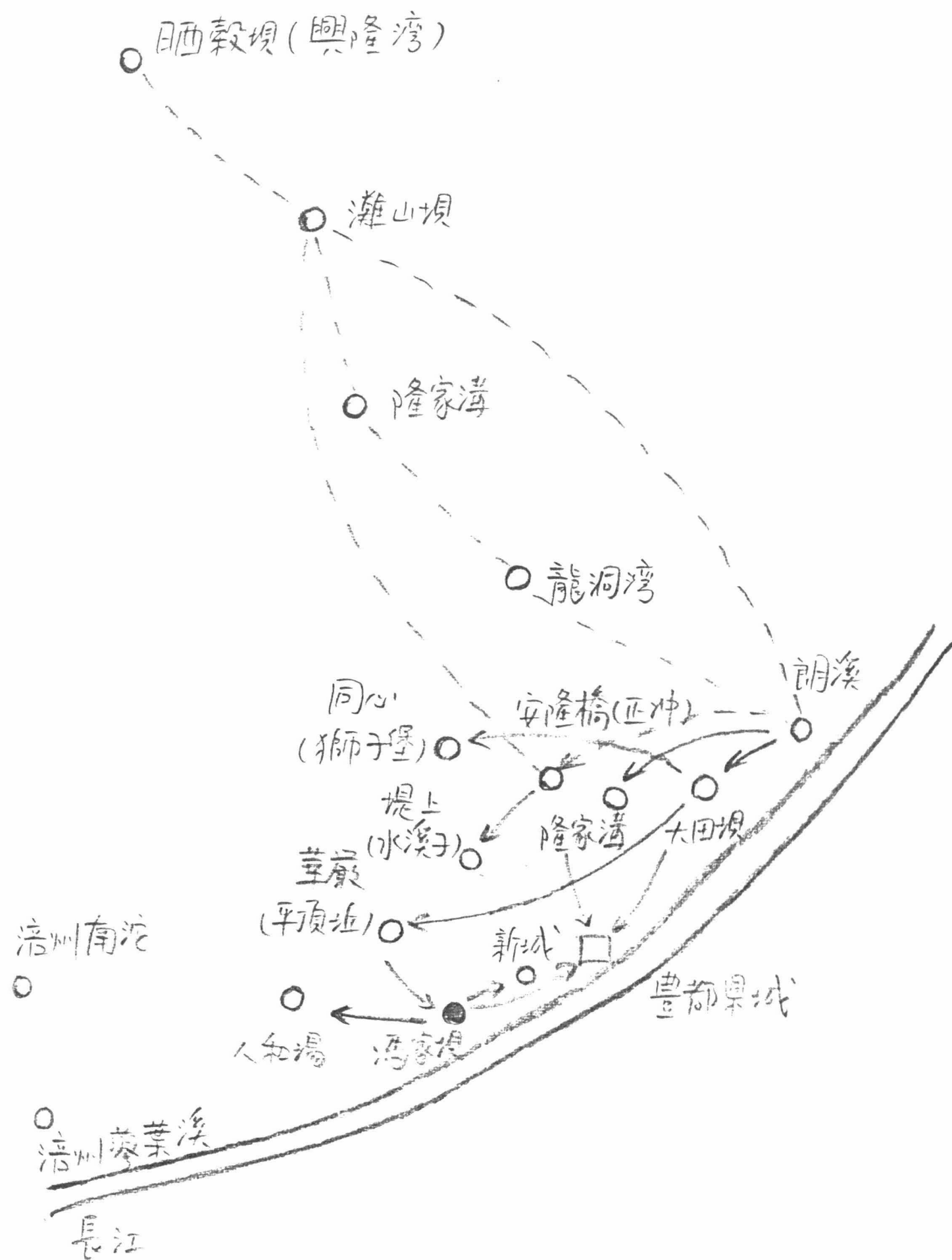


図3、豊都県における隆姓の主な
居住地及び移動分布図

(虚線の部分、移住年代及び移住ルート
のさだかでない場合である)

表18. 安隆橋工事建設のための寄付金内訳
単位:世帯/文

姓氏	戸数(%)	金額(%)
隆/その他の姓氏	125	536,380
隆	57(45.6)	518,980(96.8)
隆冉氏「同男」一同	6(4.8)	480,000(89.5)
その他の姓氏	68(54.4)	17,400(3.2)
李	12	
何	9	
秦	7	
曾	6	
陳	6	
楊	6	
譚	5	
董	4	
冉郎	2	
謝	1	
覃	1	
朱	1	
孫	1	
雷	1	
高	1	
梁	1	
江	1	
文	1	
王	1	

注：ここで取り上げられた寄付者は、いずれも父系親族を代表する一家の主である。隆冉氏、隆楊氏、李余氏、秦唐氏のように、配偶者が亡くなり、家を継ぐべき男の子がまだ幼いか、または不在であろうと推測される場合は、当然彼女たちの嫁ぎ先の姓氏として勘定した。

図々. 安隆橋工事に際する隆姓の主な寄付者(●と▲は寄付者を示すものとする)

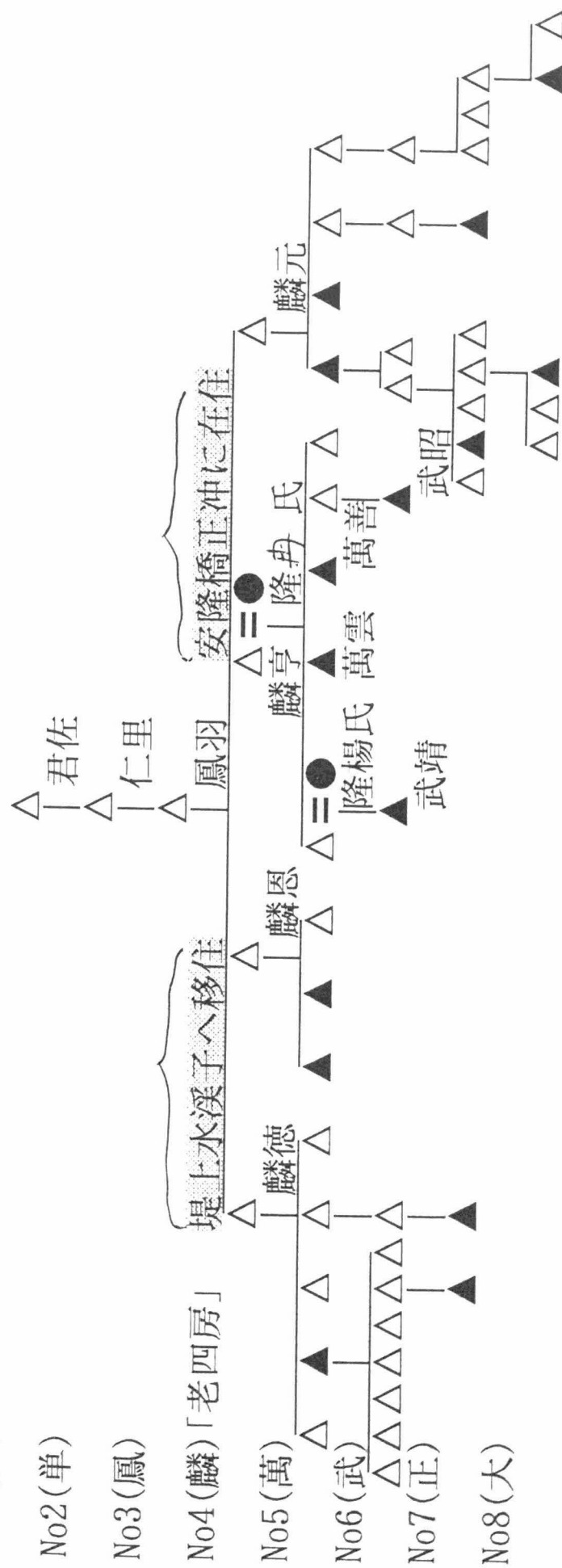
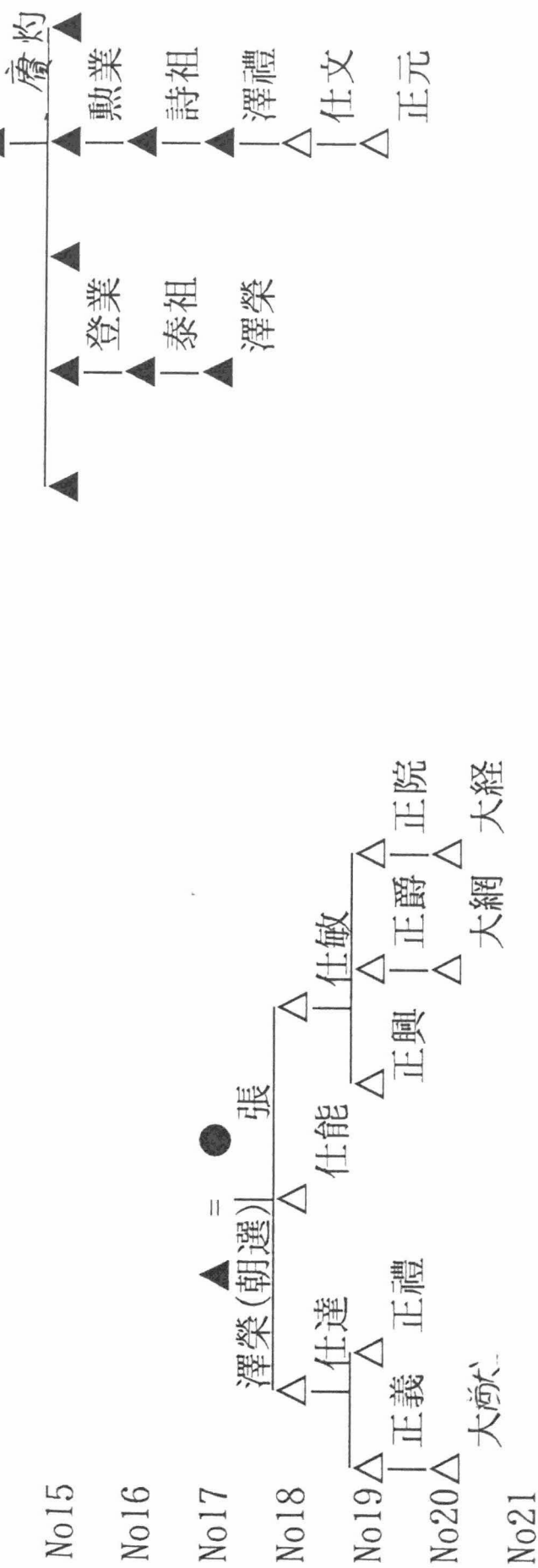
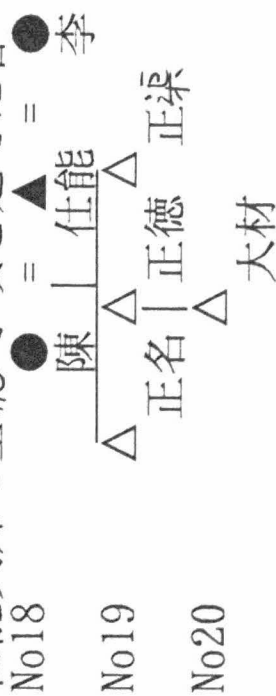


図6. 澤榮(朝選公)夫婦の墓花燈墳を建てた者(△は金を出した者)
No14



仕能夫婦の墓に子墳を建てた者



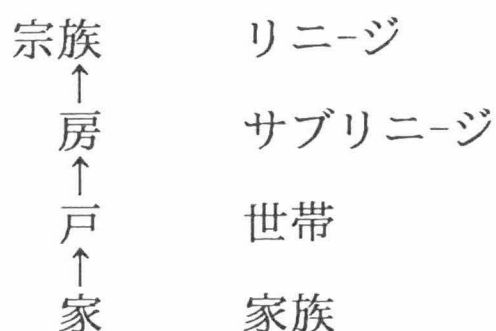
仕能：嘉慶10乙丑(1805) - 光緒14戊子(1888)、享年83歲。
陳氏：嘉慶巳未(1798) - 道光24壬寅(1842)、享年44歲。華嚴三壩田に埋葬。
李氏：嘉慶14己巳(1809) - 光緒8壬午(1882)、享年74歲。華嚴旧屋基に埋葬。

第3章 親族組織とその変容

第1節 宗族

異なる姓氏からなるこの村落において、解放前後・さらに改革・開放以降という幾つかのプロセスを経てきた宗族がいかなる変化を遂げてきたのであろうか。そのあり方について追ってみたい。

村人にとって、宗族はどういう概念であろうか。それは、同じ父系出自の系譜関係がたどれる間柄を意味する。つまり、「湖廣填四川」湖廣から四川へ移民した世代を始遷祖として、その子孫はすべて同じ宗族の成員とみなされる。宗族の錯綜した集団を、その構造的ハイアラキーを示すと、以下の通りである。



上記のハイアラキーには、サブリニージの「房」の下に分枝を示す「支」があるのが一般的だが、調査地では、この言い方は耳にしたことがない。このほか、宗族の中における遠近を示す指標として、「遠宗」と「近宗」の区別があり、長男の属する房を「大宗」、次男以下の属する房を「小宗」という。

豊都県内の移民の場合、一般に清の康熙・乾隆年間に移ってきた者が大半を占めており、移住してから200-300余年たっているものがほとんどである。調査地における隆姓の場合は、明洪武2年(1369)に3人兄弟が、湖北黄州府孝感郷麻城県高岡堰というところから来た。華嚴村と大田堰居住の隆姓が現存する族譜によれば、移住元での隆姓の祠堂は南陽堂と呼ばれ、族譜によって、かろうじて始遷祖から自分たちの属する房の系譜図を遡ることができる。しかし、馮家堰居住の隆姓にとっては、移住当初から郎溪に定着するようになった第12世代目までの祖先を記録した古い族譜が失われたため、宗族に関する彼らの記憶がとぎれてしまい、第13世代目の時通・時泰兄弟までしかたどることができない。宗族の系譜を尋ねられても、はっきりした答えがなく、「都是那幾大房発派下来的」という程度の認識にとどまっている。清明会が行なわれていた民国期に、族譜を保存し、馮家堰居住の隆姓は上位セグメントの華嚴での清明会に参加するほか、数年ごとに郎溪の清明会にも参加していた。さら

に、「合族」県内あるいは涪陵など県外に散らばっていた隆姓の宗族の系譜関係も、確認することができた。

解放後は、清明会が廃止されたものの、宗族の成員の序列関係を示す「字派」世代名が使用されているため、同じ隆姓ならば、たとえ面識がなくても互いに系譜関係を確認できる¹⁾。五服以内の宗族の成員であれば、「逢年過節、生長満日」年中行事・冠婚葬祭・出生祝い・誕生日祝いには、「都要走動」必ず互いに訪問しあう必要がある。

しかし、湖廣から移住してきた始遷祖から数えて、12世代目までのほかの分枝の隆姓に関しては、世代名を異にしているため、「找不到哪個是老輩子」互いに誰が上位世代なのか、判明しにくいのである。

1980年代の初期からはじまった家庭生産請負制の実施に伴って、県内のごく一部の地域では、清明会の復活・族譜の再編が見られるようになった。しかし、馮家埧では、個人的に経単簿を保存したり、華嚴村・大田埧村から族譜を借りて写したりする者があるが、清明会の復活や族譜の再編にまでは至っていない。

注:

(1)たとえば、大田埧居住の隆姓(第26世代)は、馮家埧の隆姓(第24世代)とは、14世代目で先祖を同じくするが、15世代目から兄弟たちが分かれてしまい、現在に至っては互いに五服の関係を遥かに超えている。もし族譜がなければ、世代名が彼らの相互の系譜関係を確認する唯一の手段だと言えよう。だが、1980年代から、子どもの命名に当たって、二文字の名前が好まれるようになり、宗族の中における上下関係を現わす世代名が無視されつつある。

第2節 祖先祭祀と清明会

1. 民国期

民国期では、宗祠・祭田の有無をとわず、どの宗族も「清明会」を催し、祖先祭祀を行なったものである。『隆氏族譜』(1926年)には「祖宗雖遠,祭祀不可不誠;子孫雖愚,經書不可不讀。」と記してある。祖先がどれほど遠くても、真心をもって祖先祭祀をせねばならぬ。子孫がどれだけ愚かものでも、經書は読まねばならぬということを、諄々と説き聞かせている。宗族によっては、祖先祭祀として清明会のみで済む場合もあれば、春祭と秋祭の二回に分けて行なわれる場合もある。宗族の規模が大きいほど、春祭と秋祭をおこなうだけの財力もあり、「族人」宗族の成員たちの結集力も相対的に強くなっている²。

清の道光年間に、華嚴より馮家塢に移住した隆家の分節は、解放前(1949年まで)の時点ですでに100余年経過し、世代深度も第5世代まで数えるようになった³。しかしながら、馮家塢在住の隆姓だけでは、独立した清明会を形成することなく、相変わらず華嚴の朝選公の墓花磴墳へ向かい、そこでともに祭祀儀礼を行なっていた。

馮家塢居住の隆姓の始遷祖である朝選公の三男仕達には、7人の男子子孫が生まれたものの、長男・五男が夭折し、次男と三男が華嚴にとどまったままであった。四男正常の子孫も馮家塢に1人も残っていない。つまり、民国期に実際馮家塢に居住していたのは、仕達の六男正倫と七男正級の子孫たちのみであり、民国31年(1942)には、隆姓の家族がわずか7世帯であった⁴。のちに第20世代である大字世代になると、さらに他地域へ移住したり、「乏嗣」男子子孫が乏しかったりで、一つの分節として清明会を運営するだけの資金も人手もなかった。「上院子」と呼ばれる隆姓の親族が居住していた家屋の裏山楼子嶺には、始遷祖仕達の立派な墓が横たわっており、それを囲むかのように、仕達の子孫の墓が置かれている。

したがって、華嚴における清明会に際しては、馮家塢の隆姓の親族が必ず参加する。華嚴に宗祠と「地方」祭田もなく、華嚴への始遷祖登業公の孫朝選公の墓花磴墳の手前に親族が集まるのであった。墓の前に大きな木犀の樹木が2本植えられており、そこで祭祀儀礼が行なわれた。「会首」世話人は各家の輪番制で、順繰りに清明会の世話役「值年会首」となる。解放直前では、華嚴・馮家塢の隆姓の族長は隆仲良の父大有であった。彼は当時「私塾」の教師として、大橋・坪上・華嚴で教えていた。隆姓の宗族がそろそろ祭田を購入しようとした矢先に、豊都県が解放されたため、ついに実現できなかった。華嚴での祖先祭祀には「大清明会」と「小清明会」の2種類があり、馮家塢の隆姓が参加す

るのは前者のほうであり、毎年参加者が「10幾 卓 人」100人を超えたという。他方、「小清明会」とは、仕達の2番目の兄仕能の直系親族を中心としたもので、宗族の分節の始祖仕能の墓松子墳の前に集まるのである。

このほか、馮家塢・華嚴在住の隆姓の成員は、朗溪で行なわれる清明会にも数年に一度は参加する。朗溪には、「湖廣填四川」四川へ移民して以来、第12世代目の宗友公とその兄弟金甲公の墓がある。隆姓の朗溪への始遷祖とされる宗友公の墓は磨磴墳とよばれ、隆リニ-ジはその墓の前で清明会をおこなう。宗友公の孫、燭公の代から朗溪をあとにし、徒歩2時間ほどに位置する大田塢へ移ったが、大田塢の隆姓も相変わらず朗溪の清明会に属する。民国17年(1928)には、隆リニ-ジは大規模な清明会をしたあと、族譜を作ろうとしたが、実現できなかった。

一方では、安隆橋居住の隆リニ-ジには、宗祠・祭田を有していた。清明会に関する族譜の記載をみてみよう。

安隆橋居住の隆正笏が編纂した『隆氏族譜』によれば、清道光1年(1821)、祖先が占いにより、墓地を灘山塢の青龍嶺に決めた。そこは隆リニ-ジの「祖墳」祖先墓であった。しかし、「夫有墳風而無祀典，則先靈之血食仍属闕如。有祀典而無宗祠，則子孫之奉祀無從会聚。步青公乃於道光25年分大家時，勸各房子姪出穀營息，以作祀典。每歲清明，各房子孫無論在 粵 在 涪，俱到青龍嶺拜掃祖墓一次，以示不忘根本之意。此武字派各房伯叔創興清明会祀典之由来也。」墓があつて、祭祀をしなければ、祖先が子孫に供養をしてもらえない。祭祀はするが、宗祠がなければ、子孫たちを寄せ集めることができない。そこで、道光25年(1846)に分家したおり、步青公が各房の甥たちに穀物を出し合つて、祖先祭祀するよう勧めた。それからというもの、毎年の清明節になると、 粵 都にしようと、涪陵にしようと、各房の子孫は必ず青龍嶺へ集まり、祖先の墓参りをし、自らのルーツを忘れないようにするのである。これが武字世代の各房の伯父・叔父たちが清明会の祖先祭祀をはじめた由来である。19世紀40年代後半というこの時期においては、馮家塢に移住した隆リニ-ジのちょうど正字世代に相当する。

そして、隆正笏は清明会に関する族規を定めた。まず、人望のある者2人を族長と副族長とし、祠堂及び宗族の事柄に取り組む。さらに公正で信頼のおける者2人を庶務とし、もっぱら祠堂内部の収支及び対外交渉にあたらせ、その任期を5年とする。庶務の下に目先の利く者4人を評議員とし、族長を助けさせ、その任期を3年とする。民国15年(1926)に族譜を作った隆正笏のこの提案は、時代の特色を帯びたものであると言えよう。

職名	人数	任期	選出基準
族長・副族長	2名		最上位世代で人望のある者
↑ 庶務	2名	5年	公正で信頼できる者
↑ 評議員	4名	3年	働き手
↑ 族衆			宗族の男子子孫とその配偶者

別な姓氏の族譜。では、庶務や評議員のかわりに、族正が設けられる。その職分としては、高齢の族長を助けて宗族の細々とした事務に当たらせることである。

なお、清明会に費やされる金額についても、細かい規定がなされた。「値年辨会者每次辨会 綴 用,以30釐上下為限。此就前清時勢而言。若民国以後生活程度太高,則30釐又不足,惟有隨時節省,不可糜費而已。如有糜費過多者,則歸承辦者自己墊貼。」毎年の清明会に用いられる費用は、30釐までとする。この金額はあくまで清朝の相場によるものである。もしも民国以後、物価が上昇し、30釐では足りなければ、節約して行うべきであり、むだ遣いしてはならぬ。むだ遣いをし過ぎると、会首がその超過分を出すこととする。

さらに、「年上50歳者,入祠助祭,由祠支撥轎錢。由涪来 助祭者,每年人支撥船錢,量其遠近酌給。以上2条,該值年会首支消。」と規定してある。50歳代以上の宗族の成員が清明会に参加する場合、祠堂がその足代を支払う。涪陵より 都の清明会に来た場合は、船の代金を支払う。金額のほどは、道の遠近で決まる。このように、宗族の成員が清明会に出ることを奨励し、さまざまな便宜をはかったのである。

明洪武2年(1369)、隆リニージの祖先が豊都県に移住してきたにもかかわらず、その規模は県内において、過去も現在も大きなものではない。豊都県の他の姓氏の大半が清代の移民という事実からみて、地域化したリニージのうち、大きな規模のものは、必ずしもそれが存続してきた時間の長さに関係するとは限らないということが言えよう。移住による成員の減少、病気や貧困なども諸要素もリニージの規模に大きくかかわってくる。

隆リニージの場合は、湖北から四川に定住するようになってからも、その子孫がみな同じ土地にとどまることなく、同じ豊都県内、隣接県、さらに他省へと移り、非常に頻繁な再移住を数世代ごとに繰り返してきた。地域内での絶え間ない再移住による成員の減少が、隆リニージを小規模なものにとどめさせた主な要因ではないかと思われる。一方では、四川省の宗族が東

南中国の村落地域に比べて、その活動が顕著ではないのは、やはり明末清初に行なわれた大規模な「湖廣填四川」による移民が一つの要因として考えられよう。

2. 解放後および改革・開放後の変化

清明会をはじめ、宗族の結合をつねに確認し、結合力をより強くするためのこうした伝統的な祖先祭祀は、共産党が政権の座につき、その影響力が以前と違って村落社会の村レベルにまで浸透するようになったのを境目に、すっかり姿を消してしまった。清明会どころか、清明節に「掃墓」墓参りという伝統的な風習も豊都県の農村から消えた。宗族の活動そのものが封建的・迷信的と否定され、宗族の歩みを記録した族譜および「経単簿」を保存することでさえ、「変天帳」を持って、捲土重来の日を伺う下心のある者とみなされ、批判されるのであった。一旦発見されれば、ひどい目にあわされることになる。

したがって、族譜および経単簿の保存でさえ、非常に不利な環境に置かれた。これらの資料喪失の原因として、主として以下の2点が挙げられよう¹⁰。

① 1950年代後半から繰り広げられた大躍進運動・「公共食堂」大衆食堂の推進、1960年代の文化大革命および「破四旧」¹¹などをはじめとする頻繁な政治運動に見舞われてきた。そういった運動に恐れをなした農民たちは、族譜や経単簿を持つこと自体に不安感をおぼえ、みずから焼き払ったり、あるいは「繳公」政治運動の際に、没収されたりしたのがほとんどであろう。

馮家埡3組の隆姓も、いわゆる「反封建」封建的な觀念反対という風潮のなかで、ついに族譜と経単簿を何冊か渡し、経単簿の二冊だけが辛うじて災難から免れたのである。だが、李姓のある農民がその『李氏族譜』を保存していたことで、封建的な家族觀念を伝播しようとする者だとされて、農村で民衆の監視下に置かれるという仕打ちをうけたのである。将来、世の中が変わることを願って隠し持っているのだろうと見なされて、その族譜も没収されてしまった。このような事例は、当時においては枚挙にいとまがない。

② ほかに、¹²「没有文化」教育を受けておらず、読み書きのできぬ婦人が「鞋様子」布靴などをこしらえるのに、これらの族譜または経単簿がひき破られてしまったりするようなこともあった¹²。このような現象が生じ得たのは、ほかでもなく、解放後、宗族の勢力が抑えつけられ、宗族への求心力が大いに弱まってしまったことの証拠にほかならない。

しかし、1980年代のはじめから、人民公社が解体され、家庭

的生産請負制が行われるようになった。生産関係が以前とは大きく変わったため、生産活動と関連して親族の結合にも新たな動きが各地でみられた。豊都県内の事例からみると、親族組織における変化として、(1)族譜および経単簿の保存・再編 (2)清明会の部分的復活 (3)「似道場」功德儀礼をはじめ、追善儀礼・葬儀に多大な費用がかけられるようになったことなど、幾つかの側面に現われているように見受けられる。わたしの調査村馮家規においては、功德儀礼の「似道場」が非常に盛んになり、儀礼の内容を記録した経単簿の作成もなされているが、清明会の復活は見られていない。以下には豊都県内の他地域の事例を少し取り上げてみようと思う。

(1) 族譜及び経単簿の保存・再編

新中国が誕生してこのかた、30数年の間、族譜の編纂が無視されてきた。しかし、1980年代には、全国に譜牒学会が設立され、家乗・族譜の収集および譜牒に関する学術研究が進められるようになった。

豊都県においては、1980年代初頭にはじまった家庭的生産請負制の実施に伴い、土地が農民の手に戻ると、家族・宗族の結束が再び強まり、農民の経済的・社会的な自律性も取り戻された。他方、集団経済の基盤を失った村・郷は政治的統合性が弱まった。この背景のもとに、1980年代前半に、解放後すっかり消えてしまった祖先祭祀を中心とした宗族の結合の動きが一部ではあるが、再び見られるようになった。農民のうち、一部の有識者が「續譜」族譜の再編に関心を持ちはじめた。なかでも、族譜再編において特に目立つのは、村・郷・鎮・県クラスの農民出身の幹部たちの役割である。

かれらの目的は、「使族人理順代次，若竹子之有上下節而不乱，能の『尊老愛幼』，団結和睦，教育子孫……」宗族の成員たちにそれぞれの世代をはっきりさせ、あたかも竹の節目の如く、上下の関係が乱れてはならぬ。これをもって、「年寄りを敬い子どもを大事にし」、団結して互いに仲睦まじくなるよう、子孫を教育すべきである。族譜再編の大義名分はごく自然の成り行きで、誰でもうなずけるものである。この時期には、まったく興味を示さない者もいる一方、族譜の再編も悪くないが、「引火焼身」みずから身を滅ぼすようなことにならないかと、様子を伺っていた農民がむしろ多かった¹³。そのため、1980年代前半における族譜再編に際して、非常に慎重なやり方をとったのである。『竹子黄氏史略(1687-1988)』の序言では、次の点を明記している。

「修譜活動」族譜の再編に際して、封建的家族の活動をするとは、新たな社会制度が許せないものであり、批判をうけ、中

止すべきである。しかし、ここで指摘せねばならないのは、批判するのは封建的「宗法家族観念」宗族の観念であって、家譜の再編という正当な行為そのものではない。

みずから聞き書きを続け、族譜の再編に熱心に奔走する幹部はわずかではあったが、いたのである。そのほとんどは県の党史辨公室勤務の者、あるいは教育関係などの文化人であった。彼らは一般の農民より、上の政策の変化の流れに対してずっと敏感であり、しかも大胆である。長年の政治運動の後遺症により、多くの農民たちはこの時点では、まだそのようなことをする勇気がなかった¹⁴。

そのような状況下において、族譜の編纂に対する回りの風当たりは強く、並大抵のことではなかった。支持する者もいれば、また誤りを犯してはと、懸命に止めようとする者もかなりいた。したがって、80年代初頭に手がけた族譜は族譜や家譜と明記するものが少なく、『竹子黃氏史略』とか、『何氏史集』という形にとどまっているものが多かった。

この時期に編集した族譜では、一族の永続を願って、新しく世代名を増やすなど、内容的にそれまでの族譜との共通点はもちろんあるものの、多少異なるところも見られた。その相違点として、以下の2点があげられよう。

① 男女平等の精神にのっとり、宗族の女子子孫をすべて族譜にその名前を入れた場合もあれば、男子子孫がないならば、娘のうち、1人を選んで系譜図に入れた場合もある。娘のみでなく、娘婿まで族譜に入れたものもある。この点は伝統的な族譜に比べてもっとも大きな違いである。そうしたことの理由として、男女平等の主張もあるが、「供外族人尋祖稽考」将来、異なる宗族の者が系譜関係を調べるのに便利だとも考えられている。

② 族譜の「家規」宗族の成員が守るべき規則という部分が省かれたかわりに、「箴規」や「治家格言」などを入れる場合がある。これらの違いは、伝統的な族譜における「宗法家族観念」家父長的な要素を避けるためであろう。

(2) 清明会の部分的復活

ところが、族譜の再編にとりかかる際、参考となる古い族譜・経単簿の大半が失われたため、宗族の各房の古老に聞き書きをし、あるいはかつての宗祠の跡地・「墳園」墓地・石碑などの文物を考察することが主な手段となる。宗族の有志をあつめて豊都県への始遷祖の墓へ参ったり、小規模ではあるが、清明会を復活させたところも現われた。

1983年の清明節に、豊都県南岸の^{相埒}郷と隣接の武隆県双河郷に居住する左姓リニ-ジの20数人が、解放後34年ぶりに始遷祖の墓へ参った。始遷祖の墓地の前で祖先祭祀をおこない、墓碑を写したあと、一同は簡単な直会をした。前年の清明節に、すたれた始遷祖の墓地の復元作業をおこなったのである。これは、豊都県内における比較的早かった清明会の復活であろう。

一方では、包巒郷花地堡村の黄姓リニ-ジは、県内における長江南岸居住の宗族の成員を寄せ集め、清明会をおこなったのも1983年であった。その際、祖先祭祀のあと、宴会を催し、族規を定めておいた。さらに翌年には、豊都県北岸・涪陵居住の宗族の成員にも呼びかけ、もっと大規模な清明会の開催と族譜の再編を予定していた。この祭祀儀礼を企画したのは宗族の中の人望厚い者・村の幹部・県の幹部である。しかし、ことの経緯を知った県政府の干渉により、1984年の清明会はやむなく中止となった。

一方では、近年になると、国家が歴史的文物の保護を明文化し、さらに省・県・郷の各クラスの地方志の編纂がはじまった。このことが農村における族譜の再編に拍車をかけた。1990年代に入ると、族譜の再編ばかりでなく、功德儀礼を記録した経单簿も新たに綴られ、墓地の修繕にも以前より力を入れるようになった。改革・開放後から今日に至るまで、豊都県の経済発展は四川省東部の涪陵地区においても、比較的立ち遅れた地域である。さらに全国レベルからみて四川省は、やはり立ち遅れているとされる。

豊都県における宗族の復活は、ごく限られた一部の地域であり、しかも甘肅省・山東省などの地域のように、経済発展の装置として、利用価値があるゆえに再興されたという次元のものではない¹⁵。宗族の復活には、械闘のようなネガティブな面と社会秩序の安定・経済発展の機会の拡大というポジティブな面を合わせ持っている。だが、包巒郷の事例から明らかなように、豊都県政府にとって、宗族の復活がもたらしてくるそのポジティブな面よりも、さまざまな複姓からなる異姓間の紛争を引き起こすかもしれないという懸念のほうが、はるかに大きかったのかもしれない。

注

(1)清明節に宗族の成員がその始遷祖、または分節の始祖の墓に集まり、祖先祭祀をおこなうということを、四川では「^似清明会」という。儀礼が済めば一同は直会をするためか、清明会を清明^燐ともいう。

(2)清同治8年(1869)編纂の『涪陵石氏宗譜』では、「家規18則」

が定められている。その中には、「保護祖塋」祖先墓の保護という1か条がある。「……本房外房, 互相保護。遠者逐年一掃, 勿畏道途之遙; 近者逐年兩掃, 勿吝物力之艱難。……」自分の房とよその房同士は互いに助けあうべきである。祖先の墓地から距離の遠く離れた者は年に一度墓参し、道程の遠さを畏れてはならぬ。近い者ならば二度墓参すべきであり、祖先祭祀のために費やされる財力を惜しんではならぬ。

(3)第2章 村落の歴史的背景 第3節 隆姓リニ-ジの移住史 5. 馮家塢への定住を参照。

(4)民国31年編纂『四川 豐都県第一区白合郷保甲編查冊』による。

(5)この地域の村落では、酒宴を張るとき、8人坐りの食卓「八仙卓」が使用される。ゆえに、村人は出席する人数を勘定する場合、机の数で表すのが一般的である。

(6)馮家塢在住の隆姓の最上位世代の古老が語るところによれば、民国26年(1937)、朗溪における清明会の参加者は「20幾卓」、ほぼ200人とのことである。そして、1940年代のある年に、豐都城丁字街の寺院を借りて清明会が行なわれた際、出席者が「40、50 卓 人」300人を超えた。そのとき、上海居住の隆姓の親族も豐都県にやってきて、当時県城の下街頭に住む「大爺」隆jisanrおよび上街頭の「大爺」隆xinsanrが主催して、村・郷・県・省のレベルを超えた「合族」宗族の統合を実現しようとした。

(7)隆正笏:42-46. 1926.

(8)清同治8年(1869))編纂の『涪陵石氏家譜』による。

(9)M・フリードマン:22-23. 1966.

(10)「四旧」とは、文化大革命の初期に、革命の主な目標として掲げられた四つの古い悪。すなわち、古い思想、古い文化、古い風俗および古い習慣をいう。

(11)宗族の起源・変遷を記録した族譜、または「似道場」の記録である経単簿などのような「認識された歴史」は、民国期以前においても、喪失された資料が少なくない。その主な原因としては、①歴史上のたび重なる戦争によるもの。②戊辰年(1928)、豐都県長江の南岸に起きた「神兵」によるもの。③親族の不注意で無くしたものの三つが考えられよう。

(12)一般農家の家では、学校へ行く年ごろの子どもがいなけれ

ば、「礼節簿子」冠婚葬祭の金銭メモを記したノート帳のような必要最小限のものを除けば、字を書くための紙どころか、紙屑を見つけたすことも極めて困難である。

(13) 塾 江県『何氏族譜』上冊:11. 1991.

(14) しかし、族譜に興味のある農民は決して少なくはない。彼らの一部には手書きの簡単な系譜図があり、その系譜図や先祖代々の言い伝えにより、房を異にする五服以外の同姓と顔を合わせば、「翻譜」どちらの世代が上位なのかによって、互いに呼称が違ってくるので、よく議論を交わすのである。

(15) 曾士才・西澤治彦・瀬川昌久編『アジア読本中国』 河出書房新社:84-85. 1995.

第3節 擬制的親族関係

擬制的親族関係について、法学者の江守五夫氏は次のような定義を下した。「それは、生理的・血縁的には親族の間柄にたたない人々の間に社会的に親族と類似の関係を設定せんとする慣行を指すものであり、この社会的に親族と類似な関係におかれた人々は、心理的にも何らかの形の同類的感情で結ばれ、行動面でも同胞愛的な協力・扶助—たとえば相互間の血讐義務とか「オヤ」の庇護と「コ」の奉仕とか—を要求され、かつ親族に固有な近親姦禁忌や相続権のごとき権利義務を賦与せられる。」この擬制的親族関係の慣行が前近代的社会においてあまねく全世界にわたって存在しており、また現に多くの社会で存在している。

日本の村落社会において存在してきた擬制的親子関係の諸相については、江守氏の研究によると、次の6種類あるという。

(1) 子どもの出生時にその産児にオヤをとらせる2種類の慣行。

①産婆と出生子との間に結ばれるオヤコ関係

②棄て児と拾い親とのオヤコ関係。

(2) いわゆる名付け親の慣行。

「ナオヤ」ないし「ナツケオヤ」になって貰う人としては、近親者(とくに同族団の長)・寺子屋の師匠・社会的有力者・拾い親・産婆・子どもを達者に育てあげた人・寺社家などが選ばれる。

(3) 乳母子関係と里親子関係。

(4) 成人式の際のいわゆる元服親。

(5) 子の婚姻に際して立てられる仲人親。

(6) 村落における生産関係にもとづく諸々の擬制的オヤコ関係

(1)から(5)までの擬制的親子関係の慣行は、いずれもコたる者が一定の年齢段階を通過するときに成立するもので、「定時の親取」に当たるものであるが、そのほかに村落社会では「ワラジオヤ」「タスケオヤ」のごとく、「随時の親取」の慣行が若干存在したということを江守氏は指摘している¹⁾。

漢人社会において、親族関係を非常に重要視するが、親族の原理に基づいた擬制的な親族関係もある。なかには、擬制的親子関係のほか、同年、宗親会、「結拜兄弟」義兄弟₂などの慣行も存在する。本稿では、調査地で得たフィールドデータを踏まえて、主として擬制的親子関係の社会的機能について考察することとしたい。

1. 「拜干老輩子」

擬制的親子関係を結ぶことは、「拜干親」「認干媽・干爹」という。四川省では、「認干老輩子」といい、老輩子とは自分より上

位の世代の者のことである。そして、「認老輩子」が行なわれると、擬制的オヤがコから「保々」と呼ばれ、両家が「干親家」として交際し、擬制的親子となった両家を「打親家」ともいう。この場合の「親家」とは、姻戚関係の「親家」(親はqingと発音する)ではなく、姻戚関係以外の親族関係を示す「親家」(親はqinと発音する)を指すものである。

擬制的親子関係を結ぶ主な目的は以下の通りである。

- (1) 子どもの成長・無病息災を祈る。これには2種類がある。1つは子どもの「八字」生年月日の運勢が良くないので、順調に成長させるためのものである。もう1つは、病気除けのためである。
- (2) 両家が「相好」親しい関係にあるゆえ、さらに親しくするため。
- (3) 「攀附権勢」権力者・有力者へ接近する手段としてのものもある。

擬制的親子となる条件:

- (1) 両家の経済事情はほぼ同様であること。
- (2) 両家の仲が良いこと。
- (3) オヤとなる人は、必ずしも同じ村の人・「親戚」親族でなくても良いこと。
- (4) 擬制的オヤとなる者は、未婚者の場合もある。
- (5) 擬制的なコは、男女をとわないこと。
- (6) オヤとコが「命属相生」相性の良いこと。
- (7) 子たくさんの者、あるいは子どもを達者に育てあげた者がオヤとして頼まれやすい。
- (8) 乞食のような者が「命最大、八字最硬」運勢がもっとも強く、生まれ星が良いと思われるので、乞食にオヤになってもらうこともある。そのほか、路上・寺社の手前・橋などの場所で出会った見知らぬ人に「拜寄」擬制的親子を結ばせる場合もある。互いに顔も知らず、まったくの赤の他人なので、「拉保保」ともいう。
- (9) さらに、人間に限らず、井戸・大木・岩・鶏などを擬制的オヤにすることもある。

擬制的親子となる儀式:

地域によっては、擬制的親子を結ぶための儀式は多少異なるが、基本的には以下のパターンがある。子どもの実の親が「保保」にしてもらう人に酒を飲ませ、料理を振る舞う。さらに、子どもが擬制的オヤに対して、「跪拜礼」跪いて礼を示す。その後、オヤにコのために名前をつけてもらう。こうした儀式が済んだら、擬制的親子の間はそれっきり顔を合わせないものもあれば、あたかも「親戚」親族として付き合うようになることもある。異姓であるオヤの姓をコにかぶせることもよくある。たとえば、

3組陳永発の3男陳定川が村人から代均と呼ばれている。均とは彼のもとの名前であり、彼のオヤは代姓であると聞いた。

調査地の村落では、親が子どもを連れて、擬制的オヤとなる人の家へ鶏あるいは卵20個を持ってゆき、そこで子どもを「叩頭」頭を地面に叩きつけて礼をさせる。民国期においては、擬制的親子となるには、必ず家で酒宴を張り、擬制的オヤを招待したという。

擬制的親子となる時期：

子どもに幼い頃から擬制的親子関係を結ばせることが多い。なかでは、満1か月からのものもあるが、2、3歳から6、7歳までの手のかかる時期に行なうことがほとんどのようである。

擬制的親子の交際関係：

子にとっては、

- (1) 旧正月の年始回り・端午節・中秋節・などの年中行事のおり、子が親の家へ挨拶へ行かねばならない。
- (2) 親の「仮生」誕生日祝いおよび親の家に「紅白喜事」冠婚葬祭がある場合、必ず「猶子」擬制的な子として参加し、相応のご祝儀を持参することとされる。現金のほか、卵・砂糖・きし麺まどをお礼に持参することが一般的である。

一方、親にとっては、

- (1) 子の「老輩子」上位の世代だから、年始回りなどのような年中行事に際して、子が先に挨拶に来るのを待って、あとから子の家を訪ねる。
- (2) 子の家に「紅白喜事」がある場合、必ず「猶父母」擬制的父母として参加し、とくに子が「操辦婚事」結婚式をあげる時と「送飯」赤ちゃんの誕生祝いの際、まるでわが子のように、かなり多額の贈答をおこなう。

擬制的親子の交際期間：

- (1) 擬制的親子の相互の交際は1代限りの場合が多い。おおかた「干老輩子」親の死亡をもって両家の交際に終止符が打たれることになる。
- (2) 親子の間がしっくりいかない場合は、次第に疎遠になってしまふことがある。
- (3) 双方の間柄が良く、うまくいった場合は、その擬制的親子関係は1代に限らず、2、3代まで家族ぐるみの親族関係として維持してゆくこともある。

擬制的親子が疎遠になる主な理由：

- (1) 親子の性格が合わない。
- (2) 両家の経済状況に格差が大きくなってきた。

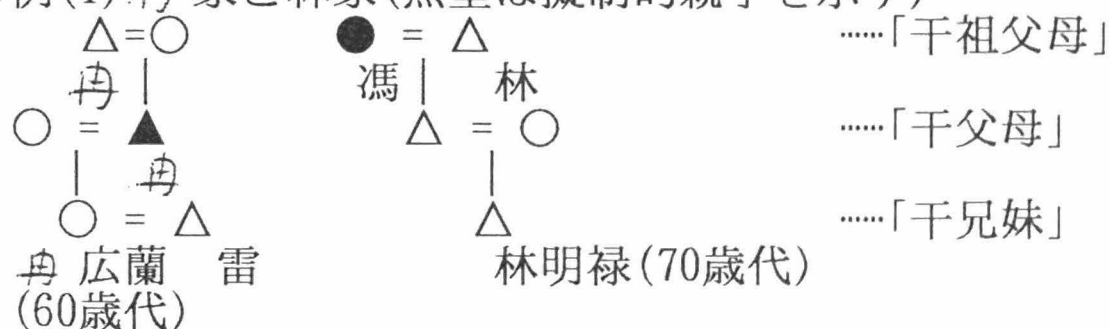
擬制的親子関係の性格:

- (1) 跡継ぎの男子の出生や子どもの無病息災を祈願する呪術的要素。
- (2) 擬制的親子関係を結ぶことにより、血縁・地縁以外の社交圏を編み出し、人間関係のネットワークの拡大・強化・回復をはかる。
- (3) 親と子の関係は、子に対する親の庇護・親に対する子の奉仕・親子間の義理的な交際及び相互的依存もあるが、両者の贈与・交際などの義務関係は、バランスのとれた家と家の対等な関係にあると言えよう⁴。

調査地で調べたところによると、擬制的親子関係を結ぶ動機について、「多一個親戚, 少一個冤家」という表現をよく耳にする。擬制的親子を結ぶことによって、「親戚」親族が1人増え、「仇」が1つ減った。言い替えれば、かたきより「親戚」親族を増やしたほうが良いと考えられている。また、「干兒干女酒飯親」ともいう。擬制的親子の関係は酒と飯が支える金次第の親族だという意味の諺である。これによって、擬制的親子関係と普通の親族関係との相違点が端的に指摘されたと思う。つまり、一般の親族関係には、血縁あるいは姻戚関係が絡むのに対して、擬制的親子関係はあくまでも人為的な要素が強く、「要經常走, 不走就断。」常に相互に訪問しあい、双方が機会のあるごとにザ-ビスや物の交換が行わなければ、この関係がたちまち途絶えてしまう。

それでは、調査地の事例を検討してみよう。

事例(1) 冉家と林家(黒塗は擬制的親子を示す)



この事例は、民国期の大橋保に居住していた冉家と林家との間の擬制的親子関係である。結婚して数年後県城に移るようになった冉広蘭の父は、幼いころ、同じ集落の林家の妻馮にオヤになってもらった。それから、冉広蘭の父の生存中、両家はずっと擬制的親族としての交際をつづけていた。冉広蘭の父がすでに20年前に世を去ったが、1994年、林明禄が10年前に亡くなった父母・妻のために「假道場」功德儀礼をおこなった際、冉広蘭の夫雷氏は、妻のかわりに参加した。雷の実家は

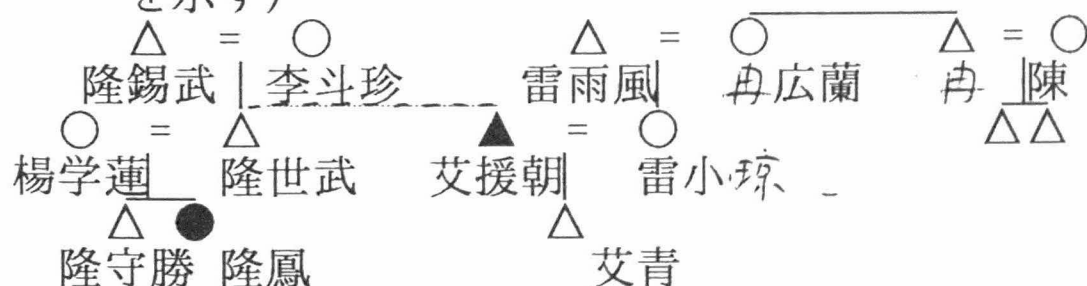
馮家埧村2組にあり、林明禄をよく知っている。彼がご祝儀に20元を持っていった。単なる隣近所ならば、5-10元が相場である。

しかし、丹広蘭に言わせれば、林明禄の祖母が自分の父の擬制的オヤであったので、自分の「保切」擬制的祖母にあたる。したがって、林明禄の父母は自分の「干父母」擬制的父母であり、林明禄と自分とは「干兄妹」擬制的兄弟になるわけだという。「翻字派」世代ランクをみると、そういう関係になるので、赤の他人とはわけが違ふ。ご祝儀は5元や10元では、少なすぎることである。このように、擬制的親子関係を結んだ当人が世を去ってから、その家族にはまだこの記憶がはっきりと残っており、冠婚葬祭における贈答に際して、このような記憶がまだ生きているのである。

この事例から、擬制的親子関係の交際が及ぶ世代範囲は一般に、コの側からみれば、自分を中心に親世代・子ども世代を含む3世代にかかわっている。他方、オヤの側では、自分をはじめとして子ども世代の2世代にわたるものだと言えよう。

つまり、擬制的親子関係はコの幼いころに親によって、決められたものであり、擬制的オヤとなる人は実の親と同世代の者が普通である。したがって、擬制的親子関係が成立することで、擬制的親族としてコの親世代・コの世代、ひいてはコの子ども世代まで付き合うことがある。オヤからみれば、おおかたオヤ世代・せいぜいその子ども世代までこの関係が認識されるのである。オヤの孫世代になると、もう赤の他人であり、何の関係も持たなくなる。「1代親, 2代表, 3代4代認不到。」1、2代のうちは親しく付き合うが、3、4代になると、顔を見ても誰だかわからないという諺は、姻戚関係のみならず、擬制的親子関係についても言えることだ。事例(1)の林明禄もそうであった。彼は祖母の世代と丹家の擬制的親子関係は知ってはいるが、格別な関心を示していない。

事例(2)隆世武家と艾援朝家(黒塗は擬制的親子、虚線は義兄弟を示す)



風は1950年代兵隊生活を終えてから、人和郷で「文書」宣伝活動に数年間たずさわり、のちに県文化館で勤務し、一家そろって町に移るようになった。その長女の婿艾援朝はずっと県城住まいであったが、1970年代の「上山下郷運動」により、「知識青年」として馮家垸村3組で2、3年間農民と生活をともにした。そこで3組隆世武家の空き部屋を借りて住むこととなったが、労働などを通じて村の青年団長であった世武とすっかり仲良くなった。2人は「結拜兄弟」義兄弟の契りを交わし、のちに「知青返城」こうした「知識青年」たちが町へ引き上げたあとも、2人の友情が続いている。

そして、世武が結婚し、長女隆鳳が生まれると、すぐ義兄弟の艾援朝に「拜就」オヤになってもらった。以後、隆鳳は艾のことを「艾爸」艾パパと呼んで、親しくしているが、弟隆守勝はまったく関係ない。旧正月などの際、隆世武が娘1人をつれて艾の家へ遊びに行っても、弟は連れていかない。弟隆守勝の「干老輩子」は3組「上院子」の古井戸である。艾一家はのちに涪陵に引っ越したが、旧正月の時、隆世武は娘と2人で遊びに行くこともある。艾援朝の父母と隆家とは親しいかどうかは確認できなかったが、艾の妻の父母雷雨風と冉広蘭は隆家と同じ村の出身者ということもあって、隆家と親しく付き合っている。そのため、隆鳳は雷雨風夫婦のことを「公公」母方オジイサン、「婆婆」母方オバアサンと呼んでいる。艾援朝の息子艾青とまったく同じ親族呼称をしているのである。雷雨風の伯父・兄弟たちが2組、冉広蘭の弟が5組に住んでいるので、毎年旧正月になると、艾援朝夫婦と子ども・雷雨風夫婦がその他の子夫婦をつれて、必ず年始回りにやってくる。もちろん、隆家にも挨拶にくる。雷と冉の親族が大勢の食事が用意できかねる時、よく隆家に呼ばれては、一緒に食卓を囲んだ。新年のプレゼントとして、艾パパから隆鳳へのプレゼントは服だったり、文房具だったりであり、多額の「压岁錢」ももらえる。これに対して、隆世武夫婦がそれなりのお返しを心得ていることは言うまでもない。

一方、隆鳳の「干妈」である雷小琼の母冉広蘭の弟夫婦は同じ村の5組に居住している。年始回りに隆家が訪問し、また、隆家の増築に際して、冉の息子たちが手伝いにくる。冉家は労働力があるのに、計画性のなさのため、家計はつねに逼迫した状態であるうえ、一家の主婦陳はよく隣近所と喧嘩をするので、働きもので堅実な隆家とは比べにならぬほど村での評判が低い。本来ならば、このような冉家と付き合う義理がないはずだが、交際を続けているのは、隆世武の娘隆鳳が艾援朝の擬制的コであるからにはほかならない。冉に2人の息子がいるが、いずれも24、5歳になってもまだ婚約者がいない。村落社会にあっては珍しいことである。

隆家の嫁楊学蓮が見かねて、結婚相手を世話してやろうと思ったが、夫に止められた。隆鳳と艾パパの親子関係がなければ、隆家は冉家とはおそらく交際はしないだろうし、冉家も同じだ。一方では、冉広蘭はいつも2人の「姪子」甥に対して、口をすっぱくして言い聞かせている。「できることなら、隆家の手伝いを少しでもしてあげなさい。そうしたら、いまにおまえたちにも人の助けが必要な時が来る。そういう時は、隆家から力を貸してもらえるんじゃないか。」

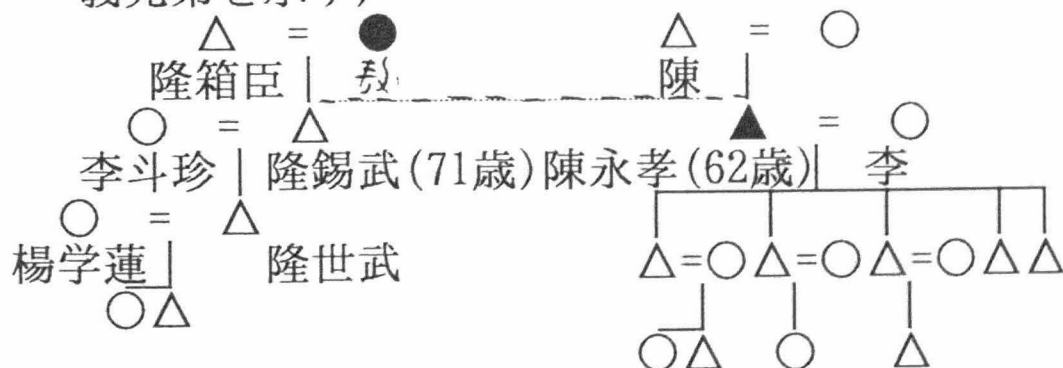
事例(2)から明らかなように、擬制的親子関係の特徴の1つは、うまくいったならば、このように擬制的親子の当事者より1代(オヤにとって)、2代(コにとって)上位の世代までひっくるめた家族ぐるみの親族関係まで広げてゆく可能性がありうる。そして、隆世武と艾援朝のごとく、義兄弟の関係がきっかけとなり、さらに子どもの出生によって、義兄弟の関係をさらに擬制的親子関係まで発展させることもできる。「干老輩子」擬制的父母の双系的親族にまで、擬制的親族関係を拡張してゆくことができる。

しかしながら、このような擬制的親子関係のもう1つの特徴は、「その平等的相互性にある。いずれか一方が上位に立つ事はない。」もっとも、実際にはいずれかの家が経済力・政治力の点で他を優越していて、厳密に等価交換が行われないことも起こりうる。

そして、上述した擬制的親子関係は動機はともあれ、いずれも江守氏が言う「定時の親取」であることが1つの特徴と言えよう。

実際に1人に複数のコ(男女をとわない)、あるいは複数のオヤを持つ者も珍しいことではない。ただし、そのような擬制的親子関係を維持させるには、常に相応の義務と贈答行為が付きものなので、それを怠ると、疎遠になる恐れがある。

事例(3)隆世武家と陳永孝家(黒塗はそれぞれオヤとコ、虚線は義兄弟を示す)



この事例では、陳永孝が生まれてまもなく母が亡くなったので、彼は隆家の擬制的なコになった。隆錫武の母張氏が「干兄」擬制的なオヤとして、かわりに乳を飲ませて育て、10歳ぐらいまで隆家にいた。両家がすっかり親しくなり、張の息子隆錫武は陳永孝とはまた「干兄干弟」擬制的兄弟になった。陳は隆錫武の息子隆世武から「陳叔」陳叔父さんと呼ばれ、親しまれている。一家の主である隆世武と父の間で口喧嘩が発生したおり、陳がよく「断理」調停役を果たした。さらに、隆錫武の弟の再婚相手と先妻との間にいさかいを解決するのに、1994年の秋、李斗珍が西安に1か月ほど行ったことがある。その際、李と同行したのはこの義理の弟陳であった。また、隆世武が新築・増築のおり、毎日のように手伝いに来る者には、陳家の5人息子のうち、だれかが必ず入っていた。他方では、陳家のほうで何かあると、隆家の者も必ず手伝いに行く。たとえば、1993年の冬、陳叔父の3男の子の「送飯」出生祝いを行った時、隆世武の妻はお祝いに子どもの服を1揃いとケ-キまで買って持参した。合計30余元のプレゼントであった。彼女は当日朝食のあとすぐに手伝いに行き、昼ごろの酒宴が1段落し、後片付けが終わるまでずっと手伝っており、あたかも陳家の親族のごとく振る舞うのである。

事例(3)のごとく、隆家と陳家との間の擬制的親族の関係が双方とも3世代にわたって継続しており、しかもその良好な関係が現在でも続いている。果たして4代目まで続くかどうかかわからぬが、いずれにしても、このケースはうまくいった場合である。経済面においては、陳家は隆家に比べてだいぶ劣るが、しかし、陳叔父には5人の息子がいて、「人丁発達」跡継ぎが大勢いるということは、1人の息子しか生き残れなかった隆家にとっては、どれだけ心強いことであろう。つまり、擬制的親子関係には、両家の経済面の釣合いという要素のほか、事例(3)のように、他の側面で何らかのバランスが取れるという総合的要素こそ、擬制的親族関係を持続させるうえで大事な要因ではないかと考える。

2. 「拜把子」義兄弟

次に義兄弟の問題に簡単に触れておきたいと思う。

義兄弟は一般に「結拜兄弟」と言うが、四川では「拜把子」という言い方をする。ほかには「結盟」「掉帖子」「換帖」「連譜」などといった呼称がある。清末・民国の初頭には、「拜把子」なる慣習が非常に盛んであった。都市・農村部をとわず、異なる姓氏の気の合った若者が、「拜把子」によって、義兄弟になることがよくある。関羽の像の前に跪いて義兄弟になる書付けを取り交わし、誓いを立てるのである。誓いの言葉に「不願同年同月同

日生、但願同年同月同日死。」の類が多くみられる。同年同月同日に生まれることができなかったが、願わくは同年同月同日に死なせて欲しいという意味合いである。そして、盟約を結ぶおり、「喝血酒」オンドリの血あるいはめいめいの腕をナイフで刺して血を酒に滴らせて飲み合うことがある。かような義兄弟の契りを結んだ者同士は、互いに「生死之交」生死を共にする仲間として交際し、「情同手足、有福同享、有難同当。」まるで実の兄弟のごとく振る舞い、苦楽を共にすることが望まれる。そして、誓いに背いた者は蔑まれ、罰せられることさえある。

義兄弟に限らず、女性の間にも「拜干(干)妹」「打姻香(姻)妹」の風習が存在していた。だが、そのやり方は男性の「拜把子」をまねて、線香を焚いて盟約を結ぶという形によるものである。そして、社会のあらゆる階層において、「拜把子」のもっとも顕著な現われとして、「袍哥」を取り上げるべきであろう。これには「清水袍哥」と「渾水袍哥」とに大別される。前者は「樹党結盟、自雄鄉里、專尚交遊、不事劫掠。」交遊のために村落社会で盟約を結ぶのに対して、後者のほうは字面通り、「土匪」匪賊・軍閥などとぐるになって悪事を働く。袍哥が人と交際するのに、「拜把子」を手段とし、勢力の拡大をはかる。四川の袍哥組織は、「三教九流」社会の下層における種々な職業をもつ者及び「江湖人物。」の間で組織の拡大をしていたのが、清の半ば以降になると、次第に農村に浸透し、さらに社会の各階層にまでその触角を伸ばすようになり、袍哥組織が「城市鄉鎮」都市・農村部にあまねく行き渡るようになった。「各省漢留之盛、莫過於四川。」とまで言われている。つまり、民国期までの四川では、袍哥なる組織の活動が他のどの地域よりも盛んであった。

しかしながら、かような「拜把子」は親族を背いたけしからん行為だと思われて、一部の族譜あるいは族規に禁じられていたことも事実である。什邡『楊氏家法』によると、「拈(拈)香結盟、狐群狗党、送官懲治。」と記してある。線香を焚き盟約を結んだこうした徒党を組んだ悪党どもは、役所に突き出して懲らしめてやるべしとまで規定されている。

四川における袍哥の伝統は、清嘉慶年間(1796-1821)に全国を震撼させた白蓮教反乱¹⁰の背景と、一脈相通するものがあるように思われる。

袍哥の社会的な役割は種々な側面に反映されており、積極的なものもあれば、消極的なものもある。縦の親族組織である宗族に対して、袍哥は横の社会的組織である。東南中国・華南に比べて、宗族の結合力がそれほど顕著ではない四川においては、かような袍哥が地域社会でどのような役割を果たしたのだろうか。その諸相を把握することは本稿のポイントではない。ここ

では、村落社会に与える「袍哥」の影響及び「拜把子」という側面から少し考察を加えようとする。

調査地の村落には解放前、汪海銓という大地主・郷紳¹⁾がおり、現在の馮家坝村の一部の土地、ビール工場の前身である「果園」果樹園も彼のものであった。果樹園の経営のため、彼はわざわざ成都から技術の専門家李宗禹(3組居住)に来てもらい、管理に当たらせた。汪は近隣村落紅岩頭の出身者であり、馮家坝をはじめとする多くの土地を有していた。当然のことながら、地域の有力者である彼は「袍哥大爺」旦那様でもあり、『豊都県志』(1991)に彼の名前が乗せられたほどである。袍哥は、「公口」「堂口」と呼ばれる茶館を活動の拠点とし、民間にはいさかいがある時、このような「公口茶館」に「袍哥大爺」に来てもらい、「断理」調停役をしてもらう。調停の結果、悪かった側が双方の茶代を出す、袍哥への謝礼は勝った側がしなければならない。民国期には、県内の各郷・「場」定期市にいずれも「公口」と呼ばれる「公口茶館」が設けられていた。汪海銓も自分の茶館をもっていた。そして、小さな船着場として栄えていた白沙沱(いまの6組)にも、食堂のほか、そのような茶館があったという。

複姓村が多い四川東部の村落社会において、宗族の勢力が相対的に発達していないと言えよう。そこで、異姓とのいさかいなどが起きた際に、このような「断理」が非常に一般的にみられるものであって、そして、袍哥のような有力者の果たす社会的役割も、見逃せないものがあると思う。

この6組には数年前、村幹部の間でいわゆる「拜把子事件」が起きたという。「八大金剛」8人の義兄弟たちが食卓を囲んで「喝血酒」血を滴らせた酒を回し飲みした。ことを聞いた県公安局が駆け付けて数人かを逮捕したが、結局捕まったのは一般村民で、張本人だった幹部は全部逃されたそう。きっかけは何であるかは聞き出していないが、何かよこしまなことを企てていたらしい。この件に関しては、一部の村人がつい口を滑らせてわたしに語りかけたが、今でも村幹部の座についている「八大金剛」の報復を恐れてか、詳細については語ろうとしなかった。

宗族の勢力が比較的弱いこのような複姓村において、姻戚関係を村内に張り回らすほか、「拜干老輩子」擬制的親子・「拜把子」義兄弟をはじめとする擬制的親族関係を結ぶことで、重層的な社会的結合力を作り出すことができる。実際には、どの家にも必ず家族成員の数人かに、老輩子または「干兒干女」擬制的な子(男の子か女の子)がいて、さらに兄弟同士にそれぞれ違った老輩子がいることもしばしばである。そのような老輩子には同姓もあれば、異姓もある。詳しいことは今後の補足調査を待つ必

要があるが、現段階において、少なくとも以下のことが言えるのではないかと思う。

(1) 村落社会に生きる人々にとって、宗族による結合のほか、姻戚関係・擬制的親子関係も重要な社会的関係である。このように擬制的親子関係を結ぶことにより、村社会における人間関係がよく濃密なものとなり、人々に安心感を与えることができる。

(2) 擬制的親子関係から派生した「干兄弟・干姉妹」の関係は「拜把子」義兄弟とは別物だが、一方、義兄弟の間柄がさらに子ども世代に絡んで、「拜干老輩子」擬制的親子関係にまで発展させる可能性は十分ありうる。

注

(1) 江守五夫:263-269.1976.

(2) 堀江俊一:50-63.1988.

(3) 孫旭軍:169-170.1989.

(4) 東秀子:50-62.1992.

(5) 文化大革命の時期に、都会部の中学生・高校生・大学生・幹部が農山村に長期間定住し、農民と労働をともにしながら、貧農・下層中農から「再教育」を受けることである。

(6) 末成道男:201.1983.

(7) 「袍哥」とは、昔の西南中国、とりわけ四川における「幫会組織」民間秘密結社である。漢留・哥老会ともいう。

(8) 「江湖人物」は「江湖客」とも言い、易者・薬売り・手品使い・大道武芸者・講釈師・漫才・ペテン師・旅芸人などのような定住地をもたない、世間を渡り歩いて生活する人々を指す。

(9) 同(3):248-253.

(10) 白蓮教は秘密教派の一種であり、仏教の宗派である白蓮宗からその名を得た。元・明・清にわたって民間に広く流行し、農民反乱軍は往々にして白蓮教を旗挙げして反乱を起こした。

(11) 郷紳とは勢力のある地主のこと。または官を辞して田舎に隠退している有力者。

第4節 家族内諸関係

3世代同居、または結婚した兄弟と父母が同居し、「その他の親族世帯」で暮らす大家族において、入り込んだ複雑な人間関係が存在する。この節では、父子・夫婦・嫁姑という三つの側面を抽出し、家族内諸関係を概観したい。

父と子

父子関係は、「承継の原理によって結ばれた祖先と子孫の連鎖関係—すなわち人格連続の関係、そして祭られる関係—の総体が宗にはかならない。」したがって、父は息子の生殺の権を有し、息子は両親を敬い養う義務を負う。そして両親の死後における葬送儀礼と祭祀は、息子にとって避けて通らぬ責任である。両者の関係は「対等でなくして両極であるというまさにそのことが、両者の間に人為をもって絶つことのできない完全な相互依存関係を成立たしめているのである」¹。

調査地では、解放後、土地改革・大躍進・人民公社化など土地の所有関係・政治運動・思想教育運動によって、両親の死後における葬儀と祭祀においては、大きな変容を余儀なくさせられた。しかし、生産責任制の導入につれて、族譜の再編を皮切りに、一部の地域において宗族の力が再び台頭してきた。祖先祭祀をはじめ、伝統的な葬儀がいまや捲土重来の勢いで復活しつつある。だが、息子なる者のつとめとされる「死葬」死後の葬儀の部分はきちんと行われるのに対して、「生養」生前の老親扶養のほうはとかくおろそかにされがちであるように見受けられる。

なぜこのように変わったのだろうか。政治的・文化的・社会的要因はさておき、家族内における父と子の地位を逆転させたのは、家族観そのものの変容にはかならない。親がまだ若くて現役で働けても、息子は所帯持ちになれば一家の実質的な主となる。一部の例外を除いて、息子夫婦と同居するような場合、家の経済的決定権はあくまで息子夫婦にあって、親夫婦は小づかいしかもらえず、不自由な生活を送っているように思われる²。

父子の地位の変容を以下の図で示した。

父 > 子(民国期以前:1949年まで)



父 ≠ 子(解放後:1949年以後)



父 ≤ 子(生産責任制の実施以降:1980年代-現在に至る)

夫と妻

封建時代の女性にとって、「夫為妻綱」夫は妻の天であり³、妻なる者は夫家の父系的系譜をつなげてゆくための道具と言っ

ても過言ではない。したがって、妻にとって、跡継ぎの男子を生むことが彼女たちの最大のつとめであり、男子が生まれて来なければ、夫の親族から軽蔑されても小さくなるだけで、反抗できず、夫が妾を迎える口実ともなる。男子に恵まれると、「母以子栄」その子の母親はようやく婚家での地位が固められ、「説話気壮」鼻息が次第に荒くなることもある。

家庭内における夫婦関係は多くの場合、妻の一方的な忍耐の上に成り立っていた。男尊女卑の家族制度のもとでは、社会における女性の地位が低く、いわゆる「夫唱婦随」的な家族がほとんどであった。

伝統的な人倫観によると、父子・兄弟が「天合」、すなわち先天的・自然的な結合であり、人為をもって絶つことができないのに対して、夫妻は「人合」「義合」、すなわち後天的・社会的結合であり、したがってまた後天的事由によって解消することも可能である⁴。解放後、とりわけ改革・開放後になると、女性の労働価値が増加し、家族内における妻の収入が必要不可欠なものとなった。一部の例外は別にして、もしも夫の収入に頼るのみで、養豚・野菜売りなどによる妻の収入がなければ、夫がいくら懸命に働こうと、家は豊かになる見込みがまったくないと言ってもよい。よく働く女性は村での評判がよく、家族内における発言権も大きい。公的な場合では、妻は夫の顔を立てなければならぬが、3組の家庭経済面からみると、実質的には夫と妻の収入はさほどの差がなく、同様な重みを持っているように思う。

家庭内における夫婦の地位の変容を図示すると、以下の通りである。

夫 \geq 妻(民国期以前:1949年まで)

↓

夫 \neq 妻(解放後:1949年以後)

↓

夫 = 妻(生産責任制の実施以降:1980年代-現在に至る)

姑と嫁

嫁姑の地位の変容を図示すると、つぎの通りである。

姑 $>$ 嫁(民国期以前:1949年まで)

姑 \geq 嫁(解放後:1949年以後)

姑 $<$ 嫁(生産責任制の実施以降:1980年代-現在に至る)

ほかには、母子、祖父母と孫、嫁と姑・「姑嫂」小姑と兄嫁・「妯娌」兄弟の妻同士など様々な家族内諸関係がある。その変化

に対する考察を加えるのは、この次に譲ることとしたい。

注：

(1) 滋賀秀三 P129.1967.

(2) 調査地の隣村に孫家という13人家族がある。3人の息子夫婦と同居しているので、周辺村落では評判になっており、何かあると、すぐに仲睦まじい孫家のことが引合いに出されるのである。60歳代の親は孫廷全という名前の普通の農民で、頭脳明晰にして物事を公平に扱えるとのうわさである。息子や嫁たちの収入はすべて親に渡さなければならず、小づかいとして親にもらう。とはいえ、やはり分家し独立して気楽に暮らしたいというのが息子の嫁たちの本心であるらしい。「そこの親父は体力が衰えたら、いずれは分かれるだろう。」と、村人の見る目は至って冷静である。

(3) 調査地では、父母のことにに関して、父親を「天」とし、母親を「地」とされる。したがって、両親を同じくする兄弟同士ならば、「同天同地」天地を同じくするという。異母同父の兄弟同士であれば、「同天不同地」天が同じだが、地が違う。異父同母の兄弟同士の場合、「同地不同天」地が同じだが、天が違うというふうに表示するらしい。意味が異なるが、ほかにはたとえば「民以食为天」民は食を以って天とすという諺がある。ここで言う「天」とは、頼みとするものという意味合いである。このことは、夫婦関係を理解する上で重要なポイントとなろう。

(4) 滋賀秀三 P475.1967.

第5節 分家と老親扶養

1. 従来の分家

分家とは何を意味するのか。これについて内田智雄氏が次のように述べている。

分家することによって、「ここに『家』の解体がもたらされることとなるのであって、これがすなわち分家である。かくて従前の母体としての『家』が解体して、内包した核に應ずる幾つかの分家股に分裂するのであるが、その際、わが国にみられるが如き『分家』に対する『本家』というものが存在せず—事実、中国語の『分家』とは、分家するという動詞であって、『分家』それ自体を意味することではない—悉くが経済的にも家格の上でも、完全に平等な分家股に解体してしまうということは、特に留意すべきである¹⁾。」

つまり、中国の家族における分家とは、もともと一緒に生活していた家族が共有の財産を分けることにより、各自別々に生計を立てるようになるということであって、日本の本家と分家に見られるような歴然とした家格の違いが存在しない。中国語における「本家」という言葉は宗族を同じくする者を意味し、たとえば、「本家兄弟」ならば、父・伯父・叔父の息子同士、すなわち同じ祖父から出た同じ世代の男子をいうのである。本稿では、便宜上、家族の一員が、その家から分かれて、別に一家をつくるという中国語で言う分家という意味で、この言葉を用いることにした。

分家のきっかけはいろいろあるが、内田氏によると、その主な理由は以下の通りである。

- ①「妯娌」兄弟の妻たちの不和によるもの。
- ②兄弟の不和によるもの。
- ③父子の不和によるもの。
- ④家族の多数によるもの。
- ⑤生活の困難によるもの。
- ⑥父(または祖父)の老齢によるもの。
- ⑦父母の死によるもの。
- ⑧父・母の命令によるもの²⁾。

2. 「幺兒養老」末子養老の慣習

分家後、複数の息子がいる場合、親がどの子と同居することになるのだろうか。この点については、かなり地域性があるようだ。北京生まれの筆者にとって、華北では、長男が親の面倒をみるのが当たり前と思いこんでいたが、内田氏の研究によると、必ずしもそうではないという。

「分家後父母が長男と同居する場合と、次男・三男などと同居する場合と、さらに末子と同居する場合とがあり、従ってそこには特定のものが父母の『責任をもつ』と言ったことは必ずしもなく、家族のいろいろな条件に応じて決定されるものと見ることができる。……家屋が父母の従前居住していたものであるということや、また兄弟の経済的な条件の良否や、また抽籤による兄弟の家屋の取得決定にともなう、父母が兄弟のいずれと同居するかが決定せられることもあり、さらにまた『母の希望によった』とか、また兄弟の妻のうちの一人を特に愛したからとか、とにかく父母自身の考え方によって決定せられるものもあるわけである。……『兄が一番上だから責任をもつ』とか、あるいは『長男は父母を養わねば人に笑われる』などと、長男が父母と同居すべきことを説くものもなきにしもあらずである。」

そして、「分家後父母が、兄弟のいずれと同居するかということは、いろいろな条件に応じて一定していないが、しからばそこには全然一般的な傾向は存しないかというにそうでもない。」

華北農村での聞き取り調査によれば、末子と一緒に暮らすのが多いという。その理由として、「末子が一番年齢が若いから」「父母が末子を一番に愛するから」が挙げられた。

親が末子との同居を望む理由を、内田氏はこのように分析した。「末子が未婚である場合には、父母は嫁という他人を交えずに生活するという安易さがあり、……他方また末子としては、一家を経営していく上からもまた社会生活上からも、さらにまた農業経営の上からも、父母の援助や指導を得ることができるのみならず、また衣食その他の日常生活上の不便もまた寂寥も、父母とくに母と同居することによって大いに緩和されるわけである。故にこの意味では分家後の父母の生活は、未婚の末子とともにするのが、人情の上からもまた実際的にも多いということができると思われる。……とにかく長男や末子を避けて特に次男・三男と同居する場合には、必ずやそこに何等か特殊な家庭事情が存するものとみて大過はない。」

しかし、親の老後の面倒をみたからといって、ほかの兄弟に比べてその息子が余計に財産をもらえるかどうか。中国の均分相続の原則によると、「父母の死後における養老地の取得権は、他の兄弟と均等一様であるとされる。すなわち父母が分家股のいずれと同居していたとしても、養老地の承継や取得は、生前同居していたことによって格別の特権はないとせられる。換言すれば養老地は、父母の『生養』生前の養いを賄い、また死後の「死葬」の費を辨じ得てのちなお残余ありとすれば、それは父母が分家股のいずれと同居せるかにかかわりなく、分家当事者

すべての均分の対象とされることとなっている³⁾。」

3. 老親扶養のパターン

それでは、中国の西南地域、揚子江上流域に位置する四川農村の場合はどんな養老形態がとられているのであろうか。四川東部豊都県での調査データに基づいて検討することとしたい。

調査地では、「幺兒養老」という表現がよく聞かされる。幺とは末っ子の意の四川語で、つまり、末息子による老親扶養が普通だという。また、現地の人々はよく「皇帝愛長子、百姓愛幺兒」なる言葉を口にする。つまり、皇帝は跡継ぎになる長男を大事にするが、百姓は老後の面倒をみてくれる末息子が可愛いという意味合いである。事実親と同居しているのは、どちらかといえば、いまでも末っ子のほうが多いようだ。

日本の老親扶養に関して、わたしの知っている限り、東北日本では、長子が家を継ぐのが当たり前と考えられ、たとえ長男がいなくても姉家督なる慣行があったのに対して、西南日本では、末子相続がしきたりである。末子相続の場合、隠居制なる慣行が濃厚に存続されている地域においては、本家を長男に明け渡して、2・3男と同居するという事例が珍しいことではない。長子相続ならば、家を継ぐ以上、長男あるいは姉夫婦が親との同居が多いことが想定できよう。

しかし、均分相続が原則である中国では、地域によっては、長男が親の老後に主な責任をもつこともあれば、四川のように末子が面倒をみる慣行もある。だが、解放後46年たった今日においては、分家と関連する老親扶養の意識も大きく変容してきている。いつの時代でも、「百姓愛幺兒」なる気持ちは変わりがないであろうが、果たして各自の「幺兒」末息子が親を大事にしてくれるかどうか疑問である。それでは、四川省社会科学院社会学研究所による四川農村でのサンプル調査の結果である『四川省農村家庭調査資料集』(1986)を参考にし、豊都県の事例を交えながら、分家と老親扶養の現状を考察してみようと思う。

表19「供養老人方式」では、四川省各地の農村(10県)における老親扶養のパターンを示した。地域の選定は、異なる地形条件・収入の地域を選び、農村の社会経済の発達と農村家族の在り方の変化との相関関係を考察しようとした。調査の実施時期は1984年2-10月にかけて行なわれ、それぞれの地域の経済状況は1983年、つまり生産責任制の導入後まもない頃のものである。

そのなかで、同じ涪陵地区に所属する南川県は、地理的にわたしの調査地豊都県にもっとも近いものである。しかしながら、

一口に老親と言っても、年齢層・配偶者の存否・未婚の兄弟の有無などのような要件の情報が欠けているため、正確にはこうした地域における老親扶養の実情をどの程度反映しているのか、信憑性がそれほど高くないと考える。それでも、ある程度の方向性をつかめるのではないかと思い、表の一部を引用させてもらった。表に示された老親扶養のパターン5は、地域によっては、半数近くを占めるところもあり、おそらく両親が未婚の子供を連れて暮らすという事例も含まれるものと想像する。あるいは、比較的年の若い両親の場合と思われる。地域差があろうが、全体的にやはり1.2.3.の3つが割とよくみられるパターンだと見てよかろう。この3つとも労働能力を失い、かなり年取った両親の場合である。

つまり、1.「代耕」両親が世帯構成の上で2人家族だが、実際には両親が請け負った田畑は、息子たちが替わって耕作し、そこで採れた食糧を親に提供するというものである。豊都県でもよくあるパターンである。しかし、このパターンでは、老親の居住形態を明示していないので、2のパターンと一体どこが違うのか、はっきりしない。

2.「老人独居、由子女供錢糧」両親が別に居を構え、生活費・食糧は子女に頼る。豊都県にもよく見かけられるものだが、両親に労働能力の衰えぬうちは、事実、子供世代の実質的な援助が望めないと言ってもよい。1と2のいずれにしても、子供世代と同居するより、このほうが余程気楽なのは確かである。

3.両親が子女の1人の家に同居し、他の子女も一定の生活費か食糧を親に援助する。これもよくある話である。均分相続が大原則だから、いくら両親の老後の面倒をみても、他の兄弟と比べると、その分だけ余分に父母の財産を相続できるわけでもない。ならば、老親扶養による負担は特定の1人の息子夫婦にかかり、他の兄弟からも相応の援助をもらわないと、年よりの2人を引き取りたがらないという状況であろう。

4の如く、両親が複数の子女の家を順繰りに同居するという形の養老は、やはりそれほど多くはなさそうだ。南江県での調査のように、1例もない地域もある。複数の息子たちにとって、「平等」に父母の世話をしたつもりであろうが、年寄りにしては、きわめて不安定な生活を強いられて、望ましいものとはいえない。

そのほか、「専業戸」個人経営の農家、たとえば「菜農」野菜栽培を専門に営む農家、ニワトリ・アヒルの飼育を専門にするような農家は、その生産規模の必要から、普通の農家より、親子・兄弟同士をはじめ、家族の連帯感が強くなるのはむしろ当然で

あろう。したがって、家族構成・老親扶養の面にもその違いがある程度現われてくると思われて、取り立てて別に示した所以だと考える。

四川省各地農村での調査によると、分家の主な原因は以下の通りである。

- ①「子女成人応自立門戸」子女が成人すれば、別に居を構えるべきだ。
- ②「兄弟大了応各過各」男兄弟が大きくなれば、それぞれの生活があるべきだ。
- ③「妯娌」兄弟の妻の不和。
- ④ 嫁姑の不和。
- ⑤ 養老による意見の不一致。
- ⑥ 経済的な問題によるいさかい。
- ⑦ その他⁴。

さて、四川省農村の老親扶養をふまえて、調査地の老親扶養の実情を検討することにしよう。老親扶養の形態を、まず両親ともに健在の場合と片親の場合とに大別し、さらに細かく分類すれば、少なくとも以下の11種類があげられる。

(1) 両親がともに健在の場合

- ① 両親が未婚の子供を引き連れて、すでに嫁をもらった息子とは別に世帯を構える。

調査地の居住形態をみると、これは一般的なものである。先に結婚した兄と兄嫁にとって、未婚の兄弟を結婚させるのは父母の責任であって、自分たちは年少の兄弟の面倒をみるという負担は背負いたくないという気持ちであろう。実際、結婚後まもなく夫の両親と分家してしまったケースには、夫に未婚の兄弟がいることはほとんどではないだろうか。未婚の子供と暮らす両親は、高齢者も一部いるだろうが、まだ現役で農業を営む力のある場合が多い。やがてすべての子供をかたづければ、②のようになるか、あるいは子供世代との同居が考えられよう。

- ② 両親だけで暮らし、息子たちから何の援助も受けずに、老夫婦2人で自給自足な生活を送る。

この場合は、成人した子供がすべて所帯持ちとなり、親としての役目を果たした両親の自活をいう。子供を結婚させ、高齢者となり、やがて農業をやるための労働能力を失うまでの短い期間になるかと思われる。つまり、もっと年を取ると、子供世代と同居するか、あるいは世帯構成の上で独立しているものの、生活は次の③の如く、何らかの形で子供世代の援助を受けるこ

とになることが想像できよう。このパターンは、あくまで両親が元気で農業をやれる間に続けられるものであり、片方が亡くなると、(2)の②の如く、息子夫婦との同居に転じる可能性が大きくなる。

③「種田分管」。

世帯構成の上では両親だけで暮らすが、その「責任田」請負田畑については、息子たちが分散して耕し、老親扶養の義務を果たす。これは表Ⅰのノと同様である。この場合は、親が重労働ができないため、田畑の仕事は息子夫婦にまかせ、必要な食糧だけしかもらえないのが普通である。調査地の事例によると、2人の息子から毎年食糧数百斤(1斤は0.5キロ)をもらうほか、現金のほうはわずか5元か10元に止まっている⁵。このすずめの涙くらいの金額だと、生活費というよりは、小づかいにもならない。したがって、孝行な娘がいなければ、継ぎはぎだらけの服を身に纏うしかないのである⁶。

④両親が複数の息子たちのうち、だれか1人の家に同居し⁷、その息子夫婦の世話になる。

これは表Ⅰの3に近い形である。ただし、他の兄弟からの援助がもらえるのとももらえない場合がある。

⑤両親がたった1人の息子、あるいは末息子の家に同居する。

親にとって、息子がたった1人の場合、当然その息子と同居するだろうと考えがちであるが、必ずしもそうはならない。1人息子も嫁をもらい、子供ができれば、それなりの苦労がある。1949-1995年にかけての3組の家族変動をみると、とくに1980年代以降、分家と「合家」(一旦分家した息子夫婦が再び親と合流する)を何度も繰り返している家が数多い⁸。分家した理由は嫁姑関係・夫の未婚の兄弟の面倒をみたくないなどによるものであろう。一方では、核家族のため、労働力の不足・生産の分業という現実的な問題もまた、「合家」を促す要因にもなる。なかには、よりよく老親扶養をするためということはもちろん考えられる。

3組隆世武家の事例を取り上げてみよう。父(71歳)・母(69歳)・妻・子供2人との6人家族である。世帯主隆世武(40歳)はビール工場で運搬のアルバイトをし、妻楊学蓮(32歳)は農業のほか、暇をみては野菜売りに町へ行く。収入面からみると、ビール工場での年間収入が3000-4000元。野菜売りは農繁期や家事のため、毎日に行けない。年間100日売りにいくとし、1回につき20元の売上げだとすれば、年間を通して2000元を下らない。働きものの楊学蓮の場合は、おそらく2000-3000元くらいかと推測する⁹。しかし、肥料かけ・草取り・「挖地」耕起作業・「打猪草」ブタの餌刈り・炊事・食事の後片付け・洗濯の一部は夫の両親にまかせて

いる。嫁学蓮はなかなかの働きもので村では評判が高いが、そのせいで老夫婦もさんざん働かされてしまう。まるで「老長年」年より小作みたいでかわいそうだという声も上がっている。この家では、老夫婦、とりわけ姑がいなければ、嫁学蓮がそれほど頻繁に野菜売りに行けるはずがないという。

野菜売りのときの隆家の1日をみてみよう。冬と夏とでは多少時間のずれがあるが、早朝5時前、姑が起き出して、朝食の用意をはじめ。嫁は6時に、そして息子隆世武は6:30に起きる。朝食後、7:00頃から嫁が野菜をかついで町へいき、午後14:00までには帰ってこない。8:00頃、息子隆世武がビール工場へ向かい、13:00に一旦昼食に戻り、14:00から夕方17:00-18:00までまたビール工場で働く。朝食のあと、姑が食事の後片付けをすませ、ブタに餌をやる。家事が一段落したら、天気が良ければ野良仕事に出て、11:00までに昼食の用意に戻ってくる。雨ならば、服のつくろいをしたりする。世武の父はずっと野良仕事。昼食後、姑は食事の後片付けをし、ブタにもう一度餌をやる。そのあと、また野良仕事かブタの餌刈り。世武の父は農具の修理や野良仕事などにつねに忙殺され、同じ世代の人たちと時おり「擺龍門陣」雑談をかわしたりしていると、あとで決まって息子夫婦に小言を食らう。午後帰ってきた嫁は1人で遅い昼食を済ませると、野菜畑に精を出す。そして、夕飯の支度も後片付けも姑の仕事であり、嫁も時々手伝うことがある。夜はテレビをみなければ、両親は21:00頃(夏場は22:00に寝て、4:00に起きる)に就寝する。年より夫婦にとって、働きとおしの1日であることが明らかである。一方、工場で力仕事をしている息子は暇をみて、農業を手伝う程度で、時間のかかる細かい作業は、ほとんど老親がこなしている。両親、とくに母親の存在はどれだけ名実ともに大きいものか、おそらく母があの世へ旅立つまでは、息子夫婦にとって切実な問題として感じないのであろう。あるいは感じているにもかかわらず、とにかく親が元気で働けるうち、最大限に利用しようとしているのだろうか。

野菜を定期的に売るには、若い世代の労働だけでは無理だということは、いうまでもなく誰にもよく分かっている。3組における年より夫婦のうち、隆世武の父母ほど働く者は誰1人いない。つまり、嫁の野菜売りで得た収入のかけには、こうした「縁の下での力持ち」である両親の働きに負うところが大きい。というのは、同じ集落における両親と同居しない嫁にとって、野菜売りにいけば食事の支度ができなくなったり、ブタにも餌をやれなかったりで、野良仕事がおろそかになりがちなので、到底無理な話である。しかし、若い世代の収入は金に換算しやすいが、年より夫婦の地味な働きぶりは金にはならない。だが、老いは確実に迫りつつあることは日増しに感じるようになる。ちょっとしたことで父への不満をこぼしたあげく、「あんたが

樂をしたかったら、分かれさせてやるよ。裏に空き部屋があるだろう。そこに住んだらどうだ。」とそこまで暴言を吐く息子である。隆家の2階建ての家を新築した時も、その両親が汗水流して手伝っていたのである。日ごろから年老いた両親の献身的な働きぶりに対して、一体どう勘定すればよいのであろうか。

隆世武は両親にとって、5人息子のうち、生き残った唯一の大事な息子であり、嫁楊学蓮は姑とは6親等の親族関係にある。分家にはならないとわたしは考えるが、しかし、息子隆世武の親に対する態度から、現在の四川東部農村における老親扶養の厳しい現実を垣間見たような気がした。

⑥ 両親と未婚の子供が娘夫婦（妻方居住婚の場合）とともに生活する。

1980年代後半になると、調査地の一部の集落に妻方居住婚が急激に増えはじめた。しかも、息子が2、3人いても、2人の娘がそれでも妻方居住婚をとったという事例もある。明らかにこのような現象は、養老のための手段という従来の観念とはかけ離れたものである¹⁰。それでも、ごく一部だが、妻方居住婚でやってきた婿が、妻の両親と未婚の兄弟と同居する事例もある。一方、妻方居住婚の婿が岳父母と折合いが悪く、喧嘩することもよく耳にする。従来、この養老パターンはあくまで息子をもたない老親の場合に限られていた。

調査地において、5人娘を生んだある夫婦は、上の3人を嫁がせた（そのうち2人は同じ集落出身者と結婚）あと、4女と5女のどちらかをそばにおいて、婿を取らせてあげようと考えた。ところが、肝心の2人は父母のそばより、もっと条件の良い嫁ぎ先へ、または気の合った若者と一緒になるのを望んだ。結局、5人の娘はすべて嫁にいき、残されたのは老夫婦のみとなった。この夫婦の老後はいずれ、おそらく同じ集落に嫁いだ上の2人の娘と娘婿が面倒をみることになるだろう。

⑦ 「輪流管飯」輪番制。

これは華北の農村にも従来からよく見られる慣習である。つまり、年老いた両親が複数の息子たちの家を順繰りにまわり、息子夫婦が食事などの世話をしてくれる。どれくらいの間隔で1軒ずつ回ってゆくのかは一定しておらず、2、3日おきもあれば、4、5日おきで別の息子の家を回るというケースもあるそうだ¹¹。このような養老形態は四川農村でも珍しくなく、「輪伙頭」食事の輪番制、「喫転々飯」回転飯を食うと表現され、表の女にあたる。ただし、わたしが調査地の限られた範囲内での聞き書きによると、このパターンについては聞いていない。

⑧「包干」請負。両親が2人の息子の家に別々に同居する。

このパターンは、はじめわたしの目には非常に奇異に映り、とても常識では理解できぬ行為であった。いくら息子たちの家が隣合わせにあっても、年取った父母を別々の家に引取り、寝食までばらばらにさせるなど、非情なやり方ではないかとも考えた。だが、この養老形態に関して、戦前の華北農村で調査した内田智雄氏も報告している。中国に限らず、竹田亘氏の研究では、隠居分家の盛んな西南日本にもあり、しかもどうも隠居分家の慣行と関連するらしいとのことである¹²。

しかしながら、このような養老形態は中国農村において決して多くはないが、どこの村にも1例ぐらいいは見い出されるものとされる。調査地5組張大京夫婦の場合はまさにその好例である。ほかに人和郷蒲池村(調査村3組隆世武の妻楊学蓮の姉の夫丹の両親)にも1例あった。

一般に、兄弟の仲が比較的良い者に老親扶養の「包干」請負制をとることになりやすいとも言われている。ただ、このパターンは全体的にみて少ないので、言い替えれば、老親扶養の請負を実施している兄弟の関係は一般に並みの兄弟よりも、良好な関係にあるということがまず言える。仲が良いからこそ、父母の老後の面倒も均等にみるということになるのではないだろうか。跡継ぎの息子がちょうど2人だから、均分相続の原則によれば、家の財産はもちろん、いっそのこと、父母の「生養」生前の養いと「死葬」死後の葬儀も平等に行なおうではないかという発想からきたものと思われる。

5組張大京の事例について聞き書きできなかったもので、省略しておき、人和郷蒲池村丹家の例をみてみよう。丹家には、姉(同じ集落に嫁いだ)と弟の3人兄弟である。70歳代の両親は2人の息子の家に別々に同居していた。当然のことだが、父は長男、母は次男の家。つまり、一般に長男より次男の子供が小さいので、同居するついでに、母親にその孫の面倒も見てもらうという考えであろう。こうして長男と次男の家に別々に暮らす父母に対して、それぞれの生活費(たとえば、理髪代とか)・医療費も、原則的に父なら長男が、母なら次男が負担することになっている。いざ世を去れば、やはり同じように父なら長男が喪主、母なら次男が喪主として、葬式の一切がっさいを取り仕切ることとされる。しかし、だからといって、たとえば母が病気になるれば、次男にすべてまかせて、長男が少しも金を出さないということではない。ただし、それぞれ責任をもって父か母の老後をみるという趣旨であろう。

他方、年取った両親にとって、分かれて暮らさねばならぬこ

とは辛い、隣近所だから、別にたいして苦になるほどのことではないらしい。長男も次男も子供の教育費やらで大変だし、どちらか1人の家に同居し、まとめて面倒をみてもらうには、現実的には息子たちにとって負担が重すぎる。そう考えると、父母はこのような2人の息子による請負養老に対して、反対はしないわけである。ただし、このような養老形態に対する村人一般の評判があまり良くないことは確かである。

(2) 片親の場合

① 片親が息子たちから多少の援助を受けながら、あるいはまったく受けずに1人で暮らす。

3組44世帯のなかで、目下単独世帯で生活しているのは2世帯である。事例1は50歳代の女親で、3人の子供がいる。長男夫婦は町で教職につき、町で暮らしている。次男夫婦は遠く新疆へ出稼ぎに行っており、娘は亡き父の仕事を継ぎ、重慶の水上輸送会社につとめているという彼女は町に住む長男夫婦の家へ週に1度は遊びにいき、月に100元ぐらいの援助を受けている。

もう一つの事例は50代後半の男親だが、長男と娘2人が所帯もちになり、家を出てから、93年まで20歳前の末息子と暮らしていたが、その息子が急に入所することとなり、5年後には釈放される予定というので、それまではどんなに重労働でも、自力で生計を立てるようにしなければならない。長男が嫁を迎える当初、1か月ほど夫の父・未婚の兄弟との同居生活をしていたが、やがて独立した。その後2人の妹が嫁いで、末の弟が入所して村にいないため、1度親と竈を同じくしたものの、親に家事を何も手伝ってもらえなくて、まもなく元通りになった。

親は電気釜を購入し、1人分の食事を毎日自分でこしらえ、1回炊いて1日三食分のごはんを毎日作らなければならない。経済的には隣の長男夫婦と子供の3人家族と一体になったほうが楽だが、1人で暮らしているほうがだれに気兼ねすることなく、好きな時間に好きなことができるという気楽さが味わえることは確かである。この男親は3組の青・壮年男性と同じように、まだ現役でビール工場での運搬作業を続けており、あと3年もすれば、末息子が釈放される。そして、嫁を迎えさせるまでは、おそらくこのまま単独世帯を続けてゆくと推測できる。

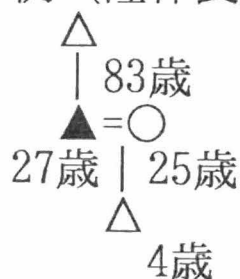
といっても、普段は長男夫婦と別竈だが、「過年」旧正月・「端午節」・「中秋節」中秋の名月を迎えるこの3大行事のおり、あるいは親族が訪ねてくるような時には、長男夫婦・孫とともに食卓を囲んで久しぶりの「天倫之楽」一家団欒を楽しむことはよくある。親族が遊びにくるような場合、当然長男の嫁が料理番であり、長男の家で招待する。その際、親も呼ばれる。とくに親

族が来ないようなときは、ときおり、親が豚肉を料理したものを孫・長男夫婦を振る舞ったりすることもよくある。長男の嫁も呼ばれると、家にある料理や野菜などを持ち込み、一緒に食べる。しかし、分家した以上、原則的には別竈・別財である。そして、親と同じ屋根の下で別々に生計を立てる場合もあれば、隣あわせに住む場合もあり、さらに息子夫婦が家を新築する場合もありうる。

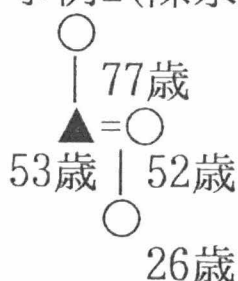
② 片親が息子夫婦と同居する。

両親のうち、どちらかが先に世を去ると、残された片親を放って置かず、息子夫婦と同居するようになるのが普通である。もしも、子供たちがまだ成人しないうちに、両親のうちのどちらかが亡くなり、片親(父・母をとわず)の手一つで育てられた場合は、なおさらその親の面倒を見る義務が強く感じられよう。実際、調査地3組44世帯の家族構成を分析してみると、その他の親族世帯がわずか6例に止まっている(1994年9月末時点まで)。しかも、2例を除き、4例までは息子夫婦・子供と片親からなる世帯である。事例1-4の系譜図を参照。

事例1(隆仲良家)



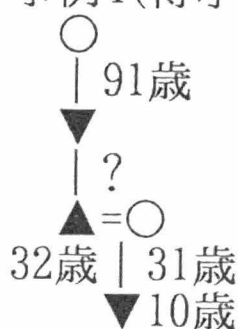
事例2(陳永発家)



事例3(李培民家)



事例4(傅小平家/▼は村の在住者ではないことを示す)



以上あげた4事例では、事例4のほか、いずれも高齢の男親か女親との同居である。配偶者に先に立たれて、息子以外に頼れる者もそばにいないこうした高齢者には、やはり息子夫婦との同居が一番と思われる。ただし、事例4は事情が少し複雑だ。世帯主傅小平の父親は当初は妻方居住婚でこの村にやってきた婿であった。だが、1980年代後半になると、長男夫婦をおいて、夫婦が未婚の子供たちを連れて、町(豊都県城)へ移住していった。のちに傅小平の高齢の祖母が息子(傅小平の父)と同居する

ようになったものの、80歳代のうち、家事の手伝いなどの軽い労働をまだこなしていた。ところが、年を重ねるにつれて、高齢の身にしては、次第に家事も辛くなった。息子が母の面倒をみるどころか、何かにつけ、高齢の母親をどなりつけたり、ひいては手を出したりするようになった。ちょうどその頃、小平の子がそろそろ幼稚園に上がる年頃だった。農村戸籍の小平夫婦にとって、1人っ子をどうしても町の良い幼稚園に入れさせてもらいたかった。そのためには、やはり町に家をもつ父の協力が必要だ。そこで、父と「交渉」した結果、孫(小平の父にとって)の面倒は見てもいいが、そのかわり、祖母(小平にとって)を引き取ってくれという交換条件で、話がまとまったという。

こうして、本来ならば、経済力も住宅の余裕もあるし、自分の母の面倒は自分でみなければならぬのに、1世代飛ばして孫が祖母の老後をみるということになったのである。これは法律的にはちょっと考えにくいものである¹³。傳小平の父のこのようなやり方に対して、村人たちは「あんな親不孝な息子をもつおばあちゃんはいないさ。けしからん。けど、孫の面倒は見てもらっているから、ま、しょうがないな。」

一方、小平の父にとって、自分たち夫婦も60歳代に突入し、この年で90歳近くの母の世話を焼くのは大変なことかもしれない。どうせ面倒をみるなら、年よりの母より可愛い孫を手元に置いておきたい気持ちである。また、小平夫婦にしては、息子の将来を考えると、息子を父の家に預けさせてもらい、そこから町の子たちと同じように幼稚園・小学校・中学校へと通い続けるしか良い道がない。そのためならば、年よりのおばあちゃんの面倒をみるくらい、辛抱のできぬことではあるまい。どうせ余命は長くはないだろうし。こうして、祖母が小平たち孫夫婦と同居生活に入ってから、すでに何年もたっている。時折野菜売りに町へ行く孫嫁の帰りを待ち兼ねて、杖をついて自宅前の村道まで出て、「お腹すいたよ。まだ帰ってこないんだ。」と、通りすがりの者にこぼす。村人からみると、息子夫婦がいるのに、孫夫婦が祖母の面倒をみるというのは、やはり通常ではなく、おばあさんは不憫でならないように考えられている。

③ 片親が娘夫婦と同居する。

父母の一方が死亡し、他方が息子夫婦ではなく、娘夫婦と同居するという事例は、3組では見当たらない。だが、隣の5組に1例あった。譚其林家である。下記の図を参照(●は亡くなった者を示す)。

●
| 陳85歳
△=○

譚其林家では、2年前では妻の母も同居する8人家族であった。譚は妻 由とは村内婚であり、しかも同じ集落(5組)の出身者である。妻には兄

譚 | ran
57歳 | 56歳
△=○○
| 楊
△○

と妹がいる。妻の妹は人和郷白岩村へ嫁ぎ、5組に兄の家族も住んでいる。兄が同じ集落にいるのに、なぜ丹の母が娘の家族と同居したのだろうか。その兄は小さい頃異姓からもらった子で、どうも親としっくりいかないというのが主な理由だという。兄夫婦には3人息子がいて、上の息子2人はすでに嫁を迎えたが、息子夫婦ともぎくしゃくして、つねに喧嘩が絶えないようだ。そんな状況下では、高齢の母にとっては、住み心地が決して良いはずがない。一方、同じ集落娘の嫁ぎ先では、その他の親族世帯の大家族ではあるが、家族が穏やかで嫁姑・嫁と小姑との間には些細なことでもめたりもしない。傍からみると、家族同士が仲が良く、「模範的な家庭」とも言える。このケースの老親扶養は、母が息子ではなく、娘夫婦との同居を選んだのは実子ということもあろうが、やはり子女の個人的性格による折合が大きな要因ではないかと思われる。

以上調査地の老親扶養について簡単に触れてみた。分家と老親扶養との関連について、もう少し掘り下げて研究する必要がある。ここで今後の問題点を幾つかあげてみたい。

(1) 事例研究を通して、分家までたどりつくそれぞれの過程とその理由を、農村経済発達の各時期と関連させて検討すること。理由は以上のほか、もっといろいろとあるはずである。たとえば、調査地で聞いた限りでは、ごはんの炊き方、就寝時間のずれのような些細なことでも、分家を決心させる要因の1つとして考えられよう。

(2) 「幺児養老」末子養老の問題。第2章第3節で隆姓の移住史を追った。族譜によると、隆姓が豊都県に定着してから、つねに2、3世代ごとに県内で再移住を繰り返し、その宗族の分節として、現在豊都県内の10数か村に分布しており、隆姓のそれぞれの分節の始遷祖にどうも末息子が多い。末子養老といわれるこの地域の従来の養老形態をどう考えるべきか、今後は隆姓その他の移住史を通じて、さらなる確認作業を要するであろう。

(3) 息子による老親扶養と娘による老親扶養について、ポスト生産責任制の導入によって、人々の意識はどのように変わってきたのか。村内婚はじめ、通婚圏との関連も考慮に入れるべきではないだろうか。

「没有不孝的女兒，少有孝敬的媳婦兒」親（生みの親に対して）不孝な娘がいなくても、親（夫の親に対して）孝行な嫁が少ないという認識は、誰でも持っている。調査地の年寄りたちは、老親扶養の側面において、娘夫婦に頼る点が大きい。折合の悪い息子夫婦と思い切り分家しても、それほど心細さを感じさせない

のは、やはり近く(村内・近隣村)に嫁いだ娘がいて、娘夫婦の助けが頼りになるからにほかならない。

注

(1)内田智雄:415.1956.

(2)同上:48-72.

(3)同上:276-278.

(4)四川省社会科学院社会学研究所:67-71.1986.

(5)町の小学校へ通う子供1人の昼食代は、最低でも1元はかかり、大人が安いものをたらふく食べるのに2.5元くらいはどうしても必要だ。ちなみに米は1斤につき、1.20元である。

(6)調査地での観察によれば、両親に娘または女性の親族がいれば、「仮生」父母の誕生日祝いのおり、服の生地・靴・靴下などのプレゼントをもらうことがある。したがって、一般によほど必要でなければ、息子夫婦には服などを新調してもらえない。わたしの下宿先もそうだ。おばあさんが着る服・履く綿靴などの多くは「舅嬢」兄弟の妻からもらったものという。娘のいない父母にとって、跡継ぎの息子も大事だが、娘の1人くらいいないと寂しいのはうなずける。

(7)本稿でいう分家とは、あくまで別財・別竈を基準とする。名目上分家した親子でも、事実同じ家に居住したままの場合も少なくはない。もちろん、親夫婦と子夫婦の住む部屋が違う。だが、孫を可愛がって一緒に寝たりすることもありうるし、住居の面ではそれほど厳格に境界線を画することができるかどうか1つの疑問である。一般に、それまで同居していた親子夫婦の場合、もしその親が息子夫婦のために新たな竈を作ろうとすれば、もうそろそろ息子夫婦と別竈で暮らすことを意味するに違いない。

従来の慣習によると、息子夫婦の分家に際して、新たな竈を用意するほか、なべ・茶碗・箸などの炊事道具一式・農具・食糧などを息子夫婦に分け与えることが親のつとめとされるからである。もっとも、息子夫婦の都合で言い出された分家の場合なら、事情が少し異なってくるかもしれない。いずれにしても、分家のおり、まず竈を別にすることは前提条件である。ちなみに、5人の息子をもつある農家の「竈房屋」勝手には、4つの竈が所狭しと並べられているのを、わたしは目にしたことがある。4男と5男はまだ未婚で、親と同居していた。もしも新築を建てずに、この2人の息子も結婚して分家を求めるならば、その勝手

には新たに竈2つが入らねばならぬということにもなりかねない。

(8)第6節 世帯構成の変遷(1949-1995年) 1.世帯構成の現状と変化を参照。

(9)蕭紅燕:16-20 1995.

(10)妻方居住婚について、第4章 婚姻と婚姻観の変容 第2節 婚姻パターンの変化 4.「男到女方」妻方居住婚を参照。

(11)同上:270-274.

(12)竹田亘 1969.

(13)1980年9月に採択された中国の新たな『婚姻法』第22条によると、「負担能力を有する祖父母・外祖父母は、父母が死亡した未成年の孫・外孫に対して扶養の義務を負う。負担能力を有する孫・外孫は、子女が死亡した祖父母・外祖父母に対して扶養の義務を負う」と定められている。祖父母・外祖父母と孫・外孫は3代以内の直系親族であり、その親密さのほどは父母・次女に次ぐものである。だが、一般的に言って、父母は子女が扶養し、子女は父母が扶養するものとされ、祖父母と孫の間に権利・義務関係は生じないのである。

祖父母と孫の間に扶養が発生する条件について、1984年、最高人民法院によってさらに以下の解釈をつけ加えられた。第1に、負担能力を有する祖父母・外祖父母は、父母の一方が死亡し、他方が確かに負担能力をもたないか、あるいは父母双方がいずれも扶養能力を喪失した未成年の孫・外孫に対して、扶養義務を負うべきである。第2に、負担能力を有する孫・外孫は、子女が死亡し、または子女が確かに扶養能力をもたない祖父母・外祖父母に対して、扶養義務を負うという内容の補足的規定である。陳明侠:202.1990.

表19. 老親扶養のパーセン

単位:%

内容/県名	広漢 西部	什邡 西部	富順 西南	樂山 南部	万源 北部	南川 東南	南江 北部	蓬溪 中部	簡陽 中部	計	「専業戸」個人 経営の農家
1.「代耕」両親の田畑は息子たちが耕作、親に食糧を提供	13.97	18.52	26.15	15.69	6.19	10.00	7.79	29.66	20.34	16.75	18.28
2.両親が別に居を構え、「食糧」生活費・食糧は子女に頼る	38.24	21.48	13.85	13.73	7.96	8.46	12.99	29.66	32.20	20.02	21.51
3.両親が子女の1人の家に同居、その他の子女も一定の「食糧」を親に提供	24.26	25.19	34.62	33.33	23.01	15.38	36.36	19.49	33.90	25.92	17.20
4.両親が複数の子女の家に順繰りして同居	16.18	2.96	3.85	1.96	0.88	4.62	0	8.47	1.69	5.27	8.60
5.「各管各」親子の関係なく各自が自分の生活を賄う	5.15	16.30	20.00	33.33	29.20	50.77	38.96	9.32	11.86	23.08	23.66
6.その他	2.21	15.56	1.54	1.96	32.74	10.77	3.90	3.39	0	8.96	10.75

注:この表は四川省社会科学院社会学研究所編『四川省農村家庭調査資料集』に基づいて作成したものである。県名の下欄では、それぞれ四川省内の地理的位置を示しており、距離的にみて、本調査地豊都県にもっとも近いのは、同じ涪陵地区に所属する南川県である。